三木市文化研究資料第 27 集

大塚出張遺跡（おおつかでは り）

－特別養護老人ホームえびすの郷建設に伴う発掘調査報告書－

平成 26 年（2014）３月

三木市教育委員会

社会福祉法人一陽会

序

播磨東端部に位置する三木市は、加古川より分かれ市内を東西に貫流する美嚢川の豊かな恵みにより、太古より多くの人々が生活を営み、特色ある歴史や文化を育んできました。

特に、大塚地区周辺は、古代から中世にかけて数多くの遺跡が確認されており、近世においては、在郷町である三木町に組み込まれるなど、長い間にわたり人々の営みが育まれてきました。

さて、今回、大塚出張遺跡において、社会福祉法人一陽会による特別養護老人ホームえびすの郷の建設が計画されたことから、発掘調査を実施し、郷土の貴重な文化財として、記録を残すこととなりました。

今回の調査成果が、貴重な研究資料として、多くの人々に活用されることは、誠に意義深くうれしい限りであります。

最後になりましたが、今回の調査の計画から実施、報告書の刊行に至るまで、ご協力をいただいた関係各位に感謝申し上げますとともに、社会福祉法人一陽会様には、多大なる調査協力をしていただきましたことに対し、厚くお礼を申し上げます。

平成２６年３月

三木市教育長　松本　明紀

完掘状況全景（南西上空から）

遺構検出状況全景（北東から）

完掘状況全景（北東から）

Ｓ71－１・２検出状況（東から）

Ｓ71－１　遺物出土状況（東から）

S71－2　遺物出土状況（東から）

S71－1　土層断面（南から）

例　言

1　本書は、社会福祉法人一陽会による特別養護老人ホームえびすの郷建設に伴い、平成22年度に発掘調査を実施した、大塚出張遺跡の発掘調査報告書である。

2　発掘調査は、社会福祉法人一陽会の依頼を受けて、三木市教育委員会が実施した。

3　発掘調査の掘削及び空中写真・測量、その他調査に係る工事全般については、社会福祉法人一陽会と請負契約を結んだ株式会社マツダ建設（兵庫県三田市）が担当した。

4　整理作業及び報告書作成は、平成24年度・25年度の２ヶ年度にわたり、社会福祉法人一陽会の依頼を受けて、三木市教育委員会が実施した。

5　発掘調査及び整理作業・報告書作成にあたり、社会福祉法人一陽会がその費用を負担した。

6　調査主体：三木市教育委員会。各年度における調査体制は、次のとおりである。

平成22年度

［事務局］教育長　松本明紀、教育部長　篠原政次、文化スポーツ振興課長　松村正和、主査　廣井愛邦、主任　小網豊

［調査担当］文化スポーツ振興課主事　金松誠

平成24年度

［事務局］教育長　松本明紀、教育部長　椿原豊勝、文化スポーツ振興課長　松村正和、主査　廣井愛邦、主任　小網豊

［調査担当］文化スポーツ振興課主事　金松誠

平成25年度

［事務局］教育長　松本明紀、教育部長　山本公大、文化スポーツ振興課長　松村正和、主査　廣井愛邦

［調査担当］文化スポーツ振興課主事　金松誠

7　本書の編集、執筆については、金松誠がおこなった。ただし、第３章第４節の自然科学分析については、パリノ・サーヴェイ株式会社がおこなった。

8　遺物の実測・トレースは、株式会社アコードに委託した。その他の挿図のトレースは金松誠・赤松恵子・宮脇美佳江・舟坂祐香がおこなった。

9　自然科学分析は、パリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。

10　遺物の写真撮影は金松誠がおこなった。

11　本書に使用した地図は、三木市発行の1/10000及び1/2500都市計画図である。

12　本書における方位・座標はすべて世界測地系によるものを示す。方位は座標北を表し、レベル高はすべて海抜高（Ｔ．Ｐ）を表す。

13　本書記載の遺物実測図の断面は、土師器・土師質系のものー白、須恵器・須恵質系のものー黒、陶磁器系のものー灰色とした。

14　発掘調査で得た出土遺物及び図面・写真は三木市教育委員会において保管している。

15　発掘調査及び整理作業にあたっては、下記の機関・諸氏にご指導、ご協力いただいた。記して感謝の意を表します。（敬称略・順不同）

社会福祉法人一陽会、兵庫県教育委員会文化財課、西阪義雄、岡田章一、大村喬、濱野俊一、波多野篤

目　　次

巻頭図版
序
例言
第１章　遺跡をとりまく環境
　第１節　地理的環境・・・

挿図目次

図１　大塚出張遺跡　位置図・・２
図２　周辺遺跡分布図・・３
図３　確認調査範囲図・・６
図４　確認調査グリッド配置図・・６
図５　確認調査グリッド柱状図・・７
図６　本発掘調査位置図・・９
図７　調査区平面図・・１１
図８　北壁土層断面図・・１２
図９　東壁土層断面図・・１３
図10　南壁土層断面図・・１４
図11　西壁土層断面図・・１５
図12　Ｓ５　平面・断面図・・１６
図13　Ｓ28　平面・断面図・・１７
図14　Ｓ52・109　平面・断面図・・１８
図15　Ｓ54・55・161　平面・断面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２０
図16　Ｓ70　平面・断面図・・２１
図17　Ｓ71　平面図・・２３
図18　Ｓ71　断面図・・２４
図19　Ｓ71－１・２　平面図（炭化層上面）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２５
図20　Ｓ71－１・２　平面図（整地土上面）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２６
図21　Ｓ71－３　平面図・・・２７
図22　Ｓ72・110　平面・断面図　２９
図23　Ｓ73　断面図・・３１
図24　Ｓ162　平面図・・・３３
図25　出土遺物①（S＝1/3）・・３４
図26　出土遺物②（S＝1/3）・・３６
図27　出土遺物③（S＝1/3）・・３７
図28　出土遺物④（S＝1/3）・・３８
図29　出土遺物⑤（S＝1/3）・・３９
図30　出土遺物⑥（S＝1/3）・・４２
図31　出土遺物⑦（S＝1/3）・・４３
図32　出土遺物⑧（S＝1/3）・・４５
図33　出土遺物⑨（S＝1/3）・・４６
図34　Ｓ71－１・２　平面図（自然科学分析試料）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・５７
図35　炭化材・出土骨分析写真・・・５８
図36　石材分析写真・・・５９

表目次

表１　出土遺物観察表①・・・４８
表２　出土遺物観察表②・・・４９

表３　出土遺物観察表③・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・５０
表４　出土遺物観察表④・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・５１
表５　樹種同定結果・・５３
表６　骨同定結果・・・５３
表７　石材の構成物量比・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・５４

図版目次

巻頭図版１　完掘状況全景（南西上空から）
巻頭図版２　遺構検出状況全景（北東から）
　　完掘状況全景（北東から）
巻頭図版３　Ｓ71－１・２検出状況（東から）
　　Ｓ71－１遺物出土状況（東から）
巻頭図版４　Ｓ71－２遺物出土状況（東から）
　　Ｓ71－１土層断面（南から）

図版１　確認調査①
図版２　確認調査②
図版３　Ｓ５検出状況（南西から）
　　Ｓ５半截状況（南西から）
　　Ｓ28半截状況（南から）
図版４　Ｓ52・109畦a・b土層断面（東から）
　　Ｓ109畦a土層断面（東から）
　　Ｓ52・109畦b土層断面（東から）
図版５　Ｓ55・161畦a・Ｓ54・55畦b土層断面（西から）
　　Ｓ70検出状況（西から）
　　Ｓ70半截状況（西から）
図版６　Ｓ71－１流紋岩質凝灰岩出土状況（北西から）
　　Ｓ71－１下層高坏脚部（29）出土状況（北から）
　　Ｓ71－１動物骨片・炭化物検出状況（南東から）
図版７　Ｓ71－１・２全景（南から）
　　Ｓ71畦a土層断面（南から）
　　Ｓ71畦a東端土層断面（南から）
図版８　Ｓ71畦a西端土層断面（南から）
　　Ｓ71畦b土層断面（南から）
　　Ｓ71畦b東端土層断面（南から）
図版９　Ｓ71畦b中央土層断面（南から）
　　Ｓ71畦b西端土層断面（南から）
　　Ｓ71完掘状況全景（北西から）
図版10　Ｓ71完掘状況全景（南東から）
　　Ｓ71－３遺物出土状況（北西から）
　　Ｓ71－３遺物出土状況（33）（東から）
図版11　Ｓ71－３遺物出土状況（30・31・32）（東から）
　　Ｓ71－３畦c土層断面（南から）
　　Ｓ71－３畦d土層断面（南から）
図版12　Ｓ72・110畦a・b土層断面（西から）
　　Ｓ72・110畦a土層断面（南西から）
　　Ｓ72・110畦b土層断面（西から）
図版13　Ｓ73検出状況（北から）
　　Ｓ73完掘状況（北から）
　　Ｓ73検出状況（南東から）
図版14　Ｓ73完掘状況（南東から）
　　Ｓ73畦a土層断面（西から）
　　Ｓ73畦b土層断面（西から）
図版15　Ｓ75・76全景（北東から）
　　Ｓ75・76全景（南西から）
　　Ｓ75・76全景（北西から）
図版16　Ｓ75南壁土層断面（北から）
　　Ｓ86検出状況（北東から）
　　Ｓ86北東端検出状況（北東から）
図版17　Ｓ162遺物出土状況（北から）
　　北壁土層断面（南東から）
　　東壁土層断面（北西から）
図版18　南壁土層断面（北西から）
　　西壁南側土層断面（南東から）
　　西壁張出部土層断面（南東から）
図版19　出土遺物①
図版20　出土遺物②
図版21　出土遺物③
図版22　出土遺物④
図版23　出土遺物⑤
図版24　出土遺物⑥

第１章　遺跡をとりまく環境

第１節　地理的環境

三木市のある兵庫県は、瀬戸内海から日本海に渡って広がる県域である。三木市は、兵庫県の南東部に位置する内陸の都市である。平成 17 年 10 月に北東に隣接する美嚢郡吉川町と合併し新たな三木市となっている。東及び南は神戸市、南西は加古郡稲美町、西は加古川市、北西は小野市、北は加東市、北東は三田市と境界を接している。近世以前の旧分国では、播磨国美嚢郡に属する。

三木市の地形は、市域の大部分を丘陵・台地・平野で占め、わずかな山地とからなる。市の東部は帝釈山地さらには六甲山地へと続き市の西部は丘陵や台地が広がる。これらの山地や丘陵に水源を発した美嚢川や支流である志染川・小川川・淡河川などの美嚢川水系は西流し、別所町正法寺付近で加古川に合流する。加古川は瀬戸内海に注ぎ、古くから河川交通が盛んであった。市域はこれらの河川によって形成された沖積平野及び河岸段丘からなる。

丘陵と台地は、市北東部の美嚢川より北の小野丘陵、美嚢川と小川川に挟まれた吉川丘陵、小川川と志染川に挟まれた細川丘陵、志染川の南に展開する志染丘陵、志染川上流の帝釈山地、市西部の美嚢川南岸より明石市・加古郡稲美町へ広がる東播台地の 6 つの地域に分けられる。これらの丘陵や台地、河川の浸食作用によって形成された開析谷を縫うように有馬道・明石道・兵庫道・姫路道などの陸上交通が発達してきた。

第２節　歴史的環境

三木市において、最も古く人間の行動が確認できるのは旧石器時代である。美嚢川を望む段丘上の別所町和田の白長大神神社散布地、与呂木宮ノ元遺跡で後期旧石器が出土している。続く縄文時代は、志染町の窟屋 1 号墳下層や戸田遺跡で、土坑を検出し、その中から後期の土器が出土している。周辺の段丘上に旧石器及び縄文時代の遺跡が存在するものと思われる。

弥生時代は、市西部の美嚢川の北側丘陵で、年ノ神遺跡や和田神社遺跡などの中期から後期にかけての集落が確認されている。また、美嚢川と志染川が合流する東側段丘や志染川南側段丘でも、与呂木宮ノ元遺跡や与呂木大畑遺跡、宿原岡ノ下遺跡、小戸田遺跡などの中期から後期の集落が確認されている。

古墳時代になると、台地や斜面地、段丘の至るところに中期から後期にかけて数多くの古墳が築かれるようになる。美嚢川と加古川の合流地点、市西部の美嚢川に臨む南側及び北側丘陵、志染川の南側丘陵に集中している。前期には市内最大の全長 91ｍの前方後円墳である愛宕山古墳（三木市指定文化財）が築かれている。年ノ神６号墳からは三角板革綴短甲、窟屋１号墳では金銅装単鳳環頭太刀柄頭が出土しており、中央との繋がりが注目されている。集落は、西ヶ原遺跡とその西側段丘で久留美田井野遺跡が確認されている。

奈良時代以降、三木の特色となる窯業生産が始まる。最盛期は 12 世紀の平安時代後期鎌倉時代初期で、尊勝寺や鳥羽離宮などの院に関係する寺院や邸宅に瓦を供給していたことが確認されている。窯跡は、跡部・久留美・平井・与呂木・宿原に分布している。

南北朝時代には、古代からの名刹の伝承をもつ高男寺廃寺遺跡より、「貞和二季」（1346）銘の

図１　大塚出張遺跡　位置図

1. 大塚出張遺跡　2. 三木山１号墳　3. 三木城遺跡　4. 三木城新城遺跡　5. 三木城鷹尾山城遺跡　6. 大塚地獄谷池遺跡第１地点
7. 大塚地獄谷池遺跡第２地点　8. 大塚瓢箪池遺跡　9. 大塚遺跡　10. 恵比須駅東遺跡　11. 大塚下り松遺跡　12. 宿原六萬遺跡
13. 岩宮上畑ヶ遺跡第１地点　14. 岩宮上畑ヶ遺跡第２地点　15. 岩宮三割遺跡　16. 岩壷神社遺跡　17. 岩宮藪ノ下遺跡　18. 久留美遺跡
19. 久留美丈ノ越古墳　20. 与呂木宮ノ元遺跡　21. 与呂木大畑遺跡　22. 与呂木西界地遺跡　23. 与呂木東上野１号墳
24. 与呂木東上野２号墳　25. 与呂木東上野３号墳　26. 与呂木東上野４号墳　27. 与呂木東上野５号墳　28. 与呂木東上野６号墳
29. 与呂木通り池１号窯　30. 与呂木通り池２号窯　31. 与呂木通り池３号窯　32. 宿原寺ノ下遺跡　33. 宿原岡ノ下遺跡
34. 宿原六萬窯　35. 宿原寺ノ前遺跡　36. 宿原城跡　37. 宿原合ノ池遺跡　38. 宿原三味ノ下遺跡　39. 宿原土塁　40. 宿原大池遺跡
41. 宿原中世墓　42. 宿原１号窯　43. 宿原２号窯　44. 宿原３号窯　45. 宿原皿池散布地　46. 宿原惣添遺跡　47. 与呂木東上野散布地

図２　周辺遺跡分布図

入った瓦が出土している。また、三木合戦時の付城跡と考えられる和田村四合谷村ノ口付城跡からは、「嘉暦二年」（1327）銘の入った硯をはじめ、南北朝期の遺物が数多く出土していることから、暦応２年（1339）に南朝方の丹生山城を北朝方の赤松氏が攻めるために集結した「志染軍陣」の可能性が指摘されている。

室町時代になると播磨の守護を赤松氏が務めている。赤松満祐によって６代将軍足利義教が殺害された嘉吉の乱により、山名氏にその座を奪われた。応仁の乱の後、赤松氏は播磨の守護に復帰するが、やがて赤松氏に代わって実権を握っていくのは有力被官であった。その中の別所氏は、東播磨で勢力を持ち、則治が 15 世紀後半に三木を本拠地とし、三木城を築城したと考えられる。三木城は、本丸・二の丸・新城・鷹尾山城・宮ノ上要害からなる。本丸では二分する堀を確認し、二の丸からは備前焼大甕群や建物跡、堀などの遺構を確認している。

中国地方への勢力拡大を目指す織田信長は、毛利氏を攻める足掛かりとして天正５年（1577）に播磨攻めを家臣の羽柴秀吉に命じた。当初、別所氏の当主長治は織田方に味方していたが、天正６年（1578）３月に織田方を離反し、毛利方に与した。織田方は三木城を攻略するために三木城の周囲に付城群を築いて包囲し、兵糧攻めをおこなった。付城は毛利氏からの兵糧搬入を阻止するために、状況に応じて増やされ、40 余りの付城と南側の付城を繋ぐ土塁が築かれた。やがて、三木城内の兵糧が尽き、天正８年（1580）１月 17 日、城主長治が自刃して開城した。

その後、織田・豊臣の支配下となり、秀吉の家臣が相次いで城主となり、関ヶ原合戦後は、姫路城主池田氏の家臣が城主となって三木城は存続したが、江戸幕府による元和元年（1615）一国一城令の政策に伴って、廃城となった。以後、城下の三木町は在郷町と性格を変え、江戸時代中期以降多くの大工職人が三木町に移住し、大工道具の需要が増えたことで金物職人も増加していき、金物の町として繁栄し現在に至っている。

（参考文献）

兵庫県教育委員会　1996　『西ヶ原遺跡』　兵庫県文化財調査報告第 151 冊

1999　『久留美・跡部窯跡群』　兵庫県文化財調査報告第 186 冊

2002　『年ノ神古墳群』　兵庫県文化財調査報告第 234 冊

2002　『和田神社遺跡』　兵庫県文化財調査報告第 238 冊

2009　『窟屋 1 号墳』　兵庫県文化財調査報告第 353 冊

2012　『吉田住吉山遺跡』兵庫県文化財調査報告第 409 冊

三木市　1970　『三木市史』

三木市教育委員会　2000　『三木市埋蔵文化財発掘調査概要報告書』Ⅱ　三木市文化研究資料第 14 集

2001　『三木市遺跡分布地図』三木市文化研究資料第 17 集

2012　『三木城跡及び付城跡群総合調査報告書　総括編』三木市文化研究資料第 25 集

三木城跡及び付城跡群学術調査検討委員会　2010　『三木城跡及び付城跡群総合調査報告書』三木市文化研究資料第 23 集　三木市教育委員会

第２章　調査の経緯と経過

第１節　調査に至る経緯

１　調査の経緯

調査の経緯　　旧耕地に盛土造成された服部病院駐車場地内において、社会福祉法人一陽会（以下、「一陽会」と称する）による特別養護老人ホームえびすの郷建設計画が持ち上がり、平成 22 年７月、一陽会より、計画地内に埋蔵文化財包蔵地が存在するかどうかの照会があった。

計画地は、三木市遺跡分布地図によると、№391 の「大塚出張遺跡」の範囲内であった。そのため、事業に先立ってその内容を確認し、事業者と協議する資料を得るために、グリッドによる確認調査を実施することとなった。

第２節　確認調査

１　確認調査の経過

調査の経緯　　確認調査は、一陽会から確認調査の依頼を受け、三木市教育委員会を調査主体とし、実施することとなった。調査費は一陽会が全額負担した。

調査の経過　　建物建設地内（約 1,250 ㎡）において、確認調査を実施した。調査は平成 22 年 10 月 21 日に実施した。同日現地調査を終了し、現地の引き渡しを行った。

２　確認調査の方法（図３・４）

調査方法　　建物建設地内において、遺跡の内容を確認するため 11 箇所の調査グリッドを設定した。調査面積は 44 ㎡である。バックホーによる表土掘削後、人力による精査を行い、遺構・遺物の有無、土層の観察を行った。

記録作成　　平面図（１／20）と土層断面図を作成（１／20）。

３　調査の結果（図５）

調査所見　　当該地は、奈良・平安時代の遺物散布地とされている。調査の結果、東端～南東部分（Ｇ３・６・10・11）は谷地形となり遺構の広がりは確認できず、遺物の出土もほとんどみられなかったものの、それより西側においては、特に北半部（Ｇ１・２・４・５）では遺構・遺物が比較的多く確認でき、南半部（Ｇ７～９）においても遺物が確認できた。

遺跡の性格・時代については、Ｇ１からは柱穴、Ｇ２からは須恵器が埋納された柱穴、Ｇ４からは焼土遺構が検出され、大半のグリッドで須恵器片が出土しているほか、Ｇ５で青磁片が確認されたことから、主に平安～室町時代にかけての集落遺跡と想定される。

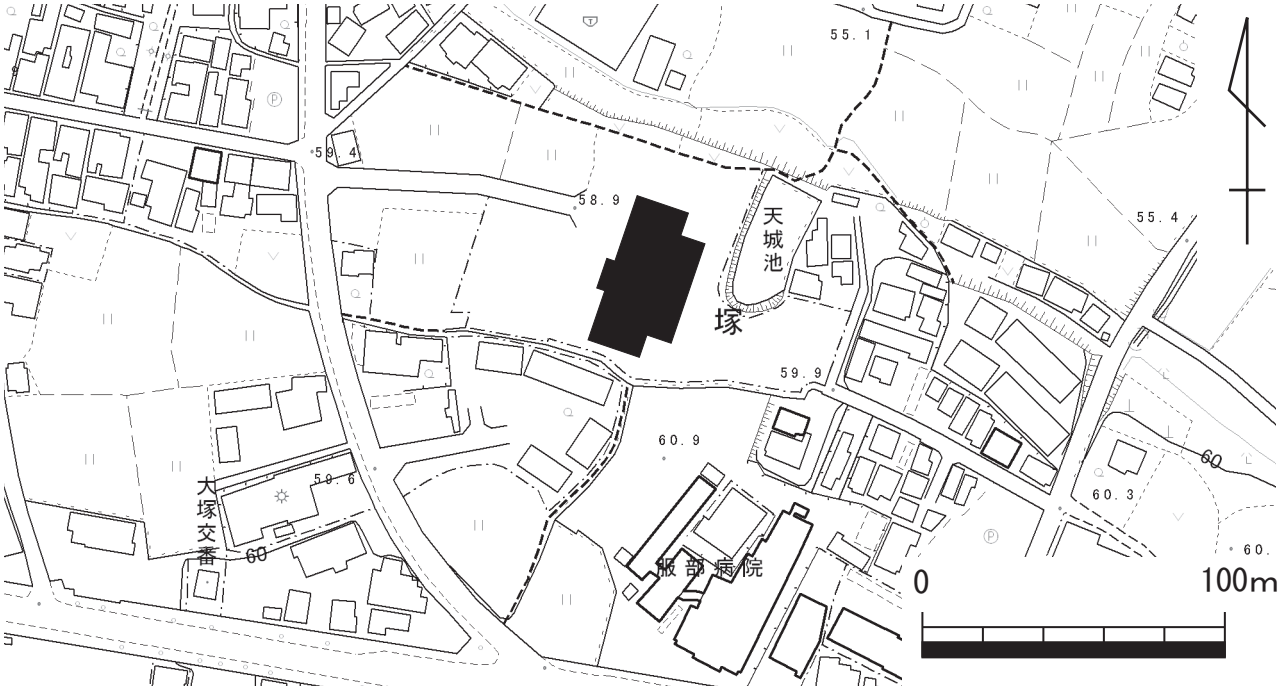


図３　確認調査範囲図

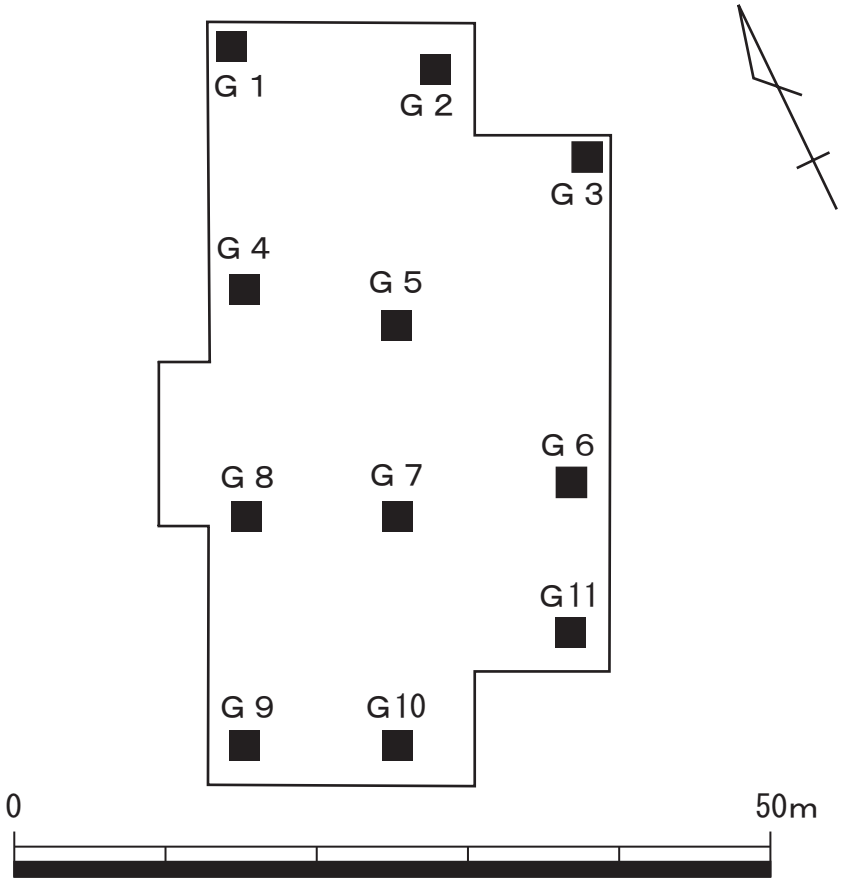
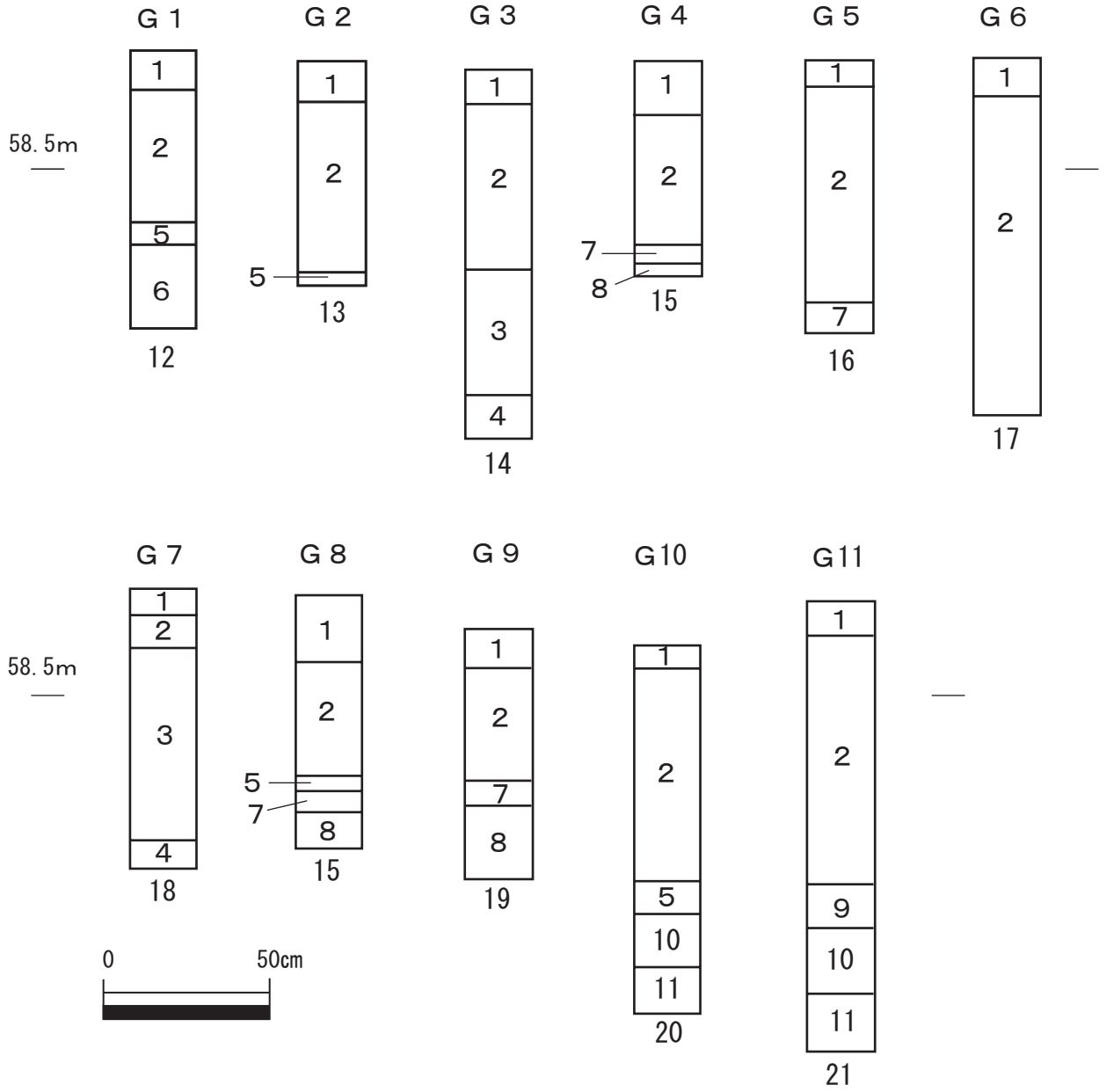


図４　確認調査グリッド配置図



1　バラス
2　客土
3　撹乱
4　10YR3/2 オリーブ黒色粘質土（粗砂含む）
5　旧耕作土
6　2.5Y5/3 黄褐色砂礫土
7　10YR5/4 にぶい黄褐色粘質土
8　10YR4/2 灰黄褐色粘質土
9　10YR5/2 灰黄褐色粘質土
10　10YR5/2 灰黄褐色粘質土(2cm程のMnを密に含む)
11　10YR5/2 灰黄褐色シルト質粘土(Feを密に含む)
12　10YR5/6 黄褐色砂礫土〈地山・遺構面〉
13　10YR4/6 にぶい黄褐色粘質土〈地山・遺構面〉
14　10YR5/8 黄褐色砂礫〈地山〉
15　2.5Y5/6 黄褐色粘質土〈地山・遺構面〉
16　2.5Y5/4 黄褐色粘質土（10YR5/6 黄褐色砂礫と混在）〈地山〉
17　2.5Y6/6 明黄褐色粘質土（礫を密に含む）〈地山〉
18　2.5Y5/3 黄褐色粘質土〈地山〉
19　10YR5/6 黄褐色粘質土〈地山〉
20　2.5Y4/3 オリーブ褐色砂礫（粘質土含む）〈地山〉
21　10YR4/4 褐色粘質土（礫含む）〈地山〉

図５　確認調査グリッド柱状図

第３節　本発掘調査の経過

１　全体計画（図６）

調査対象　　確認調査の結果に基づき、一陽会とその取り扱いについての協議を行った。その結果、工事による遺跡の消滅は不可避となったため、工事掘削範囲のうち、遺構が確認できなかった東側張出部を除く、面積 931 ㎡を対象として、本発掘調査を実施することとなった。

２　調査経過

調査依頼　　本発掘調査は一陽会からの調査依頼を受け、三木市教育委員会を調査主体とし実施することとなった。発掘調査の掘削及び空中写真・測量、その他調査に係る工事全般については、一陽会が株式会社マツダ建設と請負契約を結んだ。なお、調査費は一陽会が全額負担した。

現地調査　　現地調査は平成 23 年１月 11 日より開始した。２月 26 日をもって、現地調査を終了し、現地を引き渡した。

現場公開　　平成 23 年２月 19 日午後２時～午後３時まで、大塚地区の住民を対象として、発掘現場を公開し、説明を行った。

第４節　整理調査の経過

１　全体計画

経過　　整理調査については、本発掘調査終了後、一陽会とその取り扱いについての協議を行った。協議を重ねた結果、調査費は一陽会が全額負担のもと、平成 24 年度～平成 25 年度の２ヵ年計画で順次調査を実施することで覚書を交わした。そして、各年度の整理調査事業について、別途覚書を交わすこととした。

２　平成 24 年度

調査依頼　　平成 24 年度の整理調査は、一陽会と覚書を交わし、実施した。

作業内容　　平成 24 年度の整理調査は、遺物については、洗浄・注記・接合・実測遺物の抽出・実測・拓本・トレースを実施した。実測・拓本・トレースは、株式会社アコードに委託して行った。

炭化材の樹種同定・石材の鑑定・骨の種類同定については、パリノサーヴェイ株式会社に委託して行った。

３　平成 25 年度

調査依頼　　平成 25 年度の整理調査は、一陽会と覚書を交わし、実施した。

作業内容　　平成 25 年度の整理調査は、遺構については、トレース及び図版作成・写真図版作成を実施した。遺物については、復元及び図版作成・写真撮影・写真図版作成を実施した。そして、報告書の執筆編集を行い、本報告書を平成 25 年３月に刊行した。

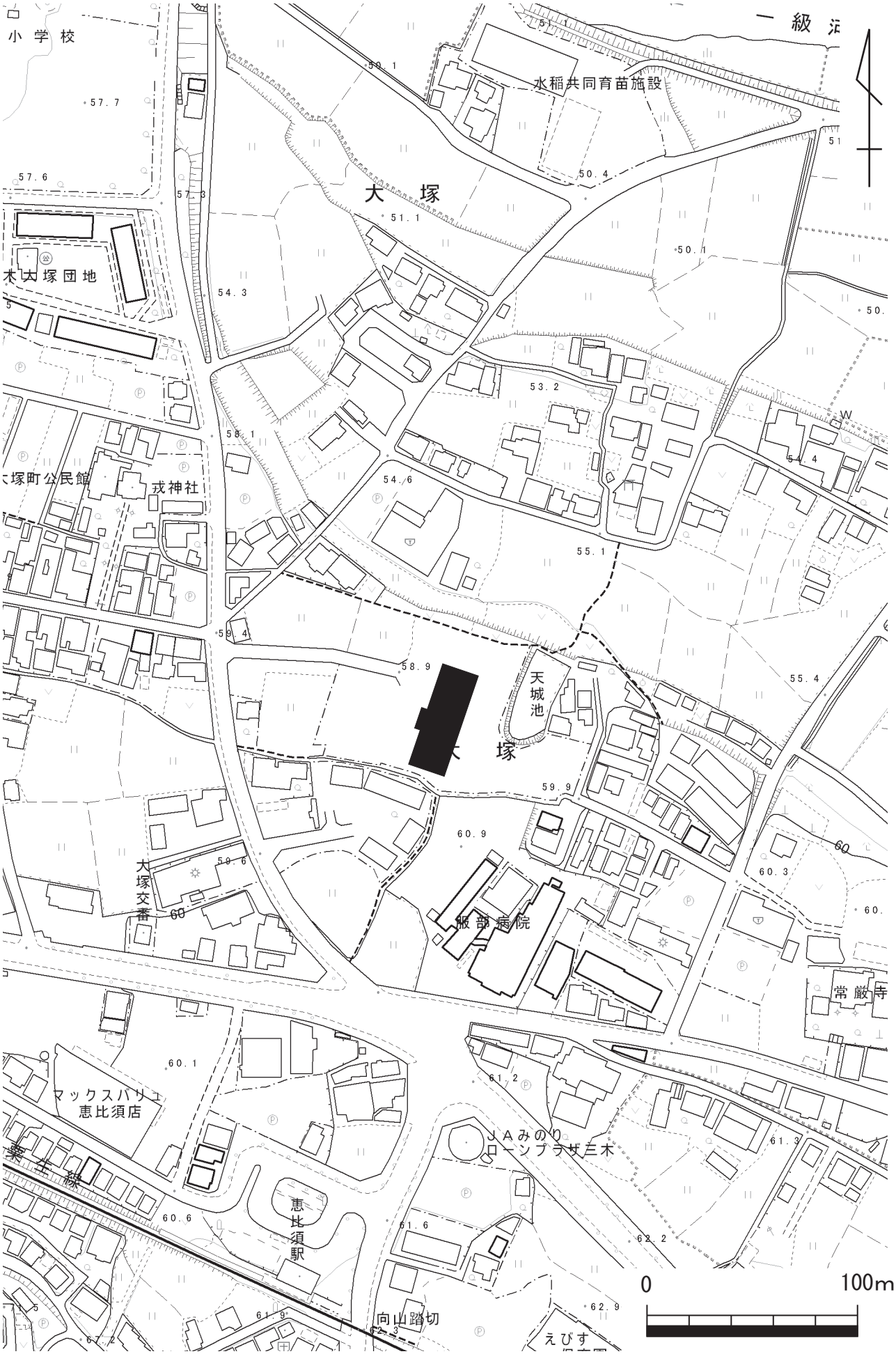

小学校
水稲共同育苗施設
大塚
木大塚団地
大塚町公民館
戎神社
天城池
大塚
大塚交番
服部病院
常厳寺
マックスバリュ
恵比須店
JAみのり
ローンプラザ三木
恵比須駅
向山踏切
えびす
0
100m

図６　本発掘調査位置図

第３章　大塚出張遺跡の調査

第１節　調査の概要

１　大塚出張遺跡の立地

遺跡が位置する大塚は市域の中央部に近く、志染川によって形成された氾濫原・河岸段丘上に位置している。西流する志染川が与呂木集落に沿って南下し、宿原から岩宮にかけて大きく北へ蛇行し、美嚢川へと合流している。今回の調査地点は、志染川左岸にあたり、氾濫原よりも高い段丘の縁辺部に位置している。

２　調査の方法

調査の方法　　バックホーにより表土を除去した後、人力により、遺構面及び壁面を精査し、遺構検出、遺構掘削、土層の観察を行った。

記録作成　　平面図はクレーンを用いた写真測量を行ったほか、遺物出土状況等については手実測（1/10）を行った。断面図（1/20）は手実測を行った。

３　調査の概要（図７）

調査区の規模　　南北 50m×東西 18m、西側張出部南北約 10.4m×東西３mの調査区を設定した。調査面積は 931 ㎡である。

主要遺構　　検出した主な遺構は、焼土遺構２基とそれに伴う落ち込み・溝、柱穴、土坑、遺物包含層である。これらの時期は、焼土遺構関連は７世紀第２四半期、その他は主に 12 世紀頃とみられ、一部中近世の遺構が確認できる。用水路は 12 世紀後半以降～2005 年、礫敷き暗渠は近世以降のものである。

４　基本層序

標高　　遺構面は標高 57.6m～58.1mを測る。用水路以東の一段低い箇所が一番低くなっている。用水路以西の標高は 57.9～58.1mである。

基本層序　　基本層序は地表より、バラス（５～20 ㎝）、駐車場造成土（40～80 ㎝）、耕土（５～10 ㎝）、床土（５～10 ㎝）、遺構面ベース土である。遺構面は駐車場造成前の段階では、浅いレベルであったことから、後世の削平を受けていたとみられる。

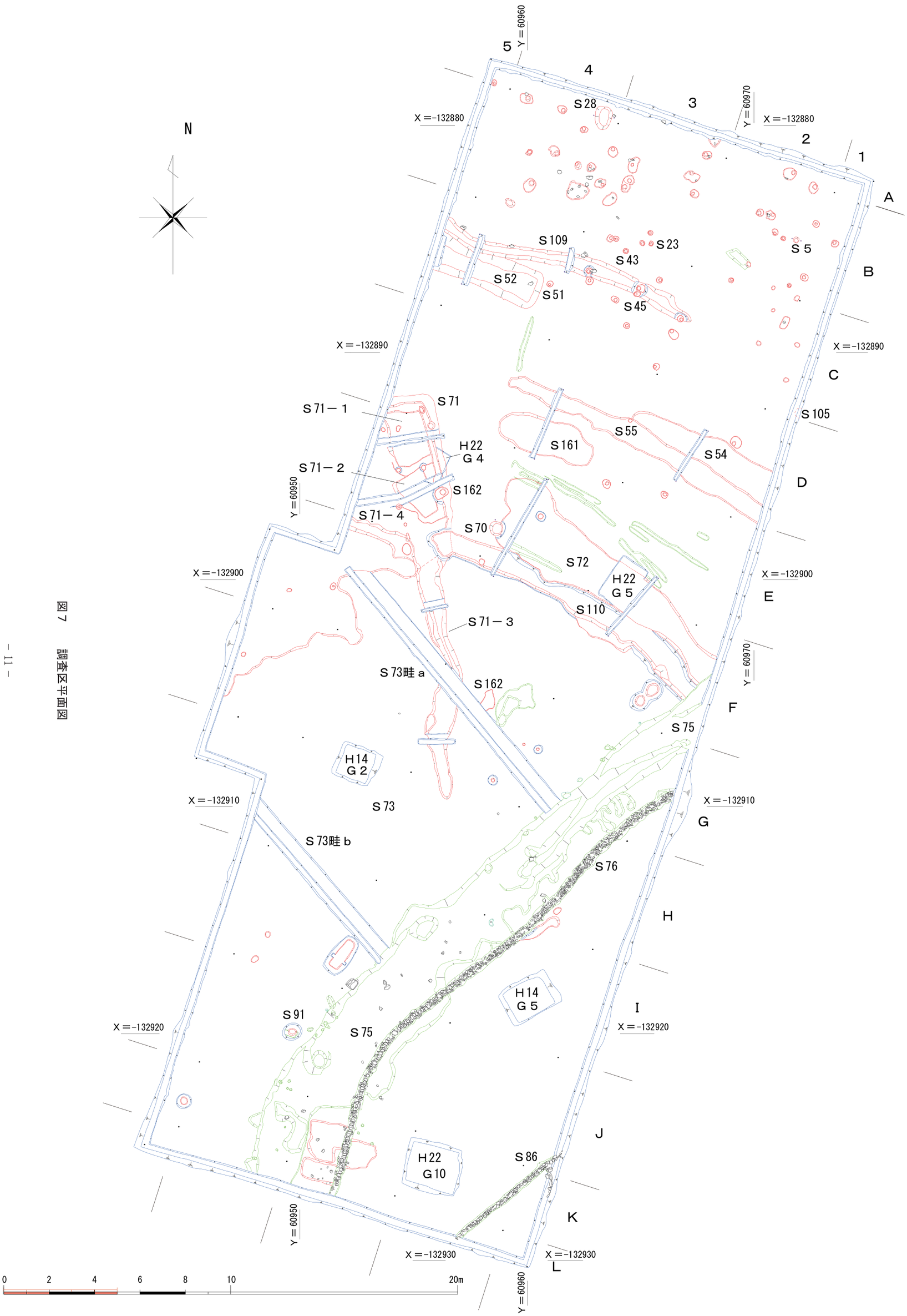
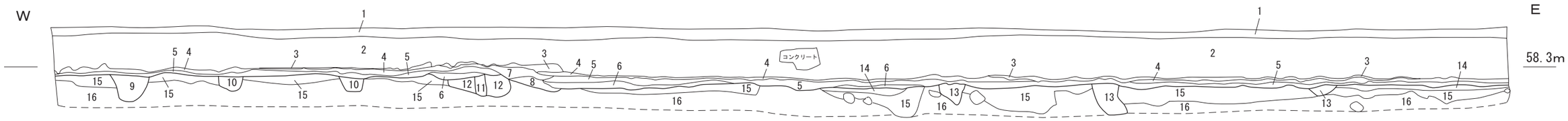
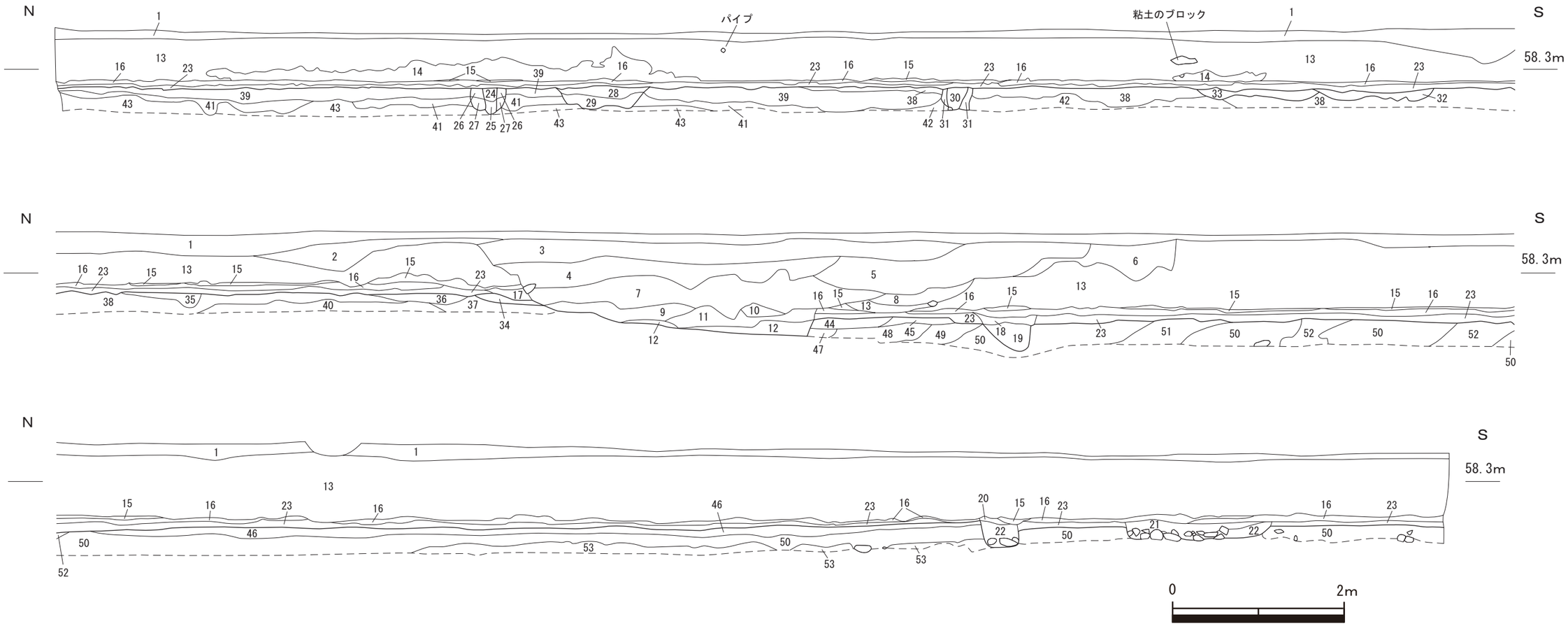

N
5
4
3
2
1
A
B
C
D
E
F
G
H
I
J
K
L
Y＝60960
Y＝60970
Y＝60950
X＝-132880
X＝-132890
X＝-132900
X＝-132910
X＝-132920
X＝-132930
S28
S109
S23
S43
S5
S52
S51
S45
S71
S71－1
H22
G4
S71－2
S162
S71－4
S70
S161
S55
S54
S105
S72
H22
G5
S110
S71－3
S73畦a
S162
H14
G2
S73
S73畦b
S75
S76
H14
G5
S91
S75
H22
G10
S86
0
2
4
6
8
10
20m

図7　調査区平面図



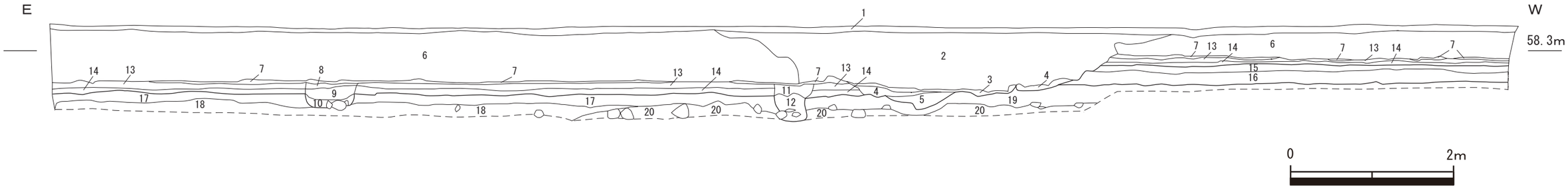
1	バラス			
2	客土			
3	5Y3/1	オリーブ黒色砂質土		〈耕土〉
4	5Y5/2	灰オリーブ色砂質土		〈耕土〉
5	2.5Y4/4	オリーブ褐色粘質土		〈床土〉
6	10YR5/2	灰黄褐色砂質土		〈旧耕土〉
7	10YR5/2	灰黄褐色粘質土		〈耕作畦〉
8	2.5Y5/3	黄褐色砂礫	(3～8cm程の礫が主体)	〈耕作畦〉
9	2.5Y4/2	灰黄褐色砂質土	(15を密に含む)	〈ピット〉
10	2.5Y4/3	オリーブ褐色粘質土	(5cm程の礫を含む)	〈ピット〉
11	2.5Y5/2	暗灰黄色粘質土		〈柱痕〉
12	10YR5/3	にぶい黄褐色粘質土	(16を含む)	〈堀形〉
13	10YR4/2	灰黄褐色粘質土		〈ピット〉
14	10YR4/4	褐色砂質土	(固く締まる、Mn密に含む)	〈遺構面ベース土〉
15	2.5Y5/2	暗灰黄色砂礫	(16を密に含む)	〈遺構面ベース土〉
16	10YR5/8	黄褐色砂礫	(1～10cm程の礫が主体)	〈地山?〉

図８　　北壁土層断面図



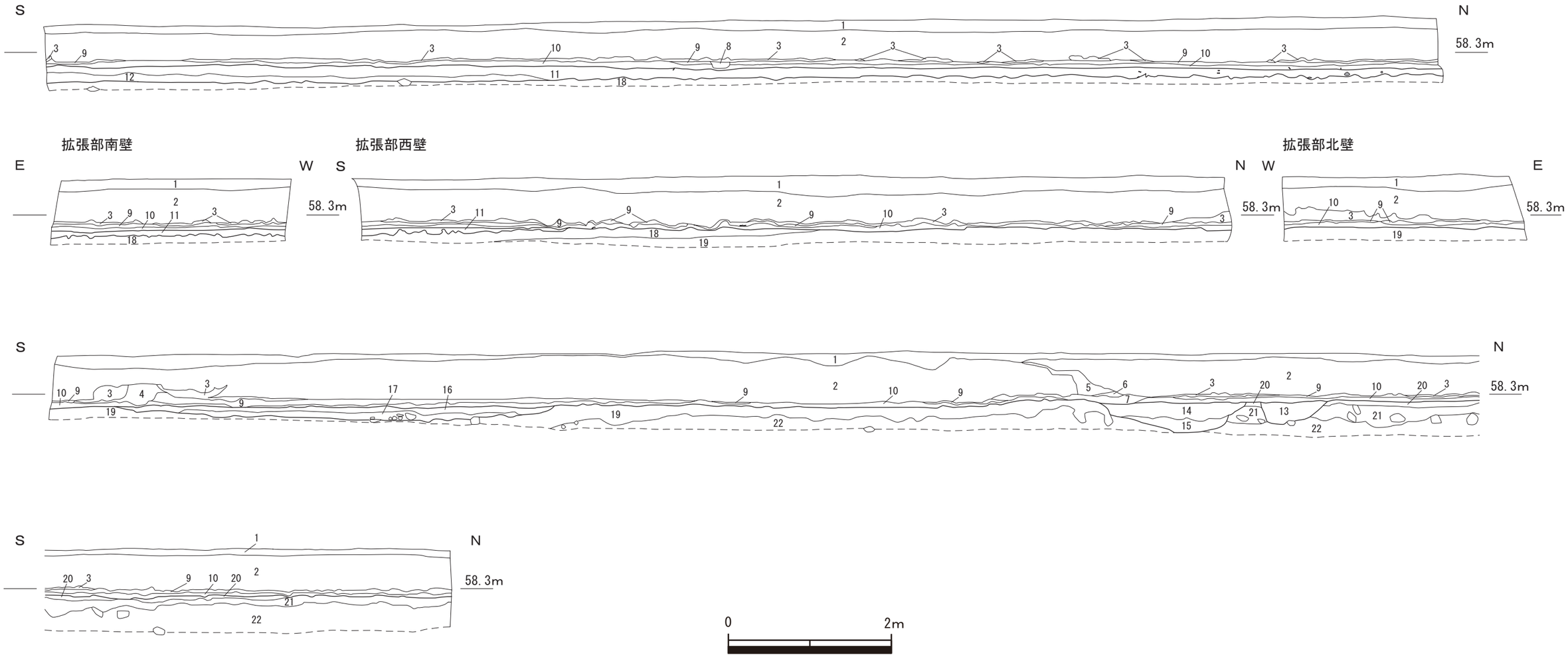
1	バラス			
2	客土			
3	客土			〈S75〉
4	客土			〈S75〉
5	客土			〈S75〉
6	客土			〈S75〉
7	客土			〈S75〉
8	客土			〈S75〉
9	客土			〈S75〉
10	客土			〈S75〉
11	2.5Y3/1	黒褐色シルト質粘土	(軟質)	〈S75〉
12	2.5GY5/1	オリーブ灰色微砂		〈S75〉
13	客土			
14	5Y4/2	灰オリーブ色砂質土		〈耕土〉
15	5Y3/1	オリーブ黒色砂質土		〈耕土〉
16	5Y5/2	灰オリーブ色砂質土		〈耕土〉
17	2.5Y5/3	黄褐色粘質土		〈旧耕土〉
18	2.5Y5/4	黄褐色砂質土	(2mm程の礫を含む)	〈S76〉
19	2.5Y4/1	黄灰色粘質土	(粘性が強い、5～15cm程の礫を密に含む)	〈S76〉
20	5Y5/1	灰色砂質土		〈S86〉
21	2.5Y5/2	暗灰黄色砂質土	(53を含む)	〈S86〉
22	2.5Y4/1	黄灰色粘質土	(10cm程の礫を含む)	〈S86〉
23	2.5Y4/4	オリーブ褐色粘質土		〈床土〉
24	2.5Y4/2	暗灰黄色粘質土	(39を含む)	〈柱痕〉
25	2.5Y4/2	暗灰黄色粘質土	(43を密に含む)	〈柱痕〉
26	10YR5/3	にぶい黄褐色粘質土	(39を含む)	〈堀形〉
27	10YR5/3	にぶい黄褐色粘質土	(43を密に含む)	〈堀形〉
28	10YR5/2	灰黄褐色粘質土	(39を含む)	〈土坑？〉
29	10YR4/4	褐色粘質土	(28をまばらに含む)	〈土坑？〉
30	10YR5/2	灰黄褐色砂質土	(軟質)	〈S110 柱痕〉
31	10YR5/3	にぶい黄褐色砂質土	(42を密に含む)	〈S110 堀形〉
32	2.5Y6/2	灰黄色砂質土	(2～10mm程の礫を含む)	〈S55〉
33	2.5Y5/2	暗灰黄色粘質土	(2mm程の礫を含む)	〈S54〉
34	2.5Y4/2	暗灰黄色粘質土	(Mnを密に含む、2mm～3cm程の礫を含む)	〈S72〉
35	2.5Y5/6	黄褐色粘質土	(軟質、Mnを含む)	〈遺構面ベース土〉
36	10YR5/3	にぶい黄褐色粘質土	(固く締まる、1～5cm程の礫を密に含む)	〈遺構面ベース土〉
37	2.5Y5/6	黄褐色粘質土	(3～10cm程の礫を密に含む)	〈遺構面ベース土〉
38	2.5Y5/2	暗灰黄色砂質土	(固く締まる、5mm～3cm程の礫を密に含む)	〈遺構面ベース土〉
39	10YR4/4	褐色砂質土	(固く締まる、Mnを密に含む)	〈遺構面ベース土〉
40	2.5Y5/4	黄褐色砂礫	(1～3cm程の礫が主体)	〈遺構面ベース土〉
41	2.5Y5/2	暗灰黄色砂礫	(43を密に含む)	〈遺構面ベース土〉
42	2.5Y6/3	にぶい黄色砂礫	(1～7cm程の礫が主体)	〈地山？〉
43	10YR5/8	黄褐色砂礫	(1～10cm程の礫が主体)	〈地山？〉
44	10YR4/3	にぶい黄褐色粘質土		〈遺構面ベース土〉
45	2.5Y5/2	暗灰黄色粘質土	(軟質)	〈遺構面ベース土〉
46	2.5Y4/6	オリーブ褐色粘質土	(1cm程のMnを密に含む)	〈遺構面ベース土〉
47	5Y5/2	灰オリーブ色粘質土		〈遺構面ベース土〉
48	10YR4/2	灰黄褐色粘質土		〈遺構面ベース土〉
49	2.5Y4/6	オリーブ褐色砂質土	(2～5mm程の礫を密に含む、固く締まる)	〈遺構面ベース土〉
50	10YR5/2	灰黄色粘質土	(2cm程のMnを密に含む)	〈遺構面ベース土〉
51	10YR5/6	黄褐色砂質土	(2cm程のMnを密に含む、2～5mm程の礫を含む)	〈遺構面ベース土〉
52	10YR5/6	黄褐色粘質土	(2cm程のMnを密に含む)	〈遺構面ベース土〉
53	10YR5/2	灰黄褐色シルト質粘土	(Feを密に含む)	〈遺構面ベース土〉

図９　東壁土層断面図



1	バラス			
2	客土			〈S75〉
3	客土			〈S75〉
4	2.5YR4/1	黄灰色シルト質粘土		〈S75〉
5	2.5YR4/1	黄灰色シルト質粘土	(2 ～ 5mm 程の礫を含む)	〈S75〉
6	客土			
7	5Y3/1	オリーブ黒色砂質土		〈耕土〉
8	5Y5/1	灰色砂質土		〈S86〉
9	2.5Y5/2	暗灰黄色砂質土	(18 を含む)	〈S86〉
10	2.5Y4/1	黄灰色粘質土	(10cm 程の礫を含む)	〈S86〉
11	2.5Y5/4	黄褐色砂質土	(2mm 程の礫を含む)	〈S76〉
12	2.5Y4/1	黄灰色粘質土	(粘性強い、5 ～ 15cm 程の礫を蜜に含む)	〈S76〉
13	5Y5/2	灰オリーブ 色砂質土		〈耕土〉
14	2.5Y4/4	オリーブ褐色粘質土		〈床土〉
15	10YR5/3	にぶい黄褐色粘質土	(Mn を蜜に含む)	〈S73〉
16	10YR5/3	にぶい黄褐色粘質土	(Mn を含む、15 より粘質)	〈S73〉
17	10YR5/2	灰黄色粘質土	(2cm 程の Mn を蜜に含む)	〈遺構面ベース土〉
18	10YR5/2	灰黄褐色シルト質粘土	(Fe を蜜に含む)	〈遺構面ベース土〉
19	10YR5/8	黄褐色粘質土	(Mn を含む)	〈遺構面ベース土〉
20	10YR5/2	灰黄褐色砂礫	(5 ～ 15cm 程の礫が主体)	〈地山？〉

図 10　南壁土層断面図



1	バラス		
2	客土		
3	5Y3/1	オリーブ黒色砂質土	〈耕土〉
4	5Y5/2	灰オリーブ砂質土	〈耕作畦〉
5	5Y3/2	オリーブ黒色砂質土（粘土ブロックを含む）	〈現代畦〉
6	5Y4/1	灰色砂質土	〈耕作畦〉
7	5Y5/2	灰オリーブ色砂質土	〈耕作畦〉
8	5Y5/2	灰オリーブ色砂質土	〈近世？素掘小溝〉
9	5Y5/2	灰オリーブ色砂質土	〈耕土〉
10	2.5Y4/4	オリーブ褐色粘質土	〈床土〉
11	10YR5/3	にぶい黄褐色粘質土（Mn を密に含む）	〈S73〉
12	10YR5/3	にぶい黄褐色粘質土（Mn を含む、11 より粘質）	〈S73〉
13	10YR5/6	黄褐色粘質土（粗砂をわずかに含む、Mn を含む）	〈S109〉
14	2.5Y5/2	暗灰黄色砂質土（Fe を密に含む）	〈S52〉
15	2.5Y5/6	黄褐色砂質土（22 を密に含む、14 をブロック状に含む）	〈S52〉
16	2.5Y5/2	暗灰黄色粘質土（Mn,Fe を含む）	〈S71〉
17	2.5Y5/2	暗灰黄色粘質土（Mn,Fe を含む、16 より粘質）	〈S71〉
18	10YR5/8	黄褐色粘質土（Mn を含む）	〈遺構面ベース土〉
19	5Y6/2	灰オリーブ色砂質土（2 cm程の Mn を密に含む、Fe を含む）	〈遺構面ベース土〉
20	2.5Y5/3	黄褐色砂質土（1 cm程の Mn を密に含む）	〈遺構面ベース土〉
21	2.5Y5/2	暗灰黄色砂礫（22 を密に含む）	〈遺構面ベース土〉
22	10YR5/8	黄褐色砂礫（1 ～ 10 cm程の礫が主体）	〈地山？〉

図 11　西壁土層断面図

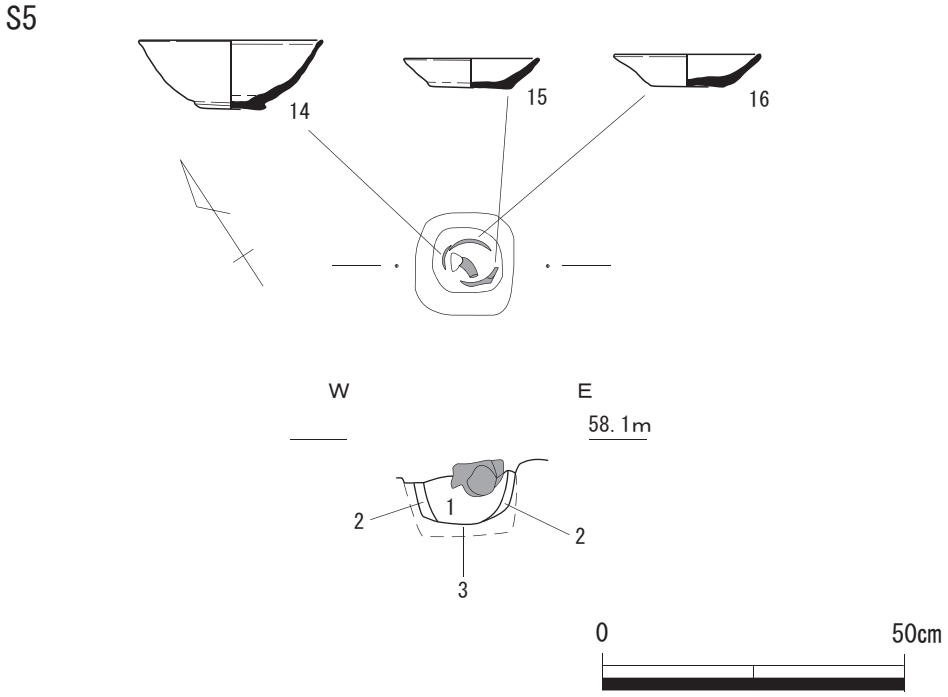
第２節　遺構

Ｓ５（図 12）

概要	調査区北東側で検出した柱穴である。
規模・形態	隅丸方形を呈し、一辺 0.16m、深さ 0.1mを測る。
堆積状況	埋土は、にぶい黄褐色の柱痕と掘形の黄褐色粘質土に分けられる。
遺物出土状況	柱痕より須恵器埦（14）・皿（15）・皿（16）が良好な状態で出土した。
遺構の時期	出土遺物から判断して、12 世紀前半のものと考えられる。

Ｓ23

概要	調査区北側中央で検出した柱穴である。
規模・形態	隅丸方形を呈し、一辺 0.2m、深さ 0.13mを測る。
遺物出土状況	須恵器埦の底部（17）と土師器細片が出土した。
遺構の時期	出土遺物から判断して、12 世紀のものと考えられる。



1　10YR4/3　にぶい黄褐色粘質土　（柱痕）
2　10YR5/6　黄褐色粘質土　（掘形）
3　10YR4/6　褐色粘質土　（1 ～ 5 ㎝ほどの礫を密に含む）＜遺構面ベース土＞

図 12　Ｓ５　平面・断面図

Ｓ28（図 13）

概要　　調査区北端の中央やや西側で検出した土坑である。

規模・形態　　楕円形を呈し、長径 1.0m、短径 0.6m、深さ 0.19mを測る。

堆積状況　　埋土は暗灰黄色砂質土である。

遺物出土状況　　須恵器埦の口縁部の細片が 1 点のみである。

遺構の時期　　出土遺物から判断して、12 世紀のものと考えられる。

Ｓ43

概要　　調査区北側中央で検出した柱穴である。

規模・形態　　円形を呈し、径 0.25m、深さ 0.09mを測る。

遺物出土状況　　土師器埦の口縁部（18）が出土した。

遺構の時期　　出土遺物から判断して、12 世紀のものと考えられる。

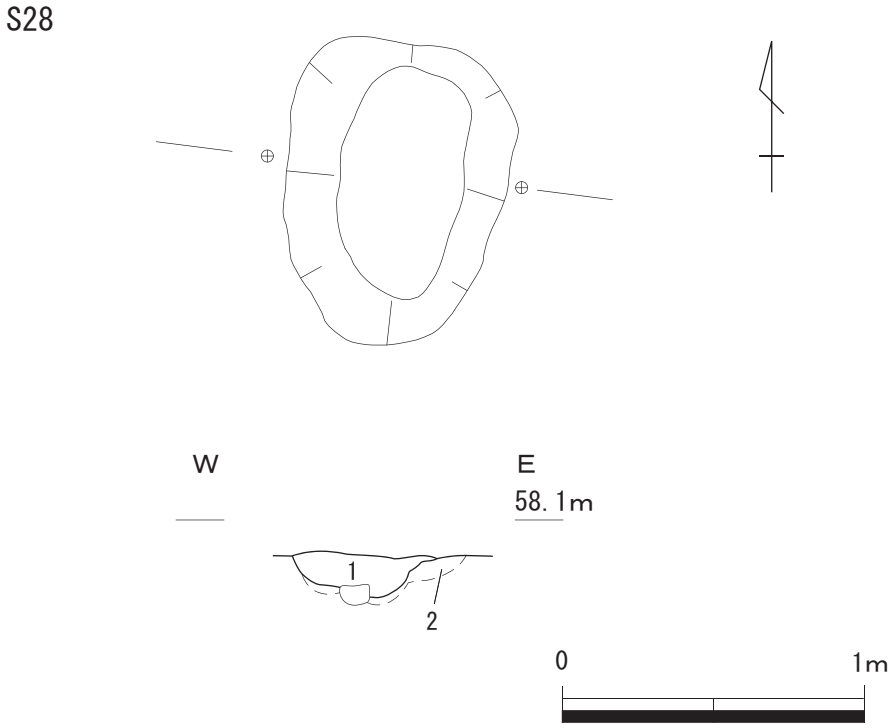
Ｓ45

概要　　調査区北側中央で検出した柱穴である。Ｓ109 を切っている。

規模・形態　　楕円形を呈し、長径 0.43m、短径 0.23m、深さ 0.1mを測る。

遺物出土状況　　須恵器埦の口縁部（19）が出土した。

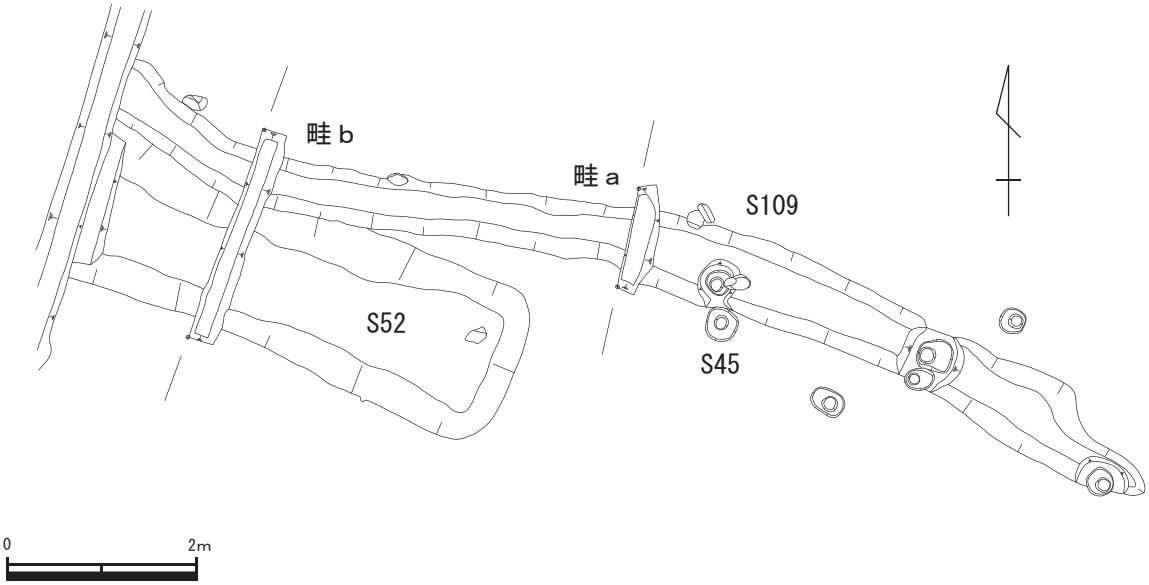
遺構の時期　　出土遺物から判断して、12 世紀のものと考えられる。

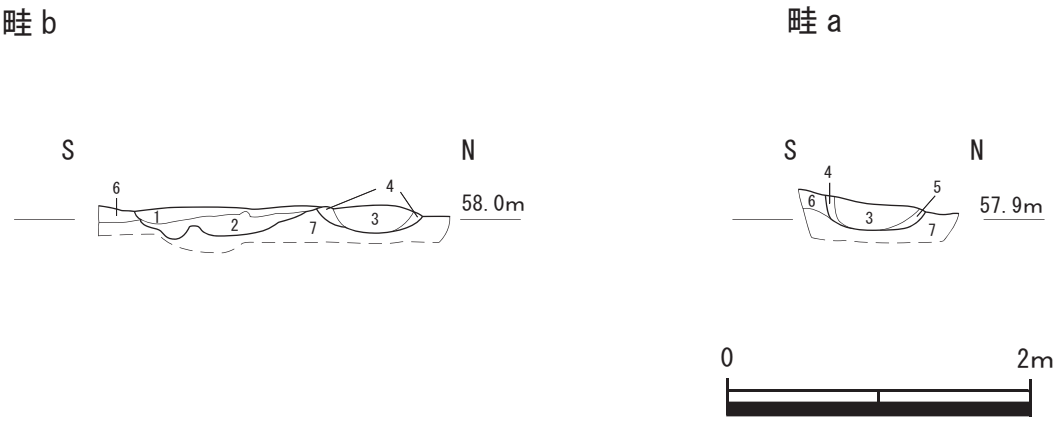


1　2.5Y5/2　暗灰黄色砂質土　（2 をブロック状に含む）

2　10YR5/8　黄褐色砂礫　　（1 ～ 10 ㎝程の礫が主体）

図 13　Ｓ28　平面・断面図





1	2.5Y5/2	暗灰黄色砂質土	(Fe を密に含む)	<S52>
2	2.5Y5/6	黄褐色砂質土	(7 を密に含む、1 をブロック状に含む)	<S52>
3	10YR5/6	黄褐色粘質土	(粗砂をわずかに含む、Mn を含む)	<S109>
4	2.5Y5/2	暗灰黄色砂質土	(6 をまばらに含む)	<S109>
5	2.5Y5/2	暗灰黄色粘質土		<S109>
6	2.5Y5/3	黄褐色砂質土	(7 をまばらに含む)	< 遺構面ベース土 >
7	10YR4/6	褐色砂礫	(2 ～ 8 cmの礫を密に含む)	< 地山 >

図 14　S52・109　平面・断面図

Ｓ51

概要　調査区北側中央やや西側で検出した柱穴である。

規模・形態　円形を呈し、径 0.4m、深さ 0.09mを測る。

遺物出土状況　須恵器甕の口縁部（20）、丹波焼擂鉢片（21）のほか、須恵器甕体部・埦口縁部・土師器の細片が出土した。

遺構の時期　丹波焼擂鉢片の時期から判断して、おおむね 18 世紀のものと考えられる。

Ｓ52（図 14）

概要　調査区北西側で検出した東西方向に調査区外へ延びる溝である。Ｓ109 を切っている。

規模・形態　幅 1.8m、長さ 5.2m以上、深さ 0.36mを測る。

堆積状況　上層の暗灰黄色砂質土と下層の黄褐色砂質土に分けられる。

遺物出土状況　土師器堝の口縁部（22）が出土した。

遺構の時期　出土遺物から判断して、15 世紀後半～16 世紀初頭頃のものと考えられる。

Ｓ109（図 14）

概要　調査区北西側で検出した東西方向に調査区外へ延びる溝である。Ｓ45 ほかの柱穴群、Ｓ52 に切られている。

規模・形態　幅 0.8m、長さ 12m以上、深さ 0.27mを測る。

堆積状況　上層の黄褐色粘質土と下層の暗灰色砂質土～粘質土に分けられる。

遺物出土状況　遺物は出土していない。

遺構の時期　Ｓ45 に切られていることから、その出土遺物から判断して 12 世紀以前のものと考えられる。

Ｓ54（図 15）

概要　調査区北東側で検出した東西方向に延びる浅い溝である。調査区外へ東に延びる。Ｓ55 に切られる。

規模・形態　幅 1.4m、長さ 14.5m以上、深さ 0.14mを測る。

堆積状況　埋土は灰黄色砂質土～暗灰黄色粘質土である。

遺物出土状況　遺物は出土していない。

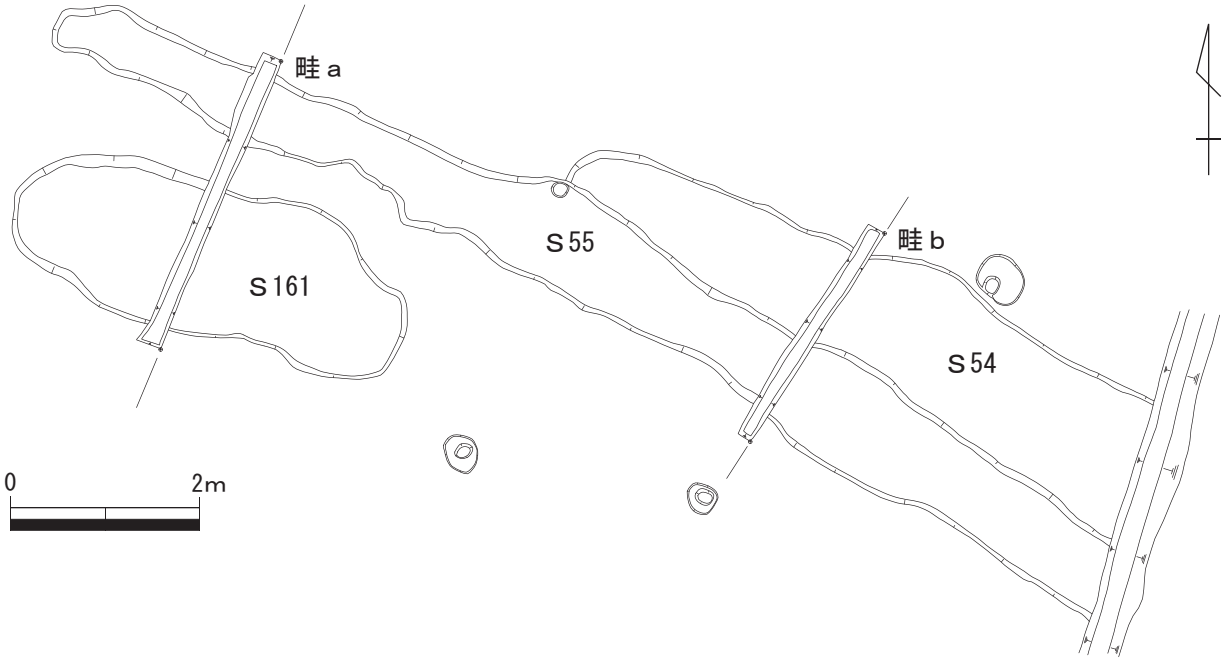
遺構の時期　Ｓ55 に切られていることから、Ｓ55 の時期（12 世紀）以前のものといえる。

Ｓ55（図 15）

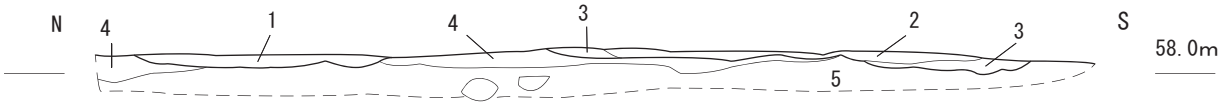
概要　調査区北東側で検出した東西方向に延びる浅い溝である。調査区外へ東に延びる。Ｓ54 を切っている。

規模・形態　幅 1.42m、長さ 13m以上、深さ 0.15mを測る。

堆積状況　埋土は灰黄色砂質土である。



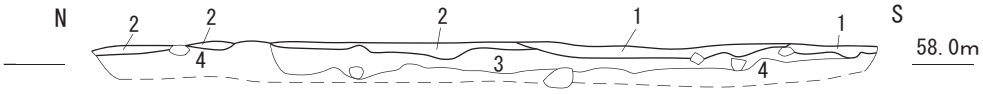
畦 a



1	2.5Y6/2	灰黄色砂質土	(2 ～ 10 ㎜程の礫を含む)	〈S55〉
2	10YR5/4	にぶい黄褐色粘質土	(2 ～ 5 ㎜程の礫をわずかに含む)	〈S161〉
3	2.5Y6/2	灰黄色砂質土	(粗砂を密に含む)	〈S161〉
4	2.5Y6/1	黄灰色細砂	(固く締まる、2 ～ 10 ㎜程の礫を含む)	< 遺構面ベース土 >
5	5Y6/2	灰オリーブ色粗砂	(1 ～ 10 ㎝程の礫を密に含む)	< 地山 >

0　1m

畦 b



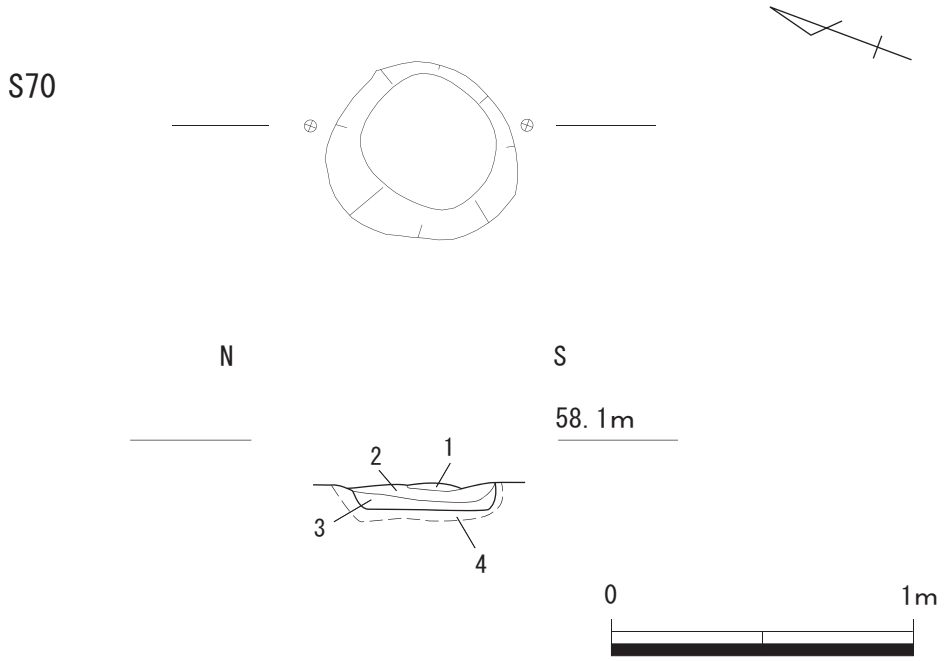
1	2.5Y6/2	灰黄色砂質土	(2～10㎜程の礫を含む)	〈S55〉
2	2.5Y5/2	暗灰黄色粘質土	(2㎜程の礫を含む)	〈S54〉
3	2.5Y5/3	にぶい黄褐色粗砂	(3㎝程の礫を含む)	〈遺構面ベース土〉
4	2.5Y5/8	黄褐色粗砂	(2～5㎝程の礫を含む)	〈地山〉

図 15　S54・55・161　平面・断面図

遺物出土状況　　須恵器甕体部、須恵器埦底部・口縁部の細片が出土した。
遺構の時期　　出土遺物から判断して、12 世紀のものと考えられる。

Ｓ161（図 15）
概要　　Ｓ55 とＳ72 に挟まれる浅い窪地状の遺構である。
規模・形態　　長径 4.4m、短径 1.44m、深さ 0.04mを測る。
堆積状況　　上層のにぶい黄褐色粘質土と下層の灰黄色砂質土に分けられる。
遺物出土状況　　遺物は出土していない。
遺構の時期　　時期は不明である。

Ｓ70（図 16）
概要　　調査区中央やや北側で検出した土坑である。Ｓ72 を切っている。
規模・形態　　円形を呈し、径 0.5m、深さ 0.09mを測る。
堆積状況　　埋土は上層が暗灰褐色粘質土（軟質）、中層が炭化物を密に含む黒色粘質土（軟質）、下層が暗灰黄色粘質土である。
遺物出土状況　　須恵器埦の口縁部（23）が出土した。
遺構の時期　　出土遺物から判断して、12 世紀のものと考えられる。



1　2.5Y5/2　暗灰褐色粘質土　　（軟質）
2　10YR2/1　黒色粘質土　　（軟質、炭化物を密に含む、1 をわずかに含む）
3　2.5Y5/2　暗灰黄色粘質土　　（2 をわずかに含む、4 を含む）
4　2.5Y6/4　にぶい黄色砂質土　（1 ～ 5 ㎝程の礫を含む）　＜遺構面ベース土＞

図 16　Ｓ70　平面・断面図

Ｓ71－１（図 17～20）

概要　中央西端で検出した２基の焼土遺構のうち、北側のものである。複数の柱穴に切られているほか、西端はＳ71－４に切られている。Ｓ71－２とは同一個体の遺物が出土していることから、同時に機能していたとみられ、Ｓ71－３・４についても一体性を持つと考えられる。

規模・形態　南北 2.45ｍ×東西 1.6ｍを測る。厚さ 0.1ｍの整地土により固く締まる。西辺以外に周溝がめぐる。

堆積状況　固く整地された黄褐色粘質土の上面に遺物等を大量に含む炭化物層があり、西辺以外に埋土が固く締まる黄灰色粘質土の周溝がめぐる。その外周をめぐる灰黄色粘質土は整地土とみられる。

遺物出土状況　炭化物層に不明遺物（４・６）、土師器堝（５）、須恵器壺（７）・甕（24）・埦（26）・坏蓋（27）のほか、炭化物・薄い板状に加工された被熱した流紋岩質凝灰岩・拳大程の自然石及び白い粒状の焼骨が大量に出土した。なお、炭化物層を除去した上面からも須恵器埦片（26）・高坏脚部（28）・（29）が出土した。

遺構の時期　出土遺物から判断して、７世紀第２四半期とみられる。

Ｓ71－２（図 17～20）

概要　中央西端で検出した２基の焼土遺構のうち、南側のものである。Ｓ162 ほかの柱穴及び西端はＳ71－４に切られている。Ｓ71－１と同時に機能していたとみられ、Ｓ71－３・４についても一体性を持つと考えられる。

規模・形態　南北２ｍ×東西北辺 1.6ｍ・南辺 0.65ｍを測る。厚さ 0.1ｍの整地土により固く締まる。周溝がめぐる。

堆積状況　固く整地された黄褐色粘質土の上面に遺物等を大量に含む炭化物層があり、埋土が固く締まる黄灰色粘質土の周溝がめぐる。その外周をめぐる灰黄色粘質土は整地土とみられる。

遺物出土状況　炭化物層に須恵器甕（24）・坏蓋（25）・（34）・埦（26）のほか、炭化物・薄い板状に加工された被熱した流紋岩質凝灰岩・拳大程の自然石及び白い粒状の焼骨が大量に出土した。

遺構の時期　出土遺物から判断して、７世紀第２四半期とみられる。

Ｓ71－３（図 17・18・21）

概要　Ｓ71－１・２の西端を切っているＳ71－４と接続する南北に延びる溝である。Ｓ71－４と同一遺構と考えられ、Ｓ71－１・２と一体性を持つと考えられる。

規模・形態　長さ約 11.5ｍ、幅 0.92ｍ、深さ 0.15ｍを測る。

堆積状況　畦ｃ上層は褐色砂質土、下層はにぶい黄褐色粘質土に分けられる。畦ｄはにぶい黄褐色粘質土がわずかに堆積する。

遺物出土状況　須恵器甕（30）・壺（31）・高坏（32・39）・坏蓋（33）のほか、拳大程の自然石が多く出土した。

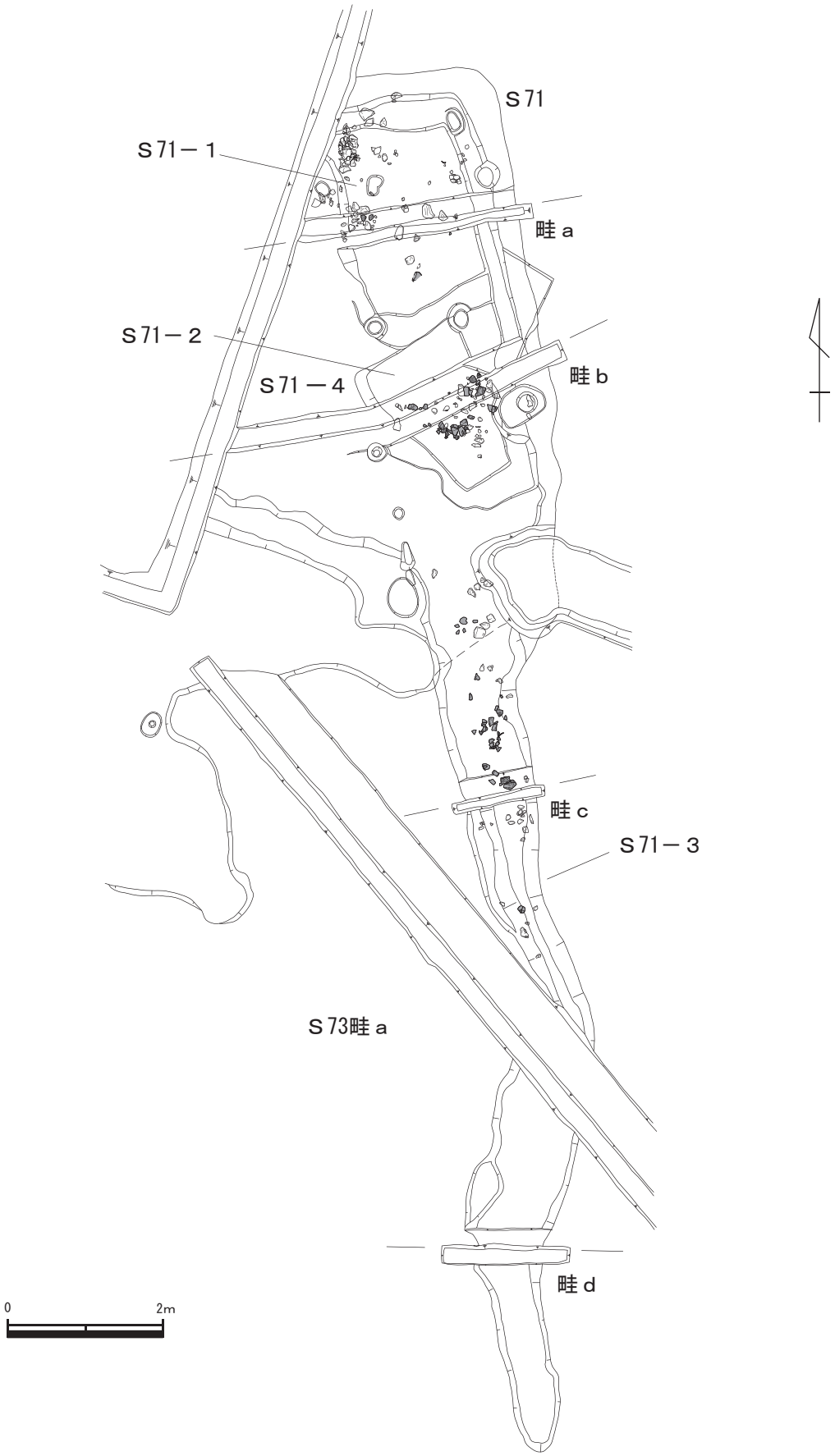
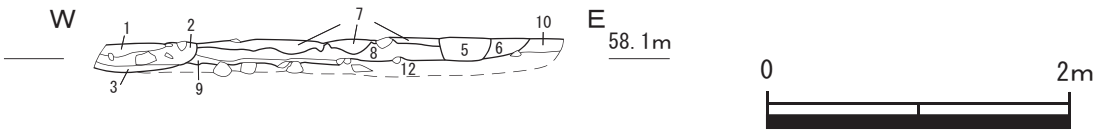
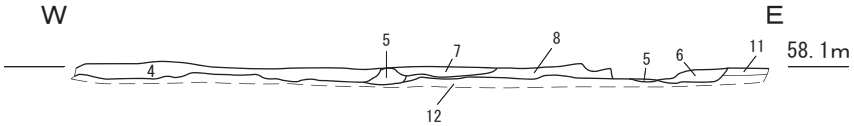


図17　S71　平面図

S71 畦 a

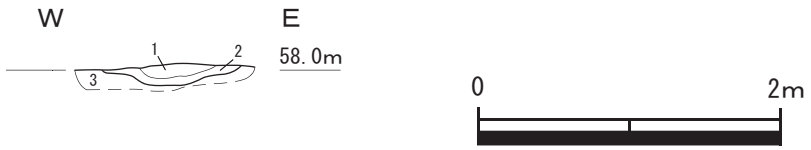


S71 畦 b



1	2.5Y5/2	暗灰黄色粘質土	(5 cm程の礫を含む)	<S71-4>
2	2.5Y6/4	にぶい黄色粘質土	(固く締まる、10 cm程の礫を含む)	<S71-4>
3	2.5Y6/2	灰黄色砂質土	(粗砂を密に含む、3 cm程の礫を含む)	<S71-4>
4	2.5Y5/2	暗灰黄色粘質土	(Mn、Fe を含む)	<S71-4>
5	2.5Y6/1	黄灰色粘質土	(固く締まる)	<S71（内側）周溝>
6	2.5Y7/2	灰黄色粘質土	(固く締まる)	<S71（外側）周溝（整地土か）>
7	10YR3/1	黒褐色粘質土	(炭化物・土器片・石・骨片を密に含む)	<焼土層>
8	2.5Y5/3	黄褐色粘質土	(固く締まる)	<S71 整地土>
9	2.5Y5/2	暗灰黄色粘質土	(12 をまばらに含む)	
10	2.5Y7/3	浅黄色粘質土	(固く締まる)	<遺構面ベース土>
11	2.5Y7/3	浅黄色砂質土	(固く締まる、2 ～ 5 cm程の礫を密に含む)	<遺構面ベース土>
12	10YR5/8	黄褐色砂礫	(1 ～ 10 cm程の礫主体)	<遺構面ベース土>

S71 畦 c



1	10YR4/4	褐色砂質土		<S71-3>
2	10YR5/3	にぶい黄褐色粘質土	(3 を密に含む)	<S71-3>
3	10YR5/6	黄褐色粘質土		<遺構面ベース土>

S71 畦 d

1	10YR5/4	にぶい黄褐色粘質土	(3 と 4 をまばらに含む)	<S71-3>
2	10YR5/6	黄褐色粘質土		<遺構面ベース土>
3	10YR5/2	灰黄褐色砂質土	(1 ～ 5 cm程の礫を含む)	<遺構面ベース土>
4	10YR4/6	褐色粗砂	(1 ～ 3 cm程の礫を含む)	<地山>

図 18　S 71　断面図

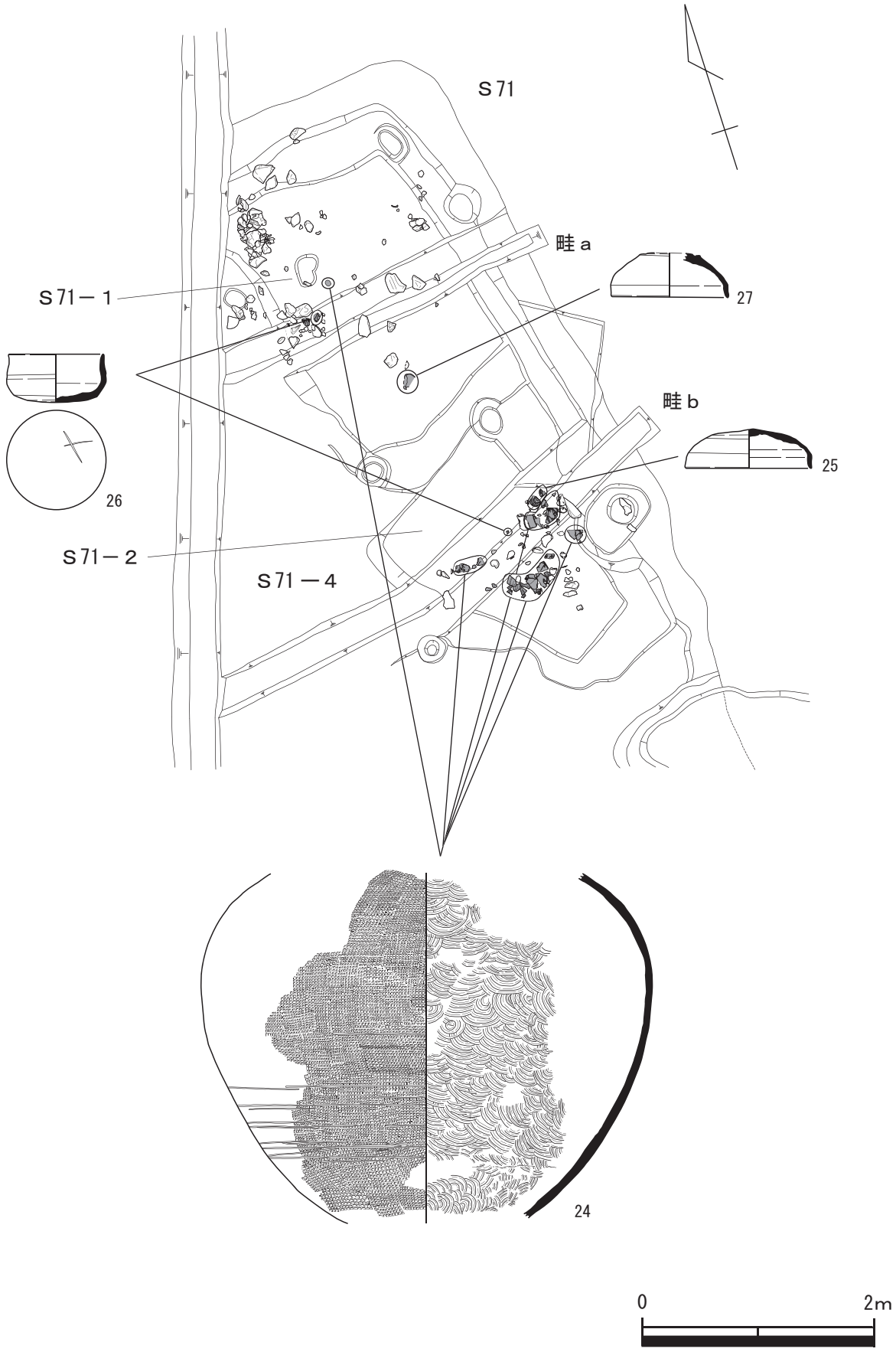


図19　S71－1・2　平面図（炭化層上面）

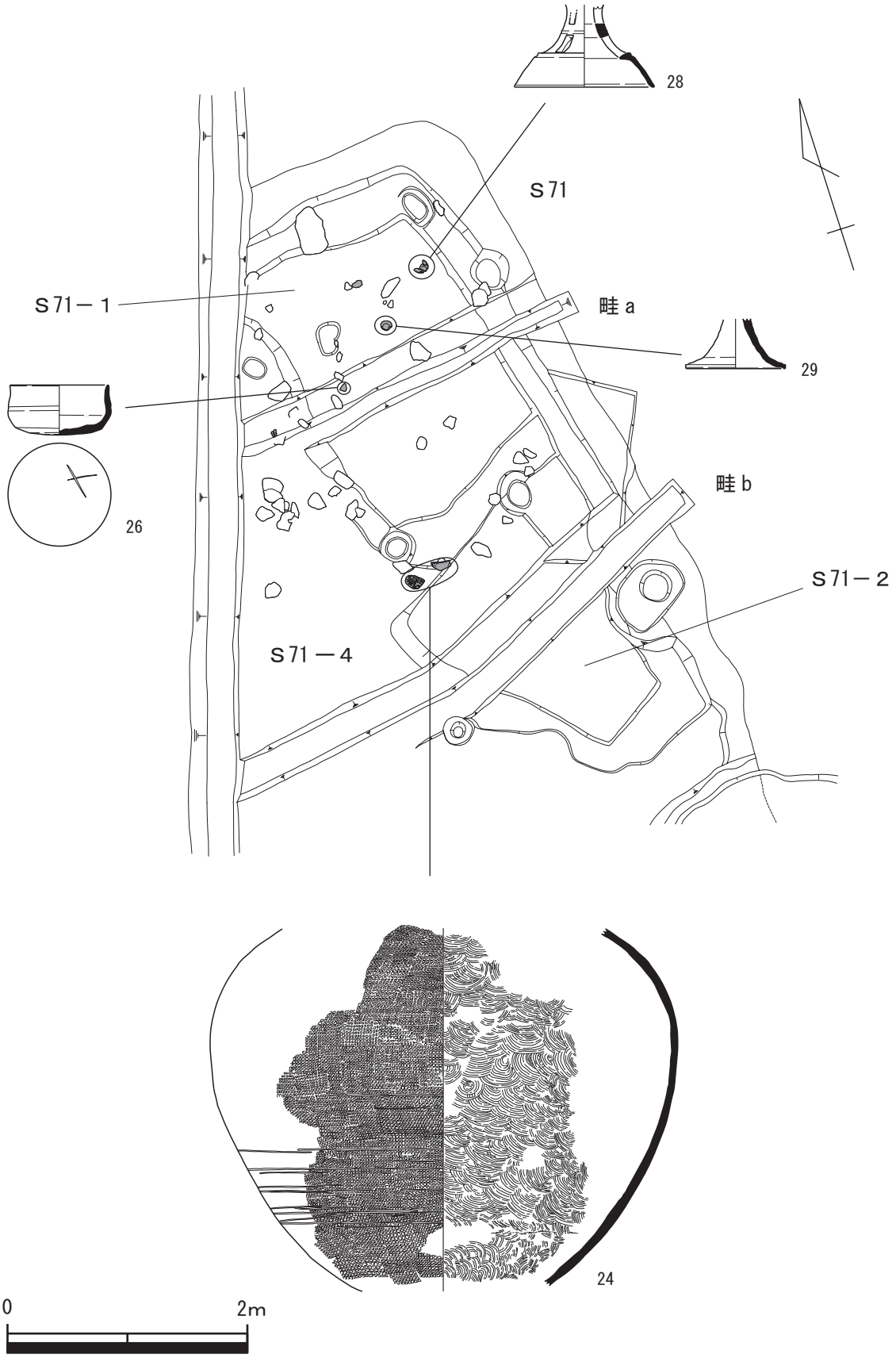


図20　S71－1・2　平面図（整地土上面）

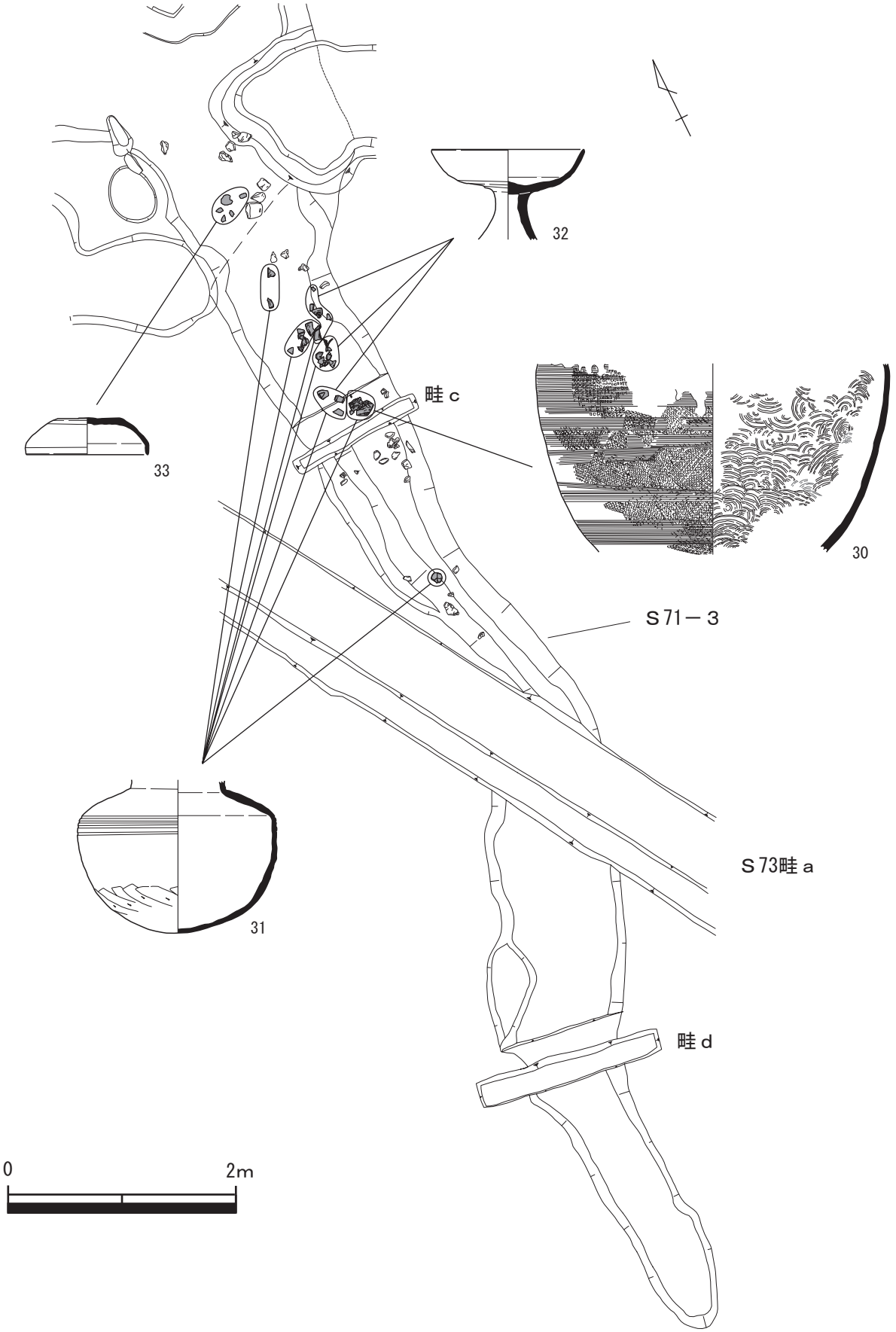


図 21　S 71 － 3　平面図

遺構の時期　　須恵器坏蓋（33）の時期から判断して７世紀第２四半期とみられる。

Ｓ71－４（図 17・20）

概要　　Ｓ71－１・２の西端を切り、Ｓ71－４と接続する遺構である。Ｓ71－３と同一遺構と考えられ、Ｓ71－１・２と一体性を持つと考えられる。

規模・形態　　Ｓ71－１付近では土坑状となり、Ｓ71－２付近では落ち込み状となる。長さ６ｍ以上、幅はＳ71－2 南側で約 4.5m以上、深さは土坑状の箇所で 0.2m、落ち込み状の箇所で 0.1mを測る。

堆積状況　　土坑状の箇所では、上層は暗灰黄色粘質土、下層はにぶい黄色粘質土、下層は灰黄色砂質土となる。落ち込み状の箇所では、暗灰黄色粘質土の埋土となる。

遺物出土状況　　瑝（はそう）（12）などのほか、拳大程の自然石が出土した。

遺構の時期　　須恵器瑝の時期から判断して、７世紀第３四半期の可能性があるが、より編年の精度が高いとみられるＳ71－3 の須恵器坏蓋（33）の時期から判断して７世紀第２四半期とみられる。

Ｓ72（図 22）

概要　　調査区中央に位置する東西方向に延びる浅い溝である。調査区外へ東に延びる。Ｓ110 を切り、Ｓ75 に切られている。

規模・形態　　幅 1.74～3.25m、長さ 25m以上、深さ 0.19mを測る。

堆積状況　　上層のにぶい暗灰黄色粘質土と下層の黄褐色砂質土に分けられる。

遺物出土状況　　龍泉窯系青磁碗（１）、須恵器埦口縁部（35）のほか、須恵器・土師器・窯壁の細片が出土した。

遺構の時期　　龍泉窯系青磁碗（１）の時期から判断して、15世紀後半～16世紀前半のものと考えられる。

Ｓ110（図 22）

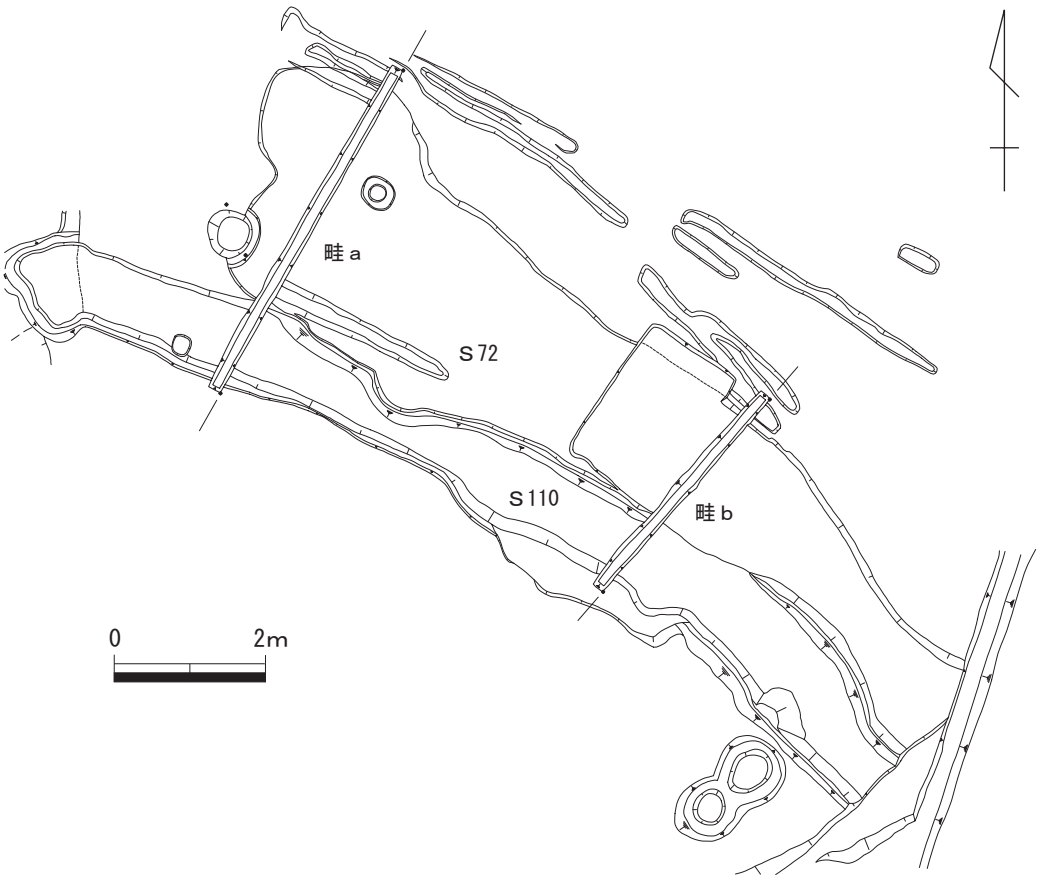
概要　　調査区中央に位置する東西方向に延びる浅い溝である。調査区外へ東に延びる。Ｓ71－３とＳ73 を切り、Ｓ72 とＳ75 に切られている。

規模・形態　　幅 1.04m、長さ 27m以上、深さ 0.13mを測る。

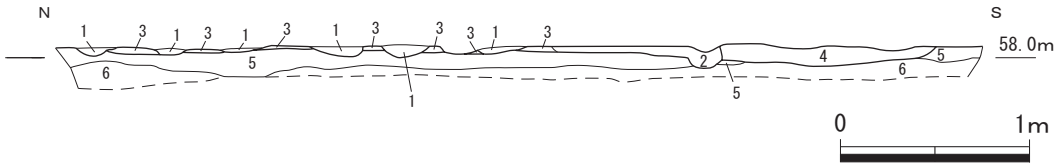
堆積状況　　埋土は灰黄色粘質土である。

遺物出土状況　　同安窯系青磁皿口縁部（61）、平瓦のほか、須恵器・土師器・瓦の細片が出土した。

遺構の時期　　Ｓ73 を切っているのと、同安窯系青磁皿口縁部（61）の時期から判断して、12 世紀後半以降のものと考えられる。

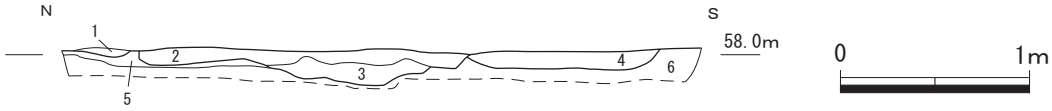


畦a



1	2.5Y5/2	暗灰黄色粘質土		〈素掘小溝〉
2	2.5Y4/2	暗灰黄色粘質土	(Ｍｎを密に含む、2～3mm程の礫を含む)	〈S72〉
3	2.5Y5/4	黄褐色粘質土		〈S72〉
4	2.5Y6/2	灰黄色粘質土	(Ｍｎ、Ｆｅを密に含む)	〈S110〉
5	2.5Y6/4	にぶい黄色砂質土		〈遺構面ベース土〉
6	2.5Y7/3	浅黄色礫	(固く締まる、2mm～3cm程の礫が主体)	〈地山〉

畦b



1	2.5Y5/2	暗灰黄色粘質土		〈素掘小溝〉
2	2.5Y4/2	暗灰黄色粘質土	(Mnを密に含む、2～30mm程の礫を含む)	〈S72〉
3	2.5Y5/6	黄褐色砂質土	(2を粒状に含む)	〈S72〉
4	2.5Y6/2	灰黄色粘質土	(Mn、Feを密に含む)	〈S110〉
5	2.5Y5/3	黄褐色粘質土	(6をわずかに含む)	〈遺構面ベース土〉
6	10YR5/6	黄褐色粗砂	(固く締まる、2mm～3cm程の礫を密に含む)	〈地山〉

図 22　S72・110　平面・断面図

Ｓ73（図 23）

概要　12世紀の遺物を多く含む遺物包含層。調査区中央から南側のＳ75以西に広範囲に広がる。遺物は焼成不良の須恵器・瓦の細片が大半であり、窯壁片も出土していることから、窯の灰原から運び込まれた２次堆積層と考えられる。上面では柱穴等の遺構がほとんどみられないことから、耕地として利用されていたとみられる。Ｓ71－３・Ｓ162 を切り、Ｓ75・Ｓ91・Ｓ110 などに切られている。

規模・形態　長さ 30m以上、幅 14m以上を測り、厚さは 0.2mを測る。

堆積状況　基本的には、にぶい黄褐色粘質土が堆積し、北→南・西→東にかけて厚くなっている。主に黄褐色粘質土で構成される遺構面ベース土上面に堆積している。

遺物出土状況　図化したものでは、須恵器小皿（38・46）・鉢（37・43・51・52・53）・埦（41・47・54・55）・小壺（36）、白磁碗（40）、肥前焼筒型碗（42）、土師器埦（48）、丸瓦（44・56・63）、平瓦（45・49・50）のほか、これらの細片・窯壁片等を含め、コンテナ３箱分が出土した。

遺構の時期　12 世紀前半～後半の遺物が多く出土していることから、12 世紀後半までには形成されたものと考えられる。

Ｓ75

概要　2005 年まで使用されていた用水路である。駐車場造成土の上面から埋められている。Ｓ73 を切る。

規模・形態　長さ約 30m以上、幅約３ｍ、深さは調査区南端で 0.9m、北端で 1.1mを測る。客土より下の本来の埋土の深さは 0.3 ｍを測る。

堆積状況　東壁部分は上層の厚い客土、下層の黒褐色シルト質粘土・オリーブ灰色微砂に分けられる。南壁部分は上層の厚い客土、下層の黄灰色シルト質粘土に分けられる。いずれも上層が 2005 年の埋土、下層がそれ以前の用水路に伴う埋土と判断できる。

遺物出土状況　軒丸瓦の瓦当部（10）、明治～大正期の磁器筒碗（11）、土師器皿底部（58）、丹波焼擂鉢底部（59）などが出土している。

遺構の時期　Ｓ73 形成（12 世紀後半）以降、駐車場を造成した後に埋められた 2005 年まで機能していたと判断できる。

Ｓ76

概要　用水路と並行する５～15 ㎝の礫を敷き詰めた暗渠である。旧耕土上面から掘り込まれている。

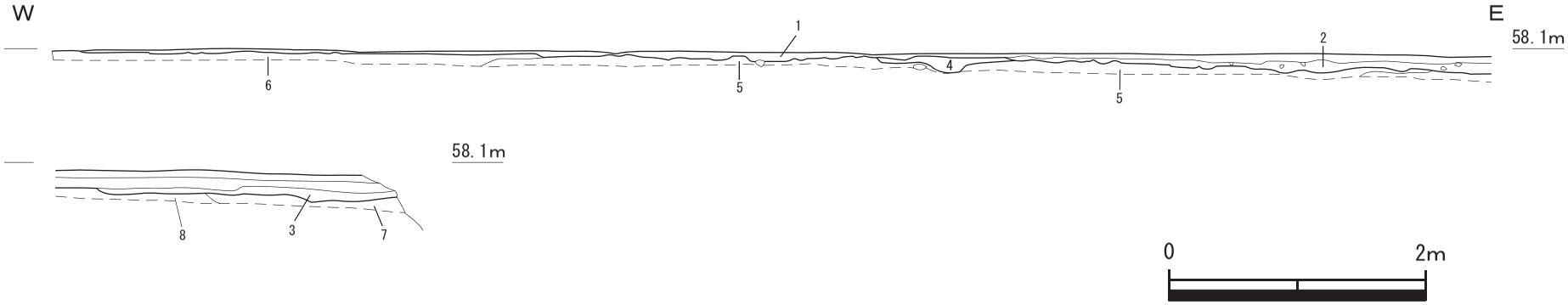
規模・形態　幅約 0.5～0.65m、長さ 51m以上、深さ 0.45mを測る。

堆積状況　上層のにぶい黄褐色粘質土と下層の黄灰色粘質土（礫を密に含む）に分けられる。

遺物出土状況　須恵器甕体部片が１点のみ出土した。

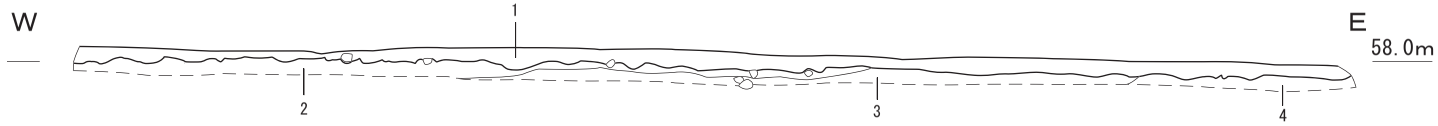
遺構の時期　層位から判断して、近世～近代まで機能していたと考えられる。形成された時期については不明である。

S73畦a



1	10YR5/3	にぶい黄褐色粘質土	(Mnを密に含む、土器片を密に含む)	<S73>
2	10YR5/4	にぶい黄褐色粘質土	(Mnを含む)	<S73>
3	10YR5/6	黄褐色粘質土	(7を含む)	<S73>
4	10YR5/4	にぶい黄褐色粘質土	(5を含む)	<S71-3>
5	2.5Y5/6	黄褐色砂質土	(2～5cm程の礫をまばらに含む)	<遺構面ベース土>
6	2.5Y6/6	明黄褐色粘質土	(Mnを含む)	<遺構面ベース土>
7	2.5Y5/4	黄褐色砂質土	(1～5cm程の礫を含む)	<遺構面ベース土>
8	10YR5/2	灰黄褐色砂質土	(1～5cm程の礫を密に含む)	<遺構面ベース土>

S73畦b



1	10YR5/3	にぶい黄褐色粘質土	(Mnを密に含む、土器片を密に含む)	<S73>
2	10YR5/8	黄褐色粘質土		<遺構面ベース土>
3	2.5Y5/2	暗灰黄色砂質土	(1～5cm程の礫を含む、軟質)	<遺構面ベース土>
4	10YR4/6	褐色粘質土		<遺構面ベース土>

図23　S73　断面図

Ｓ86

概要　調査区南東隅に位置する 10 ㎝程の礫を敷き詰めた暗渠である。東壁際で南東方向へと分岐している。旧耕土上面から掘り込まれている。

規模・形態　幅約 0.4～0.5m、長さ 14m以上、深さ 0.3～0.38mを測る。

堆積状況　上層の灰色砂質土～暗灰黄色砂質土と下層の黄灰色粘質土（礫を密に含む）に分けられる。

遺物出土状況　遺物は出土していない。

遺構の時期　層位から判断して、近世～近代まで機能していたと考えられる。形成された時期については不明である。

Ｓ91

概要　調査区南西のＳ73 上面で検出した柱穴である。

規模・形態　楕円形を呈し、長径 0.36m、短径 0.3m、深さ 0.16mを測る。

遺物出土状況　白磁碗片（59）１点と須恵器細片が出土している。

遺構の時期　Ｓ73 を切っているのと白磁碗片（59）の時期から判断して、12 世紀後半以降のものと考えられる。

Ｓ105

概要　調査区北側の東壁側溝で検出した柱穴である。

規模・形態　壁面で確認したため、形態は不明である。規模は幅 0.6m、深さ 0.25mを測る。

堆積状況　埋土は柱痕が灰黄褐色砂質土、掘形がにぶい黄褐色砂質土である。

遺物出土状況　須恵器埦（60）が出土した。

遺構の時期　出土遺物から判断して、12 世中頃のものと考えられる。

Ｓ162（図 24）

概要　Ｓ71－３の東側に位置する三角形状の浅い土坑状遺構である。Ｓ73 に切られる。

規模・形態　長径 2.0m、短径 1.3m、深さ 0.04mを測る。

堆積状況　埋土は、にぶい黄褐色粘質土である。

遺物出土状況　須恵器埦口縁部（64）、平瓦（65・66）、丸瓦（67）のほか、須恵器・土師器・瓦の細片がまとまって出土した。

遺構の時期　出土遺物から判断して、12 世紀のものと考えられる。

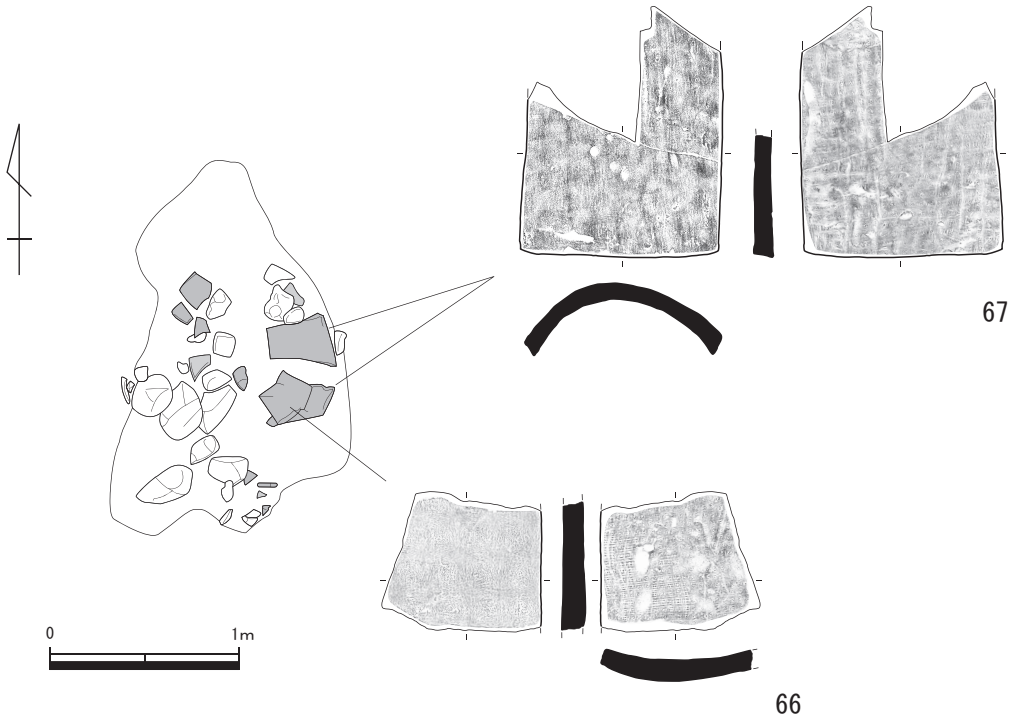


図 24　S162　平面図

第３節　遺物

概要　　コンテナケース 11 箱分の遺物が出土した。その大半が須恵器・瓦である。細かな出土層位、計測値などは表１～４を参照していただきたい。

包含層（図 25）

須恵器皿　　２は底径が大きく、体部から口縁部にかけて斜め上方に低く立ち上がる。平城Ⅲ期の皿Ｃに該当し（古代の土器研究会 1992）、時期は８世紀第２四半期とみられる。

須恵器小皿　　３は体部から口縁部にかけて斜め上方に内弯気味に低く立ち上がる。三木市久留美窯跡群の分類（森内 1999）によると小皿Ｉｂ$_1$に該当し、12 世紀とみられる。

須恵器無蓋高坏　　８は坏底部から稜をもって屈曲し、斜め上方に立ち上がる。坏底部と口縁部の境にそれぞれ１条の沈線をめぐらせる。播磨における古墳時代須恵器変遷（永井 1995）によるとⅢ１Ａ小期に該当し、時期は７世紀第３四半期とみられる。Ｓ71－３に伴う可能性がある。

須恵器鉢　　９は口縁内外面に回転ナデ調整を施し、端部は平坦に仕上げている。鉢Ｉｂに該当し（森内 1999）、時期は 12 世紀とみられる。Ｓ73 に伴うものとみられる。

須恵器（埦）　　ハの字状の低い輪状高台が貼り付けられている。久留美窯跡群の 12 世紀代の窯跡からも出土していることから、それと同時期頃のものとみられる。

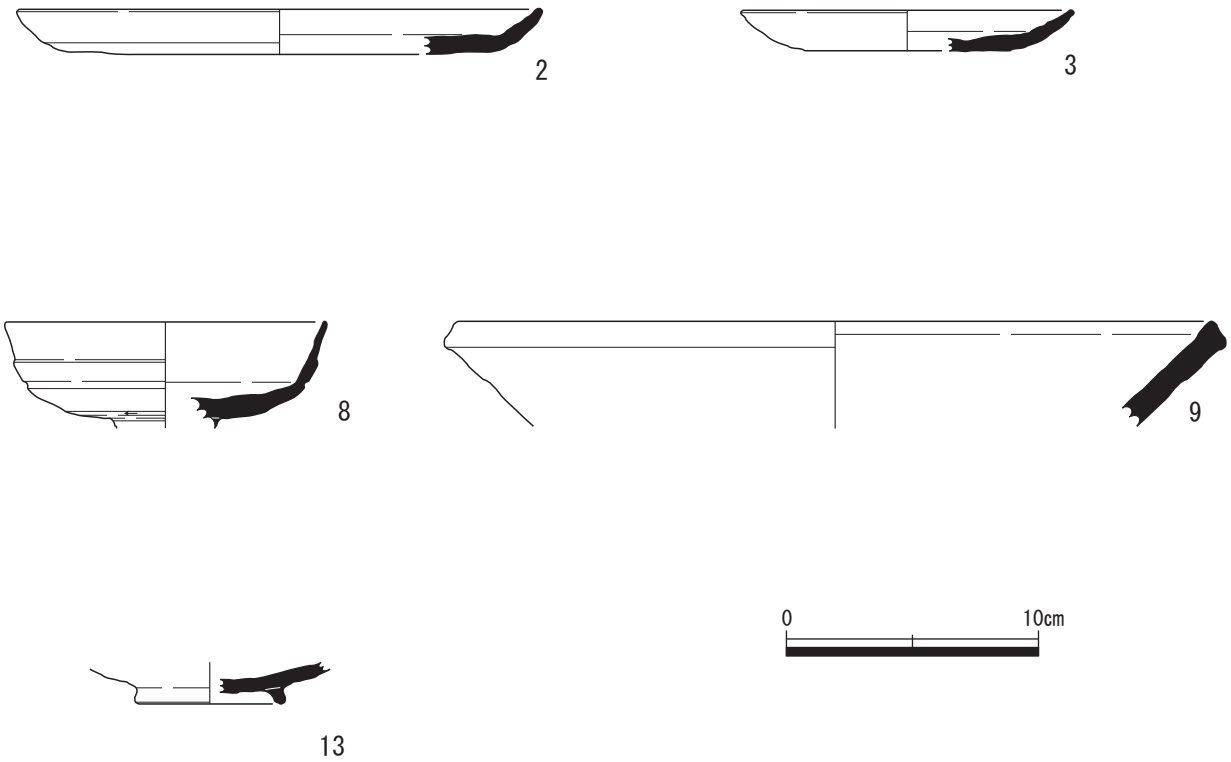


図25 出土遺物①（S＝1/3）

Ｓ５（図 26）

須恵器埦　14 は底部が平高台であり、糸切により切り離されている。体部は内弯気味に立ち上がる。見込み部にリング状の窪みをもつ。埦Ｉａに該当し（森内 1999）、時期は 12 世紀前半とみられる。

須恵器皿　15・16 は底部が糸切により切り離されており、体部は直線的に斜め上方に立ち上がる。小皿Ｉａに該当し（森内 1999）、時期は 12 世紀前半とみられる。

Ｓ23（図 26）

須恵器（埦）　17 は底部が糸切によりわずかに高台状に切り残されている。時期は 12 世紀とみられる。

Ｓ43（図 26）

土師器埦　18 は体部から口縁部にかけて、やや内弯気味となり、口縁端部は丸くおさめる。時期は 12 世紀とみられる。

Ｓ45（図 26）

須恵器埦　19 は体部から口縁部にかけて直線的となり、口縁部の端部内面を上方に小さく引き出し、端部外面を丸くおさめる。埦Ｉｂに該当し（森内 1999）、時期は 12 世紀とみられる。

Ｓ51（図 26）

須恵器甕　20 は口縁端部を丸くおさめる。外面にヘラ記号がある。

丹波焼擂鉢　21 は内面に５条の櫛描きによる擂目がある。外面はナデ調整後指頭圧痕を施す。細片のため時期の特定は難しいが、おおむね 18 世紀頃のものとみられる。

Ｓ52（図 26）

土師器堝　22 は断面三角形の短い鍔部の端部が痕跡程度となっている。鍔部内面はヨコナデ調整による凹部がみられ、それを挟んでヨコハケが確認できる。羽釜型タイプ播磨型Ｂ系列ＩＣ類に該当し（岡田・長谷川 2003）、時期は 15 世紀後半～16 世紀前半とみられる。

Ｓ70（図 26）

須恵器埦　23 は体部から口縁部にかけて、わずかに内弯気味となり、口縁端部は丸くおさめる。時期は 12 世紀とみられる。

Ｓ105（図 26）

須恵器埦　60 は底部が糸切によりわずかに高台状に切り残されており、体部はやや直線的に緩やかな角度で立ち上がる。口縁端部は丸くおさめる。埦Ｉｂに該当し（森内

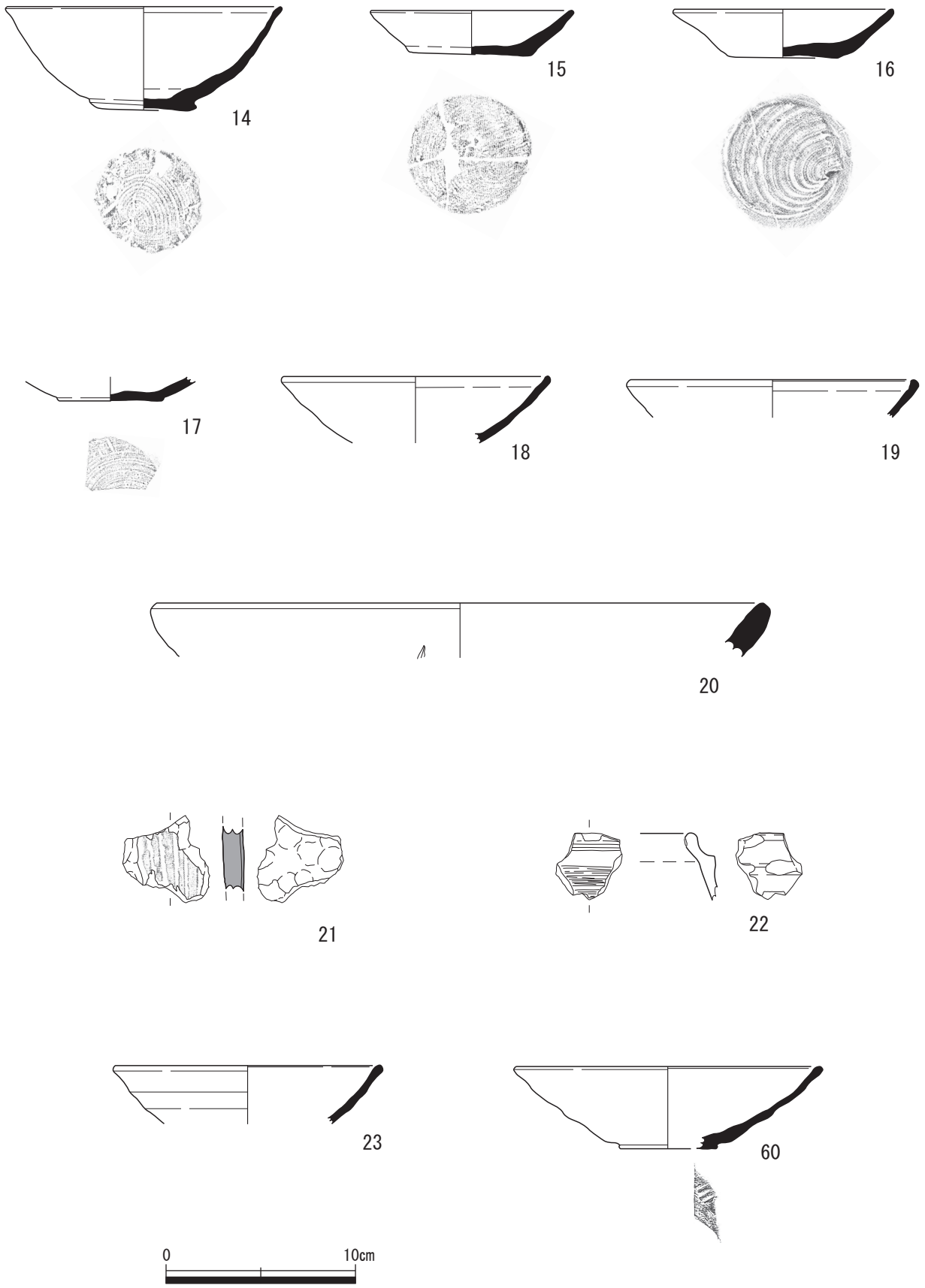


図 26　出土遺物②　(S＝1/3)

1999)、時期は 12 世紀中頃とみられる。

S71－１（図 27・28）

不明遺物　　４は須恵質であり、残存長 4.65 ㎝、復元径約 4.5 ㎝、厚さ 1.4 ㎝を測る。内面に絞り痕がみられる。高坏脚柱部の上端部の可能性がある。

６は残存長 3.05 ㎝、径 2.05 ㎝、厚さ 0.9 ㎝、孔径 0.4 ㎝を測る。高師小僧（植物の根の回りに鉄の酸化物が付着し成長したもの。褐鉄鉱）の可能性があり、孔は根があった箇所と考えられる。

土師器鍋　　５はシャープな断面三角形状を呈する貼り付け成形の短い鍔部を持つ。鍔部内面はヨコナデ調整による凹部がみられる。羽釜型タイプ播磨型Ｂ系列ＩＡ類に該当し（岡田・長谷川 2003)、時期は 15 世紀前半～中頃とみられる。遺構検出中の出土であることから、上層からの混入品と考えられる。

須恵器壺　　７は体部が最大径を中位に求める球体をなし、底部は丸い。肩部にやや張りを認め、にぶい沈線を２条めぐらす。

須恵器坏蓋　　27 は坏Ｈ蓋であり、稜がみられず、天井部外面は未調整である。口縁部はほぼ垂直に下降し、端部は丸くおさめる。永井 1995 のⅡ期５Ｂ小期に該当し、時期は７世紀第２四半期とみられる。

須恵器高坏　　28 は２段３方透かしであり、脚裾部が内弯気味に高く立ち上がる。脚付壺の脚部の可能性もある。永井 1995 のⅡ期５Ａ小期に該当し、時期は７世紀第２四半期とみられる。

29 は脚部がハの字形に開く。脚端部は上下に伸ばしている。

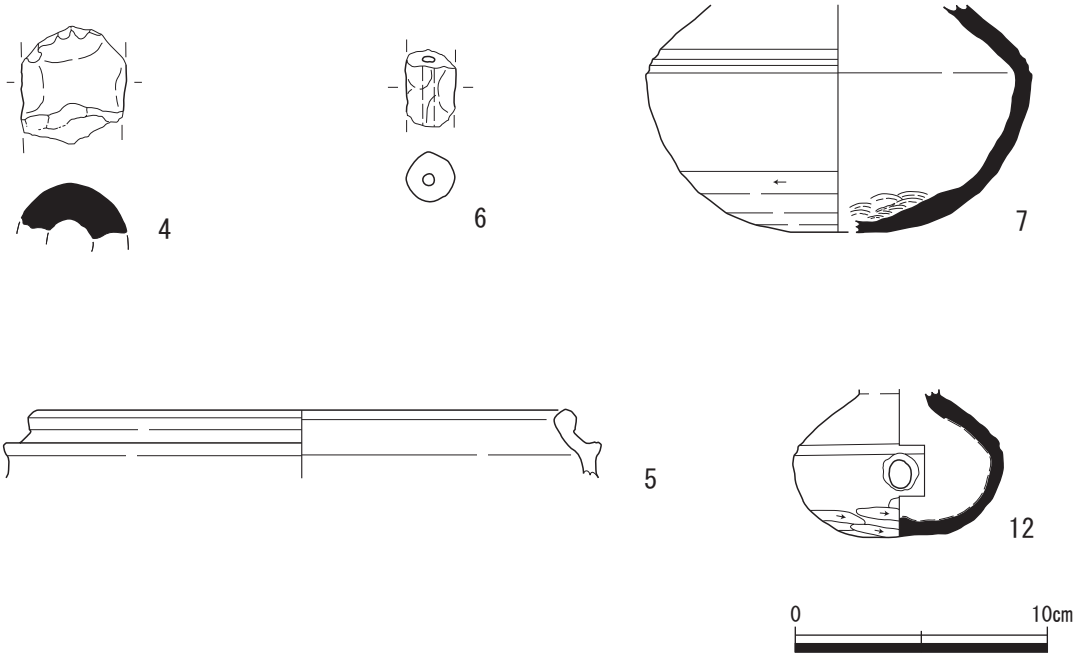


図 27　出土遺物③　(S＝1/3)

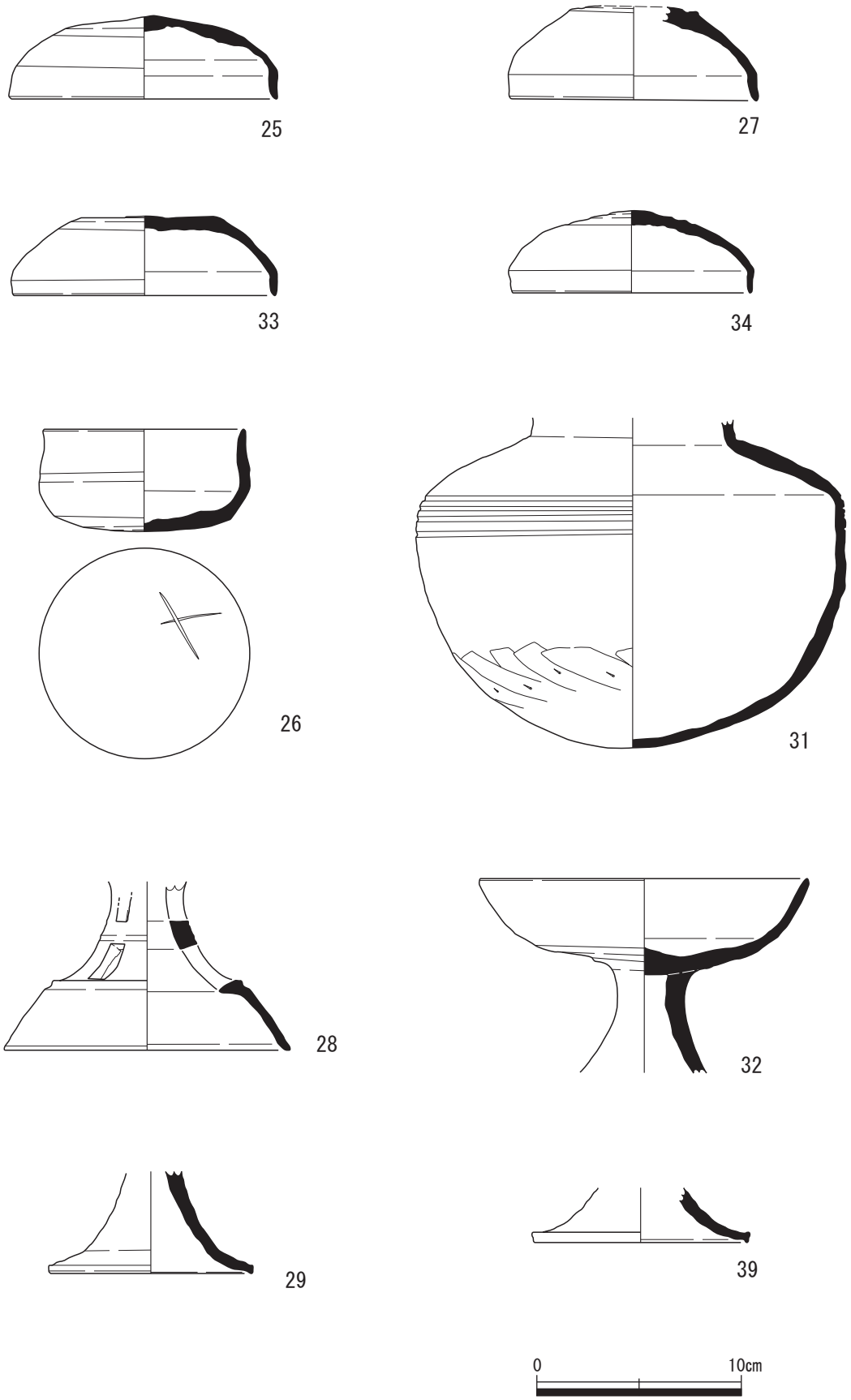
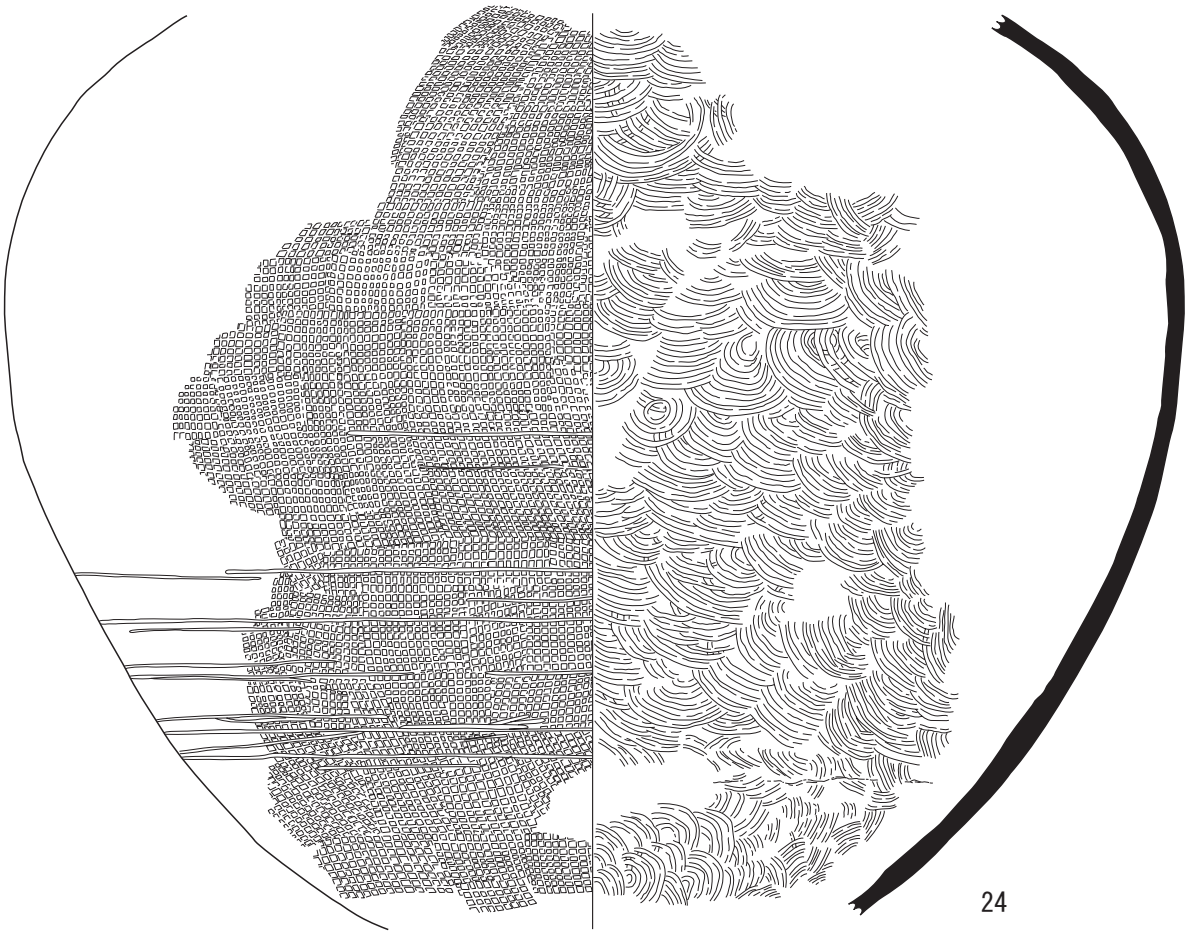


図 28　出土遺物④　(S＝1/3)



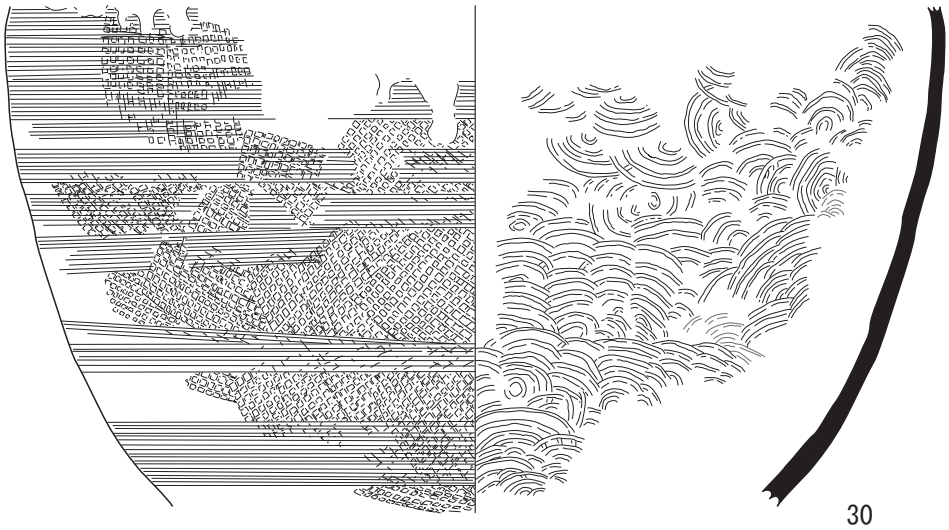


図 29　出土遺物⑤　(S＝1/3)

Ｓ71－１・２（両方から出土）（図 28・29）

須恵器甕　24 は大型の甕である。体部は最大径を中位やや上方に求める。肩部に張りはみられない。外面は格子目タタキの後、一部ミガキを施す。内面は同心円文タタキを施す。

須恵器埦　26 は底部から体部にかけて内弯気味に立ち上がり、口縁部外面に強いナデを施す。底部外面は回転ヘラケズリを施し、「×」印のヘラ記号がみられる。永井 1995 のⅡ期５Ａ・Ｂ小期に該当し、時期は７世紀第２四半期とみられる。

Ｓ71－２（図 28）

須恵器坏蓋　25 は坏Ｈ蓋であり、稜がみられず、天井部外面の 2/3 に粗く回転ヘラケズリを施し、頂部は未調整である。口縁部はほぼ垂直に下降し、端部内面は内傾する。永井 1995 のⅡ期５Ａ小期に該当し、時期は７世紀第２四半期とみられる。

34 は坏Ｈ蓋であり、稜がみられず、天井部外面は未調整である。口縁部はわずかに内側に下降し、端部は丸くおさめる。永井 1995 のⅡ期５Ｂ小期に該当し、時期は７世紀第２四半期とみられる。

Ｓ71－３（図 28・29）

須恵器甕　30 は大型の甕である。体部はやや内弯し、球体をなさない。外面は格子目タタキの後、ハケメを施す。内面は同心円文タタキを施す。

須恵器壺　31 は体部が最大径を上位に求める球体をなし、底部は丸い。肩部に張りを認め、沈線を４条めぐらす。

須恵器高坏　32 は無蓋高坏である。坏部に稜はみられず内弯気味に斜め上方に立ち上がり、端部は丸くおさめる。脚部に透かしはみられない。

39 は脚部がハの字形に開く。脚端部は上下に伸ばしている。

須恵器坏蓋　33 は坏Ｈ蓋であり、稜がみられず、天井部外面は未調整である。口縁部はほぼ垂直に下降し、端部は丸くおさめる。永井 1995 のⅡ期５Ａ小期に該当し、時期は７世紀第２四半期とみられる。

Ｓ71－４（図 27）

須恵器瑳　12 は体部が最大径を中位に求める球体をなし、底部はやや平らで、手持ちヘラケズリ調整を施す。肩部に張りは認められず、にぶい沈線を１条めぐらす。永井 1995 によるとⅢ１Ａ小期に該当し、時期は７世紀第３四半期とみられる。

S73（図 30・31）

須恵器小皿　38 は体部が斜め上方に低く立ち上がる。見込み部にリング状の窪みを持つ。底部は糸切により切り離されている。皿Ⅰｂ$_1$に該当し（森内 1999）、時期は 12 世紀前半とみられる。

46 は体部が斜め上方に低く立ち上がる。底部は糸切により切り離され、ヘソ皿状となる。皿Ⅰｂ$_1$に該当し（森内 1999）、時期は 12 世紀前半とみられる。

須恵器鉢　37・43 は口縁端部を平坦に仕上げ、内側端面を上方に小さく引き出す。鉢Ⅱａに該当し（森内 1999）、時期は 12 世紀前半とみられる。

51 は口縁端部を上方に大きく引き出し内傾させる。端部が段をなして外側は張り出す。神出窯跡群編年の鉢Ｂ４・Ⅱ－２期に該当し（兵庫県教育委員会 1998）、時期は 12 世紀後半とみられる。

52・53 は底部が糸切により高台状に切り残されている。53 はその後ナデ調整が施され、体部は斜め上方に緩やかに立ち上がる。時期はいずれも 12 世紀とみられる。

須恵器埦　41・55 は体部から口縁部にかけて直線的となり、口縁端部を丸くおさめる。55 は口縁端部がわずかに外反する。いずれも埦Ⅰｂに該当し（森内 1999）、時期は 12 世紀中頃とみられる。

47 は底部が糸切により切り離され、高台状を保つ。体部はやや直線的に角度をつけて斜め上方に立ち上がる。時期は 12 世紀とみられる。

54 は体部から口縁部にかけてやや内弯し、口縁端部を丸くおさめる。端部内面が肥厚している。

須恵器小壺　36 は口頸部を欠く。残存器高 6.1 ㎝、高台径推定 4.2 ㎝を測る。

白磁碗　40 は華南産である。輪状高台を持ち、見込み部の釉を輪状に掻きとっている。立ち上がり部に段を有し、離れ砂が付着している。森田・横田 1978 によると、白磁碗Ⅷ類に該当し、時期は山本 1995 のＤ期（12 世紀中頃～後半）とみられる。

肥前焼筒型埦　42 は底部と体部下半がわずかに残る。時期は 19 世紀前半とみられ、混入品と考えられる。Ｇ３の撹乱遺構に伴う可能性がある。

土師器埦　48 は輪状高台を呈し、体部は斜め上方に立ち上がる。

丸瓦　44 は玉縁～筒部である。凹面に布目痕がみられず、横方向にナデを施していることから、粘土紐を巻き上げて成形したと考えられる。凸面は玉縁部が回転ナデ、筒部が縦方向のナデを施す。

56 は筒部である。凹面に布目痕がみられる。凸面は縦方向のナデ、側面はヘラ切りを施す。

63 は玉縁部のみであり、凹面に布目痕がみられ、凸面は回転ナデを施す。

平瓦　45・50は凹面に布目痕がみられる。端部はヘラ切りを施す。凹凸面とも端部付近はナデを施す。凸面は前者は摩耗により不明であり、後者は縦方向のタタキを施す。

49 は凹面に布目痕がみられる。端部には包み込み技法による瓦当貼り付け痕が確認できる。凸面は縦方向のナデを施す。

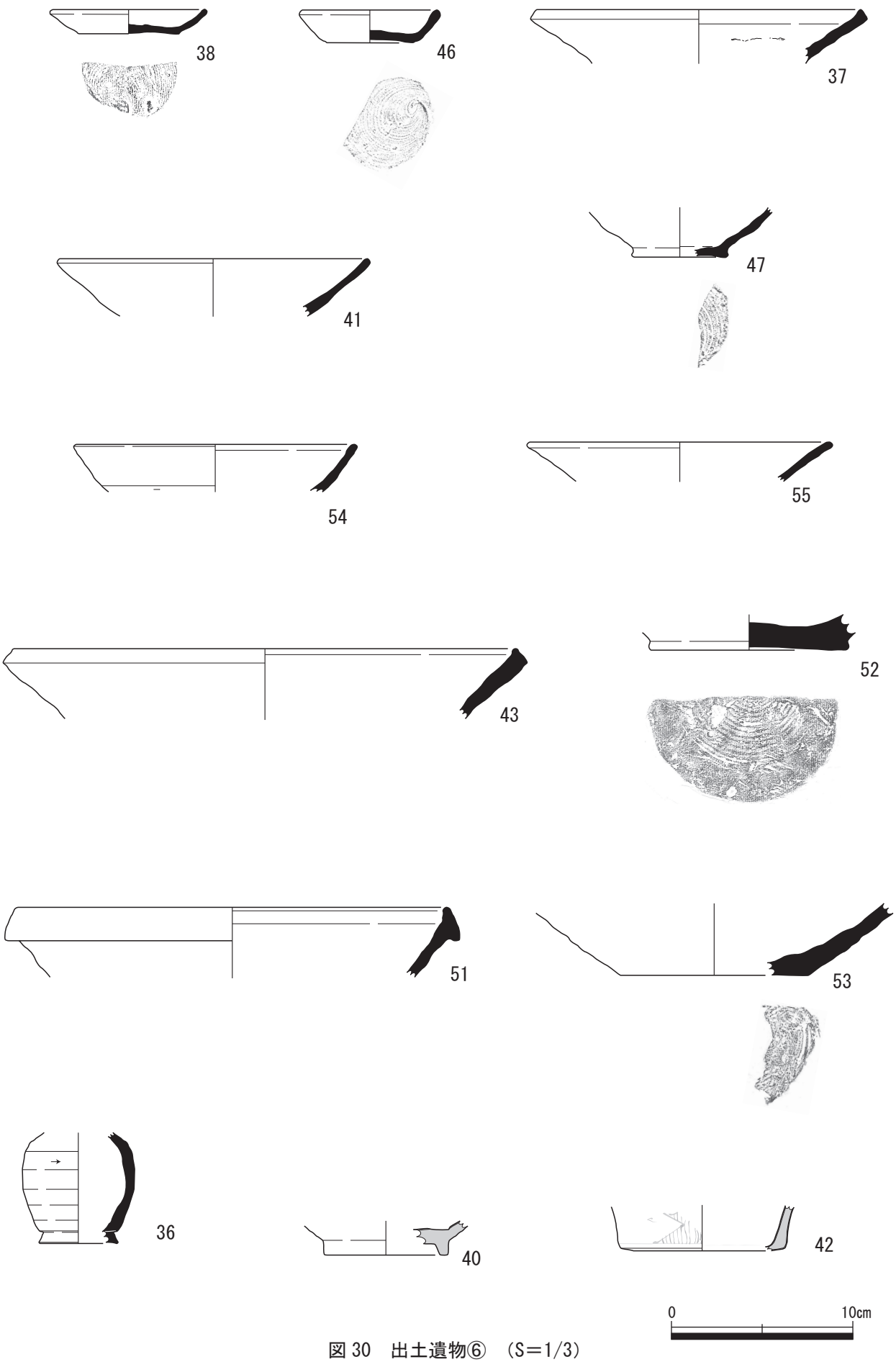


図 30　出土遺物⑥　(S＝1/3)

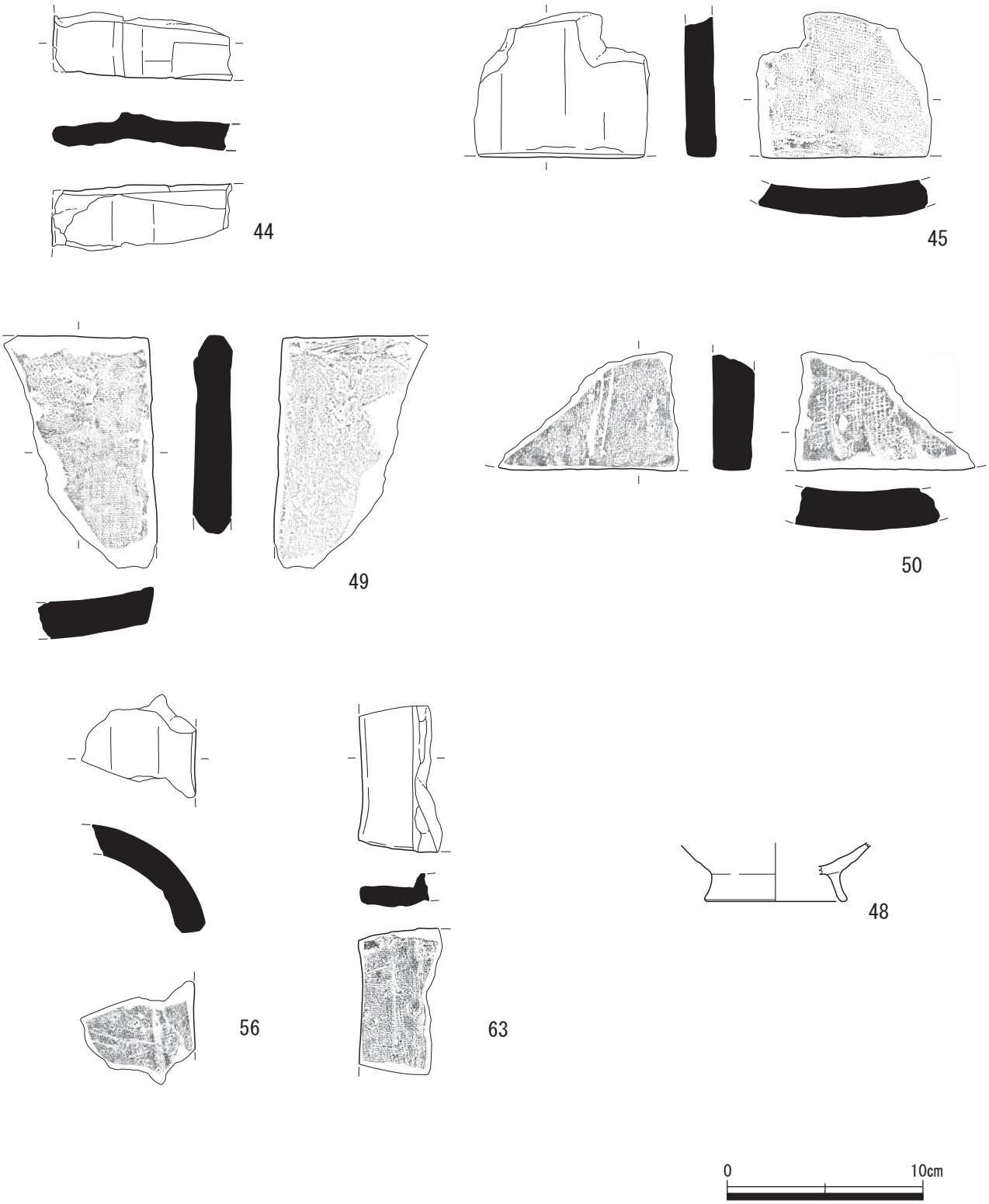


図 31　出土遺物⑦　(S＝1/3)

S72（図 32）

青磁碗　　１は龍泉窯系青磁碗である。ヘラ先による細蓮弁文であり、口縁直下に連続する弧線を描き、そこから高台方向に縦線を下ろしている。上田秀夫氏の分類によると、Ｂ－Ⅳに該当し（上田 1982）、時期は 15 世紀後半～16 世紀前半とみられる。

須恵器埦　　35 は体部から口縁部にかけて直線的となり、口縁端部を丸くおさめる。埦Ｉｂに該当し（森内 1999）、時期は 12 世紀中頃とみられる。

S75（図 32）

軒丸瓦　　10 は瓦当部である。殊文が２つみられる。巴文とみられる。時期は中世と考えられる。

磁器筒埦　　11 は瀬戸産であり、プリント文様で松と鶴が描かれている。明治～大正期のものと考えられる。

土師器小皿　　57 は口径に対し底部の比率が大きい。底部は指おさえがあり、口縁部へは内弯気味に斜め上方に低くわずかに立ち上がる。京都系土師皿とみられ、時期は 12 世紀頃と考えられる。

丹波焼擂鉢　　58 は擂目が櫛描きにより密に施されている。見込み部は中央に斜格子状の擂目の後、周縁に擂目を施す。体部内面は縦方向に擂目を施す。川口 1998 のⅢ－２ｂ期に該当するとみられ、時期は 18 世紀前半～後半と考えられる。

S91（図 32）

白磁碗　　59 は華南産白磁碗である。口縁端部外面が玉縁となる。森田・横田 1978 によると、白磁碗Ⅳ類に該当し、時期は山本 1995 のＣ～Ｄ期（11 世紀後半～12 世紀後半）とみられる。

S110（図 32）

青磁皿　　61 は同安窯系青磁皿である。体部中位で屈曲する。体部と見込みの境に段をわずかに有する。文様はみられない。森田・横田 1978 によると、同安窯系青磁皿Ｉ類に該当し、時期は山本 1995 のＤ期（12 世紀中頃～後半）とみられる。

平瓦　　62 は凹面に布目痕がみられる。凸面は縦方向のナデ、端部・側面はヘラ切りを施す。

S162（図 33）

須恵器埦　　64 は体部上半から口縁部にかけて直線的であり、口縁端部は丸くおさめ、わずかに外反する。埦Ｉｂに該当し（森内 1999）、時期は 12 世紀とみられる。

平瓦　　65 は凹面に布目痕がみられず、縦方向のナデを施していることから、粘土紐を巻き上げて成形したと考えられる。凸面は縦方向のナデを施す。端部はヘラ切りを施す。

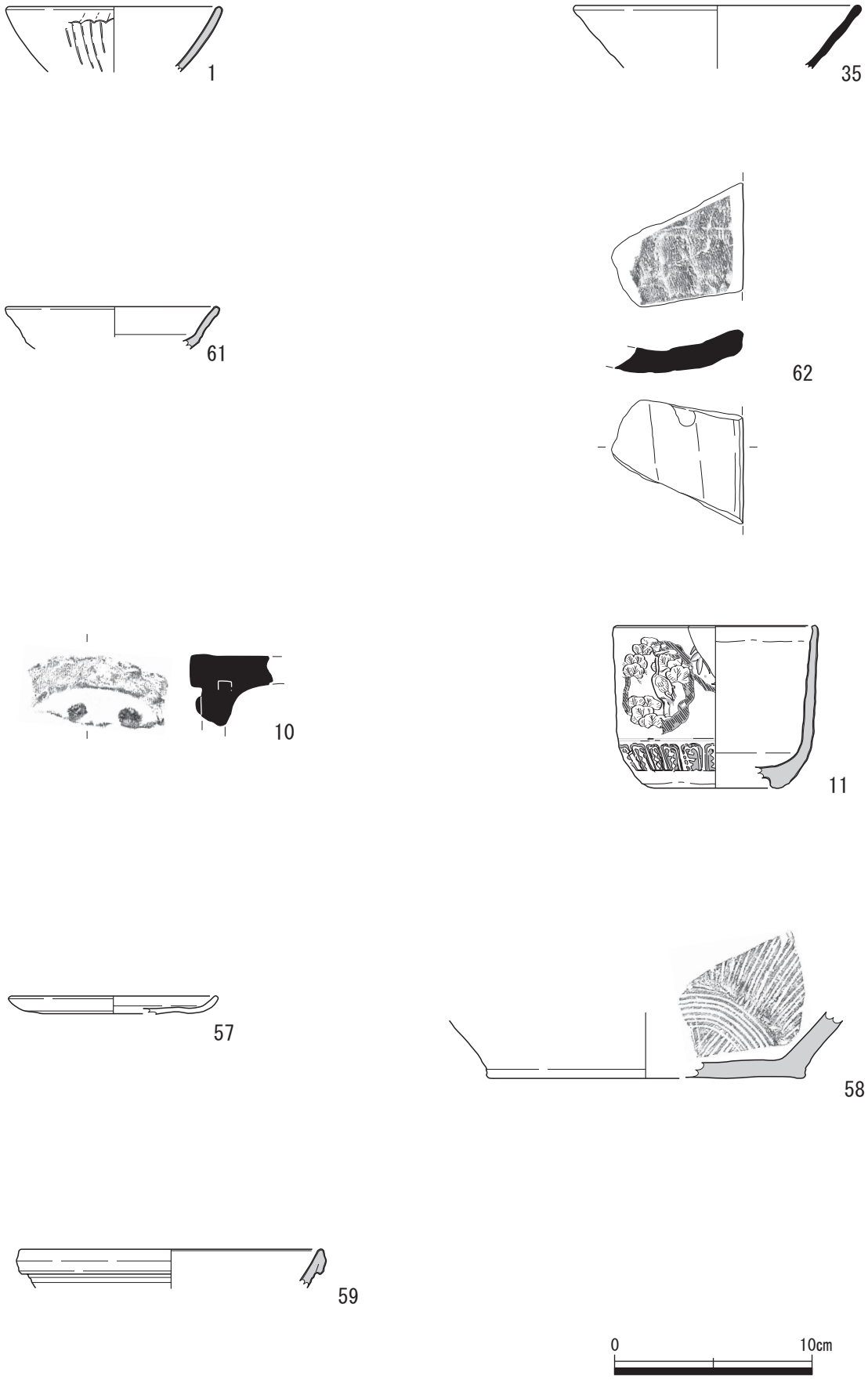
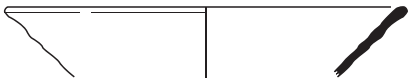
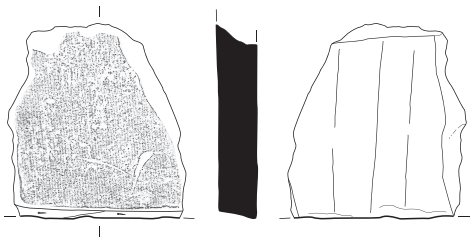


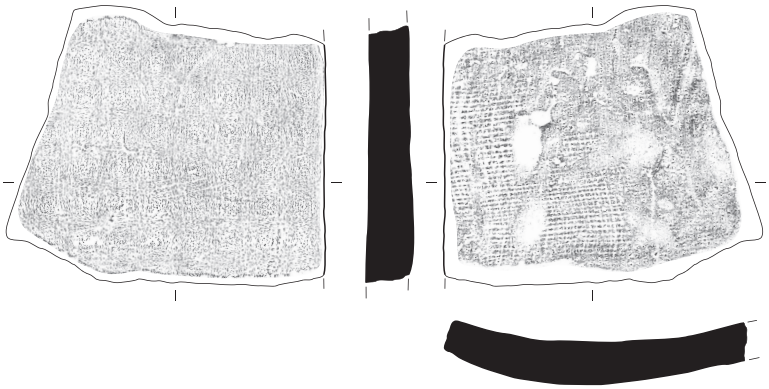
図 32　出土遺物⑧　(S＝1/3)



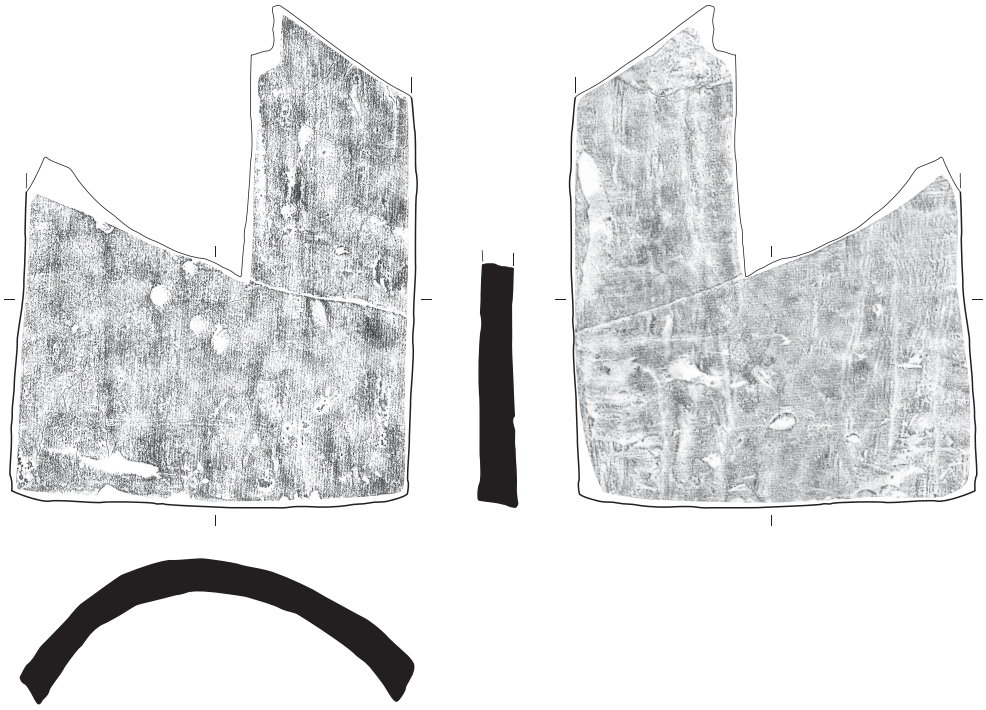
64



65



66



67

0　10cm

図 33　出土遺物⑨　（S＝1/3）

66 は凹面に布目痕がみられ、その後に指頭圧痕とナデがみられる。凸面は縦方向のナデを施す。側面はヘラ切りを施す。

丸瓦　67 は凹面に布目痕がみられず、縦方向のナデを施していることから、粘土紐を巻き上げて成形したと考えられる。端部・側面はヘラ切りを施す。

〈引用文献〉

上田秀夫　1982　「14～16 世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』２　日本貿易陶磁研究会

岡田章一・長谷川眞　2003　「兵庫津遺跡出土の土製煮炊具」『兵庫県埋蔵文化財研究紀要』３　兵庫県埋蔵文化財調査事務所

川口宏海　1998　「有岡城跡・伊丹郷町出土の近世丹波焼製品」『楢崎彰一先生古希記念論文集』　楢崎彰一先生古希記念論文集刊行会

古代の土器研究会編　1992　『古代の土器１　都城の土器集成』

永井信弘　1995　「播磨における古墳時代須恵器の変遷」『小谷遺跡（第６次）』　加西市教育委員会

兵庫県教育委員会　1998　『神出窯跡群』

森内秀造　1999　「出土土器の検討」『久留美・跡部窯跡群』　兵庫県教育委員会

森田勉・横田賢次郎　1978　「大宰府出土の輸入中国陶磁器について－型式分類と編年を中心として－」『九州歴史資料館研究論集』４　九州歴史資料館

山本信夫　1995　「中世前期の貿易陶磁器」『概説　中世の土器・陶磁器』　真陽社

表1　出土遺物観察表①

出土遺物観察表

番号	グリッド	遺構名	遺物名	器種(部位)	色調	胎土	法量(cm)			形態的特徴・調整など
							口径	底径	器高	
1	確認調査 G5	遺構面直上(S72)	磁器	青磁碗(口縁部)	外面:7.5Y4/2灰オリーブ 内面:7.5Y4/2灰オリーブ	密	(10.6)	−	(3.3)	外面:施釉　花弁模様　貫入あり 内面:施釉　貫入あり
2	南東部	包含層 (遺構面直上)	須恵器	皿(口縁〜底部)	外面:N6/0灰 内面:N6/0灰	やや密　2mm以下の灰白色の砂粒含む	(20.6)	−	1.8	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ
3	E2	包含層 (遺構面直上)	須恵器	皿(口縁〜底部)	外面:N7/0灰白 内面:N7/0灰白	やや密　2mm以下の灰白色の砂粒含む	(13.0)	−	1.6	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ
4	E4	S71−4	須恵器	不明	外面:N4/0灰 内面:N5/0灰	やや密　1mm以下の灰白色の砂粒含む	長(4.65)	幅(4.2)	厚(2.2)	外面:ナデ 内面:しぼり痕
5	E4	S71−4	土師器	堝(口縁部)	外面:5YR6/4にぶい橙 内面:7.5YR7/6橙	やや密　1mm以下の灰白色の砂粒含む	(21.0)	−	(2.7)	外面:ナデ 内面:ナデ
6	E4	S71−4	不明	不明	外面:10YR6/6明黄褐 内面:10YR6/6明黄褐	密　1mm以下の灰白色の砂粒含む	長(3.05)	幅(2.05)	厚(2.0)	外面:− 内面:−
7	E5	S71−4	須恵器	壺(肩〜底部)	外面:N5/0灰 内面:N6/0灰	やや密　2mm以下の灰白色の砂粒、黒色鉱物含む	体部(15.3)	−	(9.0)	外面:回転ナデ　回転ヘラケズリ　沈線 内面:回転ナデ　同心円文タタキ
8	F3	包含層 (遺構面直上)	須恵器	高坏(坏部)	外面:2.5YR5/2灰赤 内面:2.5YR5/1赤灰	やや密　2mm以下の灰白色の砂粒含む	(12.6)	−	(1.25)	外面:回転ナデ　回転ヘラケズリ 内面:回転ナデ
9	F4	包含層 (遺構面直上)	須恵器	鉢(口縁部)	外面:N5/0灰 内面:N6/0灰	やや密　2mm以下の灰白色の砂粒含む	(30.0)	−	(4.15)	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ
10	G1	側溝掘削中 (S75)	瓦	軒丸瓦(瓦当)	外面:N4/0灰 内面:N4/0灰	やや密　2mm以下の灰白色の砂粒、カクセンセキ含む	長(4.2)	−	(3.6)	外面:ケズリ 内面:ナデ
11	G2	S75	磁器	筒碗(口縁〜底部)	外面:N8/0灰白 5B7/1明青灰(施釉) 内面:N8/0灰白 5B7/1明青灰(施釉)	密	(10.1)	(6.2)	8.2	外面:施釉　鶴・松の絵 内面:施釉
12	E5	側溝掘削中 (S71−4)	須恵器	甕	外面:N6/0灰 内面:N6/0灰	やや密　2mm以下の灰白色の砂粒含む	体部(8.35)	−	(5.9)	外面:回転ナデ　ヘラケズリ　沈線 内面:−
13	I4	包含層 (遺構面直上)	須恵器	(底部・高台)	外面:N6/0灰 内面:N6/0灰	やや密　2mm以下の灰白色の砂粒含む	−	(5.6)	(1.6)	外面:ナデ 内面:回転ナデ
14	B2	S5(柱痕)	須恵器	埦	外面:N7/0灰白 内面:N7/0灰白	やや密　2mm以下の灰白色の砂粒含む	(14.4)	5.2	5.45	外面:ナデ　回転ナデ　糸切痕 内面:ナデ
15	B2	S5(柱痕)	須恵器	皿	外面:N7/0灰白 内面:N7/0灰白	密　1mm以下の灰色の砂粒含む	10.6	6.45	2.3	外面:回転ナデ　糸切痕 内面:回転ナデ
16	B2	S5(柱痕)	須恵器	皿	外面:N7/0灰白 内面:N7/0灰白	やや密　2mm以下の灰白色の砂粒、3mmの暗灰色の小石粒含む	(11.5)	5.8	2.55	外面:回転ナデ　糸切痕 内面:回転ナデ

表２　出土遺物観察表②

番号	グリッド	遺構名	遺物名	器種（部位）	色調	胎土	法量（cm）			形態的特徴・調整など
							口径	底径	器高	
17	B3	S23	須恵器	埦（底部）	外面：N6/0灰 内面：N4/0灰	やや密　2mm以下の灰白色の砂粒含む	－	(5.4)	1.25	外面：回転ナデ　糸切痕 内面：回転ナデ
18	C3	S43(柱痕)	土師器	埦（口縁部）	外面：7.5YR7/4にぶい橙 内面：7.5YR7/4にぶい橙	やや密　2mm以下の灰白色の砂粒含む	(14.0)	－	(3.5)	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ
19	C3	S45(柱痕)	須恵器	埦（口縁部）	外面：N6/0灰 内面：N6/0灰	密　黒色鉱物粒含む	(15.0)	－	(2.0)	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ
20	C4	S51(柱痕)	須恵器	甕(口縁部)	外面：N6/0灰 内面：N4/0灰	やや密　2mm以下の灰白色の砂粒含む	(32.0)	－	(2.8)	外面：ナデ　ヘラ記号 内面：ナデ
21	C4	S51(柱痕)	陶器	丹波焼擂鉢	外面：7.5YR4/1褐灰(釉) 内面：7.5YR7/4にぶい橙	密　1mm以下の白色の砂粒含む	－	－	(4.4)	外面：ナデ後指頭圧痕 内面：擂り目
22	C4	S52	土師器	堝(口縁部)	外面：7.5YR7/4にぶい橙 内面：5YR7/6橙	密　1mm以下の白色の砂粒含む	－	－	(3.5)	外面：横ナデ 内面：刷毛目
23	E3	S70	須恵器	埦（口縁部）	外面：N8/0灰白 内面：N8/0灰白	密　1mm以下の白色の砂粒含む	(14.0)	－	(3.1)	外面：回転ナデ、回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ
24	－	S71-1・2	須恵器	甕（肩～底部）	外面：N7/0灰白 7.5Y4/2灰オリーブ(自然釉) 内面：N7/0灰白	やや密　2mm以下の灰白色の砂粒、黒色鉱物粒含む	体部(47.0)	－	(36.35)	外面：格子状タタキ　ミガキ 内面：同心円文タタキ
25	－	S71-2	須恵器	坏蓋	外面：10YR8/3浅黄橙 内面：2.5Y8/2灰白	密　1mm以下の白色・灰色の砂粒含む	13.0	－	4.1	外面：回転ナデ、回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ
26	－	S71-1・2	須恵器	埦	外面：N7/0灰白 内面：N7/0灰白	密　2mm以下の白色の砂粒含む	9.8	－	5.0	外面：回転ナデ、回転ヘラケズリ ヘラ記号あり 内面：回転ナデ
27	－	S71-1	須恵器	坏蓋	外面：N7/0灰白 内面：N7/0灰白	密　1mm以下の白色の砂粒含む	12.0	－	(4.6)	外面：回転ナデ、回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ
28	－	S71-1　下層	須恵器	高坏（脚部）	外面：N7/0灰白 内面：N7/0灰白	密　1mm以下の白色の砂粒含む	－	(14.0)	(8.25)	外面：回転ナデ、透かし3ヶ所 内面：回転ナデ
29	－	S71-1　下層	須恵器	高坏（脚部）	外面：N7/0灰白 内面：N7/0灰白	密　1mm以下の白色の砂粒含む	－	(9.8)	(5.0)	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ
30	－	S71-3	須恵器	甕（体部）	外面：N7/0灰白 7.5Y4/3暗オリーブ(自然釉) 内面：N7/0灰白	やや密　2mm以下の灰白色の砂粒含む	－	－	(19.8)	外面：格子状タタキ　ハケメ 内面：同心円文タタキ
31	－	S71-3	須恵器	短頸壺	外面：N6/0灰 7.5Y5/3灰オリーブ(自然釉) 内面：N6/0灰	やや密 2mm以下の灰白色の砂粒、黒色鉱物粒含む	体部(21.05)	頚部(10.1)	(16.15)	外面：回転ナデ　ヘラケズリ　沈線 内面：回転ナデ
32	－	S71-3	須恵器	高坏（坏～脚柱部）	外面：N7/0灰白 内面：N7/0灰白	密　1mm以下の白色の砂粒含む	(16.0)	－	(9.5)	外面：回転ナデ、回転ヘラケズリ 内面：ナデ
33	－	S71-3	須恵器	坏蓋	外面：N8/0灰白 内面：N8/0灰白	密　1mm以下の白色の砂粒含む	12.8	－	3.9	外面：回転ナデ　回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ
34	E4	S71-2 畦b・c間	須恵器	坏蓋	外面：N6/0灰 内面：N6/0灰	やや粗　2mm以下の灰白色の砂粒含む	(11.6)	－	4.05	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ
35	F2	S72	須恵器	埦（口縁部）	外面：N6/0灰 内面：N6/0灰	やや密　2mm以下の灰白色の砂粒、黒色鉱物粒含む	(14.4)	－	(3.2)	外面：回転ナデ　重ね焼き痕 内面：回転ナデ

表３　出土遺物観察表③

番号	グリッド	遺構名	遺物名	器種（部位）	色調	胎土	法量（cm）			形態的特徴・調整など
							口径	底径	器高	
36	F2	S73	須恵器	小壺（肩～底部）	外面：N4/0灰 内面：N6/0灰	やや密　2mm以下の灰白色の砂粒、黒色鉱物粒含む	体部(6.2)	高台(4.2)	(6.1)	外面：回転ナデ　回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ
37	F3	S73	須恵器	鉢（口縁部）	外面：N6/0灰 内面：N5/0灰	密　1mm以下の灰白色の砂粒含む	(17.9)	－	(3.0)	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ
38	F3	S73	須恵器	皿（底部）	外面：N7/0灰白 内面：N6/0灰	やや密　2mm以下の灰白色の砂粒、黒色鉱物粒含む	(8.4)	(5.6)	1.35	外面：回転ナデ　糸切り痕 内面：回転ナデ
39	F4	S71-3	須恵器	高坏（脚部）	外面：5YR4/2灰褐 内面：N6/0灰	やや密　2mm以下の灰白色の砂粒含む	－	脚部(10.4)	(2.7)	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ
40	G2	S73	磁器	白磁（底部）	外面：N7/0灰白 内面：10Y7/1灰白(施釉) N7/0灰白(露胎)	密	－	(6.8)	(1.9)	外面：施釉 内面：施釉　離れ砂付着
41	G3	S73	須恵器	埦（口縁部）	外面：N4/0灰 内面：N5/0灰	やや密　1mm以下の灰色の砂粒含む	(17.0)	－	(3.15)	外面：回転ナデ　重ね焼き痕 内面：回転ナデ　重ね焼き痕
42	G3	S73	磁器	肥前焼筒型碗	外面：5B7/1明青灰 内面：5B7/1明青灰	密	－	(9.0)	(2.55)	外面：施釉 内面：施釉
43	G3	S73	須恵器	鉢(口縁部)	外面：N5/0灰 内面：N7/0灰白	やや密　2mm以下の灰白色の砂粒、黒色鉱物粒含む	(27.6)	－	(3.9)	外面：回転ナデ　重ね焼き痕 内面：回転ナデ　重ね焼き痕
44	G4	S73	瓦	丸瓦（玉縁）	外面：N7/0灰白 内面：N6/0灰	密　1mm以下の灰白色の砂粒含む	長(9.2)	幅(3.45)	厚(1.4)	外面：ナデ 内面：ナデ
45	G5	S73	瓦	平瓦	外面：N5/0灰 内面：N7/0灰白	やや密　2mm以下の灰色の砂粒含む	長(7.45)	幅(9.0)	厚(1.6)	外面：－ 内面：布目痕
46	H4	S73	須恵器	皿（口縁～底部）	外面：N3/0暗灰 内面：N4/0灰	やや密　2mm以下の灰色の砂粒含む	(7.4)	(4.8)	2.8	外面：回転ナデ　糸切り痕 内面：回転ナデ
47	H4	S73	須恵器	埦（体～底部）	外面：N7/0灰白 内面：N7/0灰白	やや密　2mm以下の灰白色の砂粒、黒色鉱物粒含む	－	(5.0)	(2.75)	外面：回転ナデ　糸切り痕 内面：回転ナデ
48	H5	S73	土師器	（底部）	外面：5YR6/4にぶい橙 内面：2.5YR7/6橙	やや密　2mm以下の灰褐色の砂粒含	－	高台(7.1)	(3.0)	外面：ヨコナデ　ナデ 内面：ナデ
49	H5	S73	瓦	平瓦	外面：N6/0灰 内面：N6/0灰	やや粗　2mm以下の灰白色の砂粒、3mmの灰色の小石粒含む	長(11.9)	幅(7.9)	厚(1.9)	外面：ナデ 内面：布目痕
50	I4	S73	瓦	平瓦	外面：N3/0暗灰 内面：N3/0暗灰	やや密　2mm以下の灰色の砂粒含む	長(6.1)	幅(9.3)	厚(2.1)	外面：タタキ 内面：布目痕
51	I4	S73	須恵器	鉢(口縁部)	外面：N6/0灰 N3/0暗灰(自然釉) 内面：N6/0灰	やや密　2mm以下の灰色の砂粒含む	(23.6)	－	(3.85)	外面：回転ナデ　自然釉付着 内面：回転ナデ
52	I4	S73	須恵器	鉢（底部）	外面：N7/0灰白 内面：N7/0灰白	やや粗　2mm以下の灰白色の砂粒、3mmの灰白色の小石粒含む	－	(10.8)	(1.95)	外面：ナデ　糸切り痕 内面：回転ナデ後不定方向のナデ
53	I4	S73	須恵器	鉢（底部）	外面：N7/0灰白 内面：N6/0灰	やや密　2mm以下の灰色の砂粒含む	－	(10.4)	(3.95)	外面：回転ナデ　糸切り痕 内面：回転ナデ
54	K4	S73	須恵器	埦（口縁部）	外面：N6/0灰 内面：N5/0灰	やや密　2mm以下の灰色の砂粒含む	(15.4)	－	(2.6)	外面：回転ナデ　回転ヘラケズリ 重ね焼き痕 内面：回転ナデ

表４　出土遺物観察表④

番号	グリッド	遺構名	遺物名	器種（部位）	色調	胎土	法量（cm）			形態的特徴・調整など
							口径	底径	器高	
55	K4	S73	須恵器	埦（口縁部）	外面：N7/0灰白 内面：N7/0灰白	密　1mm以下の灰白色の砂粒、黒色鉱物粒含む	(16.6)	－	(2.2)	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ
56	K4	S73	瓦	丸瓦	外面：N8/0灰 内面：2.5Y8/1灰白	やや密　2mm以下の暗灰色の砂粒含む	長(5.9)	幅(5.3)	厚(1.5)	外面：ナデ 内面：布目痕
57	J3	S75	土師器	小皿（底部）	外面：2.5Y7/4浅黄 内面：2.5Y7/3浅黄	やや密　2mm以下の灰色の砂粒含む	(10.4)	－	0.9	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ
58	J3	S75	陶器	丹波焼擂鉢（底部）	外面：10YR4/3にぶい黄褐 内面：10YR5/4にぶい黄褐	やや粗　2mm以下の灰白色の砂粒、3mmの灰白色の小石粒含む	－	(16.0)	(3.35	外面：ヨコナデ 内面：擂り目
59	J4	S91	磁器	白磁碗（口縁部）	外面：7.5Y7/1灰白（施釉） 内面：7.5Y7/1灰白（施釉）	密	(15.2)	－	(1.95)	外面：施釉　沈線　虫食いあり 内面：施釉　虫食いあり
60	C1	S105	須恵器	埦（口縁～底部）	外面：N6/0灰 内面：N6/0灰	やや密　2mm以下の灰色の砂粒含む	(16.0)	(5.0)	4.3	外面：回転ナデ　ナデ後板状工具痕 内面：回転ナデ
61	F3	S110	磁器	青磁皿（口縁部）	外面：10Y5/2オリーブ灰（施釉） 内面：10Y5/2オリーブ灰（施釉）	密	(10.8)	(6.8)	1.55	外面：施釉　虫食いあり 内面：施釉　虫食いあり
62	F4 杭付近	S110	瓦	平瓦	外面：N7/0灰白 内面：N7/0灰白	密　1mm以下の暗灰色の砂粒含む	長(6.3)	幅(6.7)	厚(1.2)	外面：ナデ 内面：布目痕
63	F3	S73	瓦	丸瓦（玉縁）	外面：N6/0灰 内面：N5/0灰	やや密　2mm以下の灰色の砂粒含む	長(4.3)	幅(7.45)	厚(1.4)	外面：回転ナデ 内面：布目痕
64	G3	S162	須恵器	埦（口縁部）	外面：N6/0灰 内面：N6/0灰	やや密　2mm以下の灰色の砂粒含む	(15.8)	－	(2.8)	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ
65	G3	S162	瓦	平瓦	外面：N7/0灰白 内面：N7/0灰白	密　1mm以下の灰色の砂粒含む	長(7.7)	幅(7.1)	厚(1.6)	外面：ナデ 内面：ナデ
66	G3	S162	瓦	平瓦	外面：N7/0灰白 内面：N7/0灰白	やや粗　2mm以下の灰白色の砂粒、3mmの暗灰色の小石粒含む	長(11.15)	幅(12.75)	厚(1.9)	外面：ナデ 内面：布目痕
67	G3	S162	瓦	丸瓦	外面：N5/0灰 内面：N5/0灰	やや密　2mm以下の灰白色の砂粒、3mmの暗灰色の小石粒含む	長(19.9)	幅(16.05)	厚(1.6)	外面：ナデ 内面：ナデ　工具痕

第４節　自然科学分析結果

１　はじめに

今回の分析調査では、７世紀第２四半期の焼土遺構（Ｓ71－１・２）の性格に関する情報を得ることを目的として、出土遺物について自然科学分析調査を実施する。

２　試料

Ｓ71－１・２から出土した炭化材、石材、骨片について、炭化材の樹種同定、岩石薄片作成鑑定、骨同定を実施する。分析点数は、炭化材の樹種同定が５点、岩石薄片作成鑑定が２点、骨同定が１式（約 20 片の個体）である。

樹種同定は、炭化材片を回収した遺物番号 240 炭化物１（Ｓ71－１　石 41）、遺物番号 273 炭化物２（Ｓ71－１(畦 a)）の２点から、同定可能が個体を各 5 点、計 10 点選択して実施する。岩石薄片作成鑑定は、遺物番号 214 石材１（Ｓ71－２　石 17）、遺物番号 229 石材２（Ｓ71－１　石 30）として取り上げられた複数個体ある石材試料から、状態が最も良いものを各１点選択して２点実施する。骨同定は、遺物番号 272 骨片１（Ｓ71－２(畦 b)）、遺物番号 273 骨片２（Ｓ71－１(畦 a)）、遺物番号 274 骨片３（Ｓ71－２(畦 b)）として取り上げられた骨片のなかから、同定可能な試料を選択して１式分を実施する。

３　分析方法

（１）炭化材の樹種同定

炭化材は、自然乾燥させた後、木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の３断面割断面を作製して実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡で木材組織の種類や配列を観察する。各試料の観察で確認された特徴を現生標本と比較して種類を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東 1982 や Richter 他 2006 を参考にする。

（２）骨同定

資料に付着した砂分などを乾いた筆・竹串等で静かに除去する。一部の資料については、一般工作用接着剤を用いて接合する。自然乾燥後、試料を肉眼および実体顕微鏡で観察し、その形態的特徴から、種類および部位の特定を行う。計測はデジタルノギスを使用する。

（３）岩石薄片作成鑑定

薄片観察は、岩石を 0.03 ㎜の厚さに研磨した薄片を顕微鏡下で観察すると、岩石を構成する鉱物の大部分は透光性となり、鉱物の性質・組織などが観察できるようになるということを利用している。

薄片用の岩石チップは、ダイヤモンドカッターにより 22×30×15 ㎜の直方体に切断・整形して作製する。そのチップをプレパラートに貼り付けた後、ダイヤモンドカッターによりチップを薄く切断する。プレパラート上のチップは、＃180～#800 の研磨剤を用い、研磨機上で厚さ 0.1㎜以下になるまで研磨する。さらに、メノウ板上で＃2500 の研磨剤を用いて研磨し、正確に 0.03㎜の厚さに調整する。プレパラート上で薄くなった薄膜状の岩石片の上にカバーガラスを貼り付け、観察用の薄片とする。薄片は偏光顕微鏡下において観察記載を行う。

４　結果

（１）炭化材の樹種同定

同定結果を表５に示す。炭化材は、全て針葉樹のヒノキ科に同定された。ヒノキ科の解剖学的特徴について記す。

表５　樹種同定結果

遺物番号	試料№	遺構など	点数	種類・（点数）
240	炭化物1	S71-1　石41	5	ヒノキ科(5)
273	炭化物2	S71-1(畦a)	5	ヒノキ科(5)

・ヒノキ科（Cupressaceae）

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか～やや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔は保存が悪く観察できない。放射組織は単列、１～10 細胞高。

（２）骨同定

同定結果を表６に示す。いずれも白色を呈し、表面に細かなひび割れなどが生じる。骨片１では、頭蓋骨の可能性がある破片、四肢骨片、部位不明破片などがみられる。特徴的な部位がなく、種類不明である。骨片２では、種類・部位不明破片である。骨片３では、頭蓋骨の可能性がある破片、四肢骨片、部位不明破片などがみられる。本試料も特徴的な部位が検出されず、種類不明である。

表６　骨同定結果

遺物番号	試料名	遺構など		種類	部位	部分	数量		備考
272	骨片1	S71-2(畦b)	E4	獣類	頭蓋骨?	破片	2		
				獣類	四肢骨	破片	9		
				獣類	不明	破片	123	+	
				礫等			3		
273	骨片2	S71-1(畦a)		獣類	不明	破片	45	+	土塊状含む
274	骨片3	S71-2(畦b)		獣類	頭蓋骨?	破片	1		
				獣類	四肢骨	破片	4		
				獣類	不明	破片	69	+	

（３）岩石薄片作成鑑定

偏光顕微鏡下における観察から構成鉱物および組織の特徴を明らかにした。構成物の量比は、観察面全体に対して多量（＞50%）、中量（20～50%）、少量（５～20%）、微量（＜５%）およびきわめて微量（＜１%）という基準で目視により判定した。構成鉱物の量比は表７に示した。顕微鏡観察に際しては下方ポーラーおよび直交ポーラー下において代表的な箇所を撮影し、図版 36 に示した。以下に鏡下観察結果を述べる。

a)遺物番号 214 石材１　Ｓ71－２ 石 17

岩石名：流紋岩質溶結凝灰岩

岩石の組織：溶結状組織(welded texture)

鉱物片

石英：少量存在し、粒径最大 1.7mm の半自形～他形で、不定形粒状～破片状を呈し、清澄で高温クラックを有するものが多く占める。一部、融食形や波動消光を示すものもある。

斜長石：微量存在し、粒径最大 2.4mm の他形で、不定形柱状～厚板状を呈し、集片双晶が発達する。

表７　石材の構成物量比

遺物番号	試料名	遺構など	岩石名	鉱物片					岩片		基質(変質鉱物)						
				石英	斜長石	黒雲母	ジルコン	不透明鉱物	流紋岩	ホルンフェルス	シリカ鉱物	カルセドニー	セリサイト	緑簾石	水酸化鉄	クラック	孔隙
214	石材1	S71-2 石17	流紋岩質溶結凝灰岩	△	＋	＋		＋	±	±	◎	△			＋	△	±
229	石材2	S71-1 石30	流紋岩質溶結結晶凝灰岩	△	△	＋	±	＋	±		◎	＋	±	±	△	＋	△

◎多量(＞50%)　○中量(20～50%)　△少量(5～20%)　＋微量(＜5%)　±きわめて微量(＜1%)

黒雲母：微量存在し、粒径最大 0.8mm の他形で、葉片状～不定形板状を呈し、褐色～淡褐色の多色性を示す。

不透明鉱物：微量存在し、粒径最大 0.33mm の他形で、不定形粒状を呈して点在する。

岩片

流紋岩：きわめて微量存在し、粒径最大 1.18mm の他形で、亜円礫状を示す。無斑晶質で、石基の結晶化が進んでいる。微細な珪長質鉱物や雲母鉱物からなっており、水酸化鉄や赤鉄鉱による汚染が認められる。

ホルンフェルス：きわめて微量存在し、粒径最大 1.25mm の他形で、亜角礫状を示す。石英、斜長石、黒雲母、不透明鉱物などから構成される。黒雲母の水酸化鉄化が著しい。

基質

シリカ鉱物：多量存在し、粒径 0.01mm 以下で、隠微晶質で、基質を広範に埋めている。溶結により引き伸ばされた軽石片を置換し、仮像を形成しているものが認められる。

カルセドニー：少量存在し、粒径 0.05mm 以下で、放射性繊維束状を呈しており、石英とともに基質を埋めている。レンズ状～帯状の分布を示す。

水酸化鉄：微量存在し、隠微晶質で褐色を呈し、鉱物片のクラックや基質を汚染している。礫表面付近に分布するものは赤味が強くなっている。

クラック：幅 0.07mm 以下で 10 数条程度存在し、無方向性で基質や鉱物片を切って存在する。内部を石英粒や水酸化鉄、赤鉄鉱によって充填されている。

孔隙：極めて微量存在し、最大孔径 0.67mm で、不定形状を示す。鉱物片や基質に散在し、内部周縁に黒雲母が生じているものもある。

b)遺物番号 229 石材２　Ｓ71－１　石 30

岩石名：流紋岩質溶結結晶凝灰岩

岩石の組織：溶結状組織(welded texture)

鉱物片

石英：少量存在し、粒径最大 2.12mm の他形で、不定形粒状～破片状を呈し、清澄なものが多く占める。一部、融食形や波動消光を示すものもある。

斜長石：少量存在し、粒径最大 0.91mm の他形で、不定形柱状～厚板状を呈し、無双晶のものが多い。一部アルバイト双晶を示すものがあるが、汚濁しているものやセリサイト化してい

るものが散見される。

黒雲母：微量存在し、粒径最大 0.8mm の他形で、葉片状～不定形板状を呈し、褐色～淡褐色の多色性を示す。著しくオパサイト化している。

ジルコン：きわめて微量存在し、粒径 0.10mm 以下で、無色の自形で柱状を呈する。基質に散点して分布する。

不透明鉱物：微量存在し、粒径最大 0.33mm の他形で、不定形粒状を呈して点在する。

岩片

流紋岩：きわめて微量存在し、粒径最大 1.71mm の亜角礫様で、無斑晶質で、石基の結晶化が進んでいる。微細な珪長質鉱物や雲母鉱物からなっており、水酸化鉄や赤鉄鉱による汚染が認められる。

基質

シリカ鉱物：多量存在し、粒径 0.01mm 以下で、隠微晶質で不定形粒状を呈して、基質に広範に分布する。溶結により引き伸ばされた軽石片を置換し、仮像を形成しているものが認められる。

カルセドニー：微量存在し、粒径 0.05mm 以下で、放射性繊維束状を呈しており、石英とともに基質を埋めている。レンズ状～帯状の分布を示す。

セリサイト：きわめて微量存在し、粒径 0.01mm 以下で斜長石片内部において、交代している。

緑簾石：きわめて微量存在し、粒径 0.12mm 以下、他形、不定形柱状を呈する。淡黄色を示し、黒雲母を交代する。

水酸化鉄：少量存在し、粒径 0.01mm 以下で、不定形粒状を示して、基質を埋めている。

クラック：最大幅 0.8mm で、10 条程度存在し、無方向性をもって基質や鉱物片を切って存在する。一部、内部を水酸化鉄によって埋められているものも存在する。

孔隙：少量存在し、最大孔径 1.41mm の不定形状を呈して、鉱物片や基質に点在して分布する。

５　考察

（１）木材利用

今回調査を行った遺物番号 240（Ｓ71－１　石 41）および遺物番号 273（Ｓ71－１(畦 a)）の炭化材（遺物番号 240）は、被熱の痕跡がある獣骨片や石材と共に出土することから、燃料材として利用された木材の一部に由来する可能性がある。各試料から抽出した 10 点の炭化材は、いずれも小破片であり、全て針葉樹のヒノキ科に同定された。ヒノキ科には、ヒノキ、サワラ、アスナロ等の有用材が含まれ、現在は山地に生育し、また栽培されることもある。木材は、いずれも軽軟であり、木理は通直で割裂性・加工性・耐水性が高い。

ヒノキ科には有用材が多いことから、燃料材とすれば、加工時に生じる枝等の残材や廃材等が利用された可能性がある。また、ヒノキ科の木材は軽軟で燃えやすいため、硬い広葉樹材等に比べて残りにくいと考えられる。ヒノキ科のみが検出された状況から、燃料材としてヒノキ科が単独で利用された可能性がある。

（２）出土骨の特徴

今回調査を行った骨は、いずれも白色を呈し、表面に細かなひび割れが生じるなど、焼骨の特

徴を示す。最大でも約 2.5cm 程度の大きさであり、確認された部位も頭蓋骨の可能性がある破片、四肢骨程度である。関節部など特徴的な部分がみられないため、種類を明らかにすることができない。なお、骨の中心部まで白色化していることを考えると、軟質部が無くなるまで焼かれた、あるいは骨となった状態で焼かれたことなどが考えられる。

（３）石材の産地と被熱状況

岩石薄片作成に用いた石材は、遺物番号 214(石材１：Ｓ71－２　石 17)が長辺約 13 ㎝、短辺約 6 ㎝、厚さ約 2 ㎝の小判状を呈する角礫、遺物番号 229(石材２：Ｓ71－１　石 30)が長辺約 14.5 ㎝、短辺約 8.5 ㎝、厚さ約 4.5 ㎝の小判状を呈する亜角礫である。

観察の結果、石材は、流紋岩質溶結凝灰岩および流紋岩質溶結結晶凝灰岩にそれぞれ鑑定された。いずれの石材も、鏡下では溶結組織を示し、石英、斜長石および黒雲母といった鉱物片を含んでおり、脱ガラス化作用を受けている。溶結組織を示す岩相を考慮すると、三木市東方に位置する帝釈山地を広く占める後期白亜紀の有馬層群の流紋岩質火砕岩に由来すると推測される(河田・宮村 1986)。帝釈山地には、三木市に向かって流下する加古川水系の志染川や淡河川といった河川が認められる。したがって、石材１および石材２は、大塚出張遺跡周辺を流下する志染川および三木市久留美において志染川と合流する美嚢川の河床礫、もしくは、段丘堆積物中の礫から採取されたものと推測される。

石材１に認められる水酸化鉄は、礫表面部に分布するものほど赤味が強くなっている。水酸化鉄は、270～325℃程度の焼成を受けると脱水し、赤鉄鉱へ変化するとされている（吉木 1959)。石材１に認められる、礫表面の赤色化は、水酸化鉄の赤鉄鉱化によるものと判断できることから、この程度の焼成を被ったものと推測される。一方の石材２には、このような変化は認められない。しかし、礫表面付近の水酸化鉄はやや明色化していることから、270～325℃程度には達しないものの、焼成を被った可能性が示唆される。

〈引用文献〉

河田清雄・宮村学・吉田史郎　1986　『20 万分の 1「京都及大阪」』　地質調査所

Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E.（編）　2006　『針葉樹材の識別　IAWA による光学顕微鏡的特徴リスト.伊東隆夫･藤井智之･佐野雄三･安部久･内海泰弘(日本語版監修)』 海青社　70p ［Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E.(2004)*IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification*］

島地　謙・伊東隆夫　1982　『図説木材組織』　地球社　176p

吉木文平　1959　『鉱物工学』　技報堂　710p

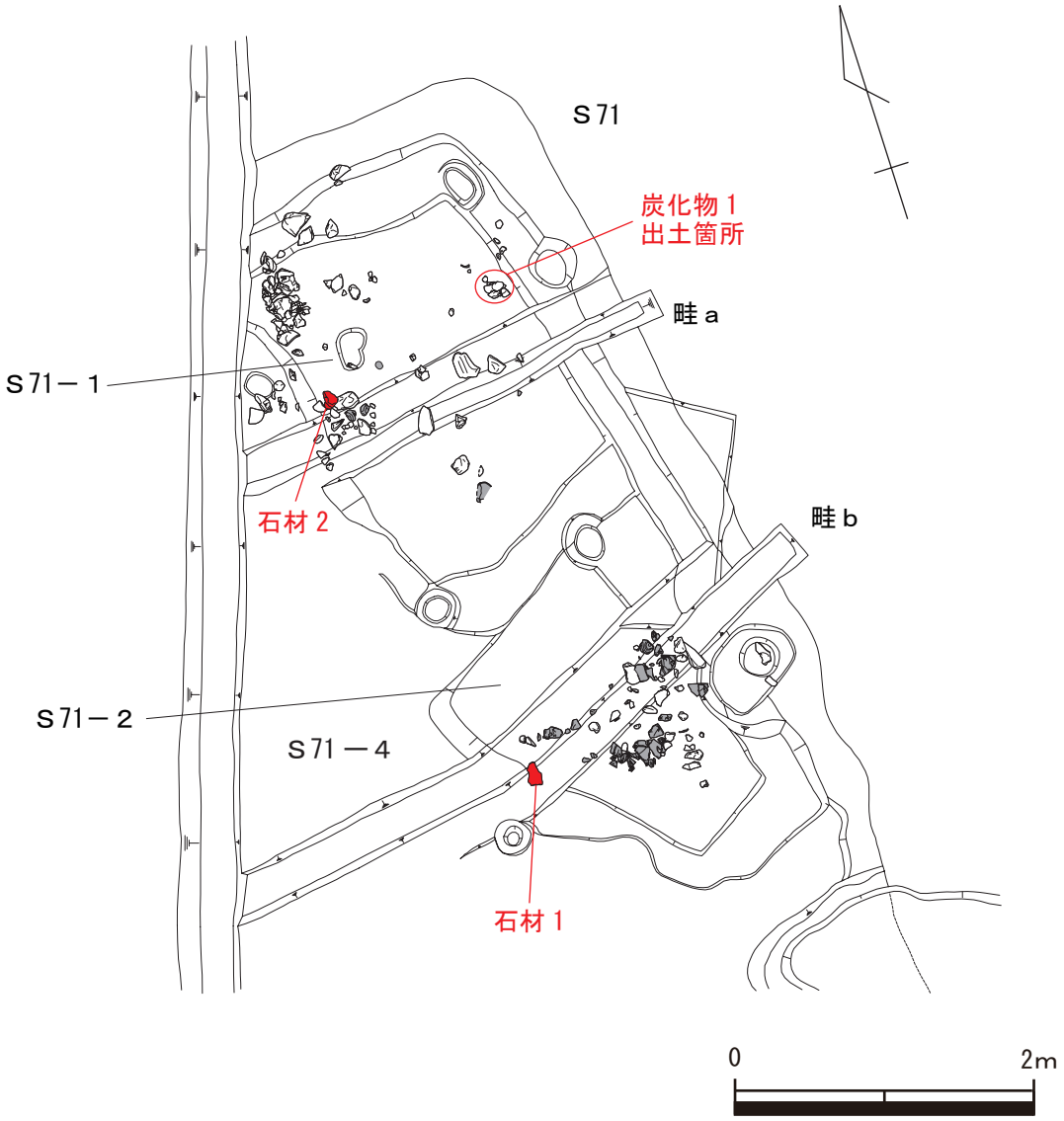
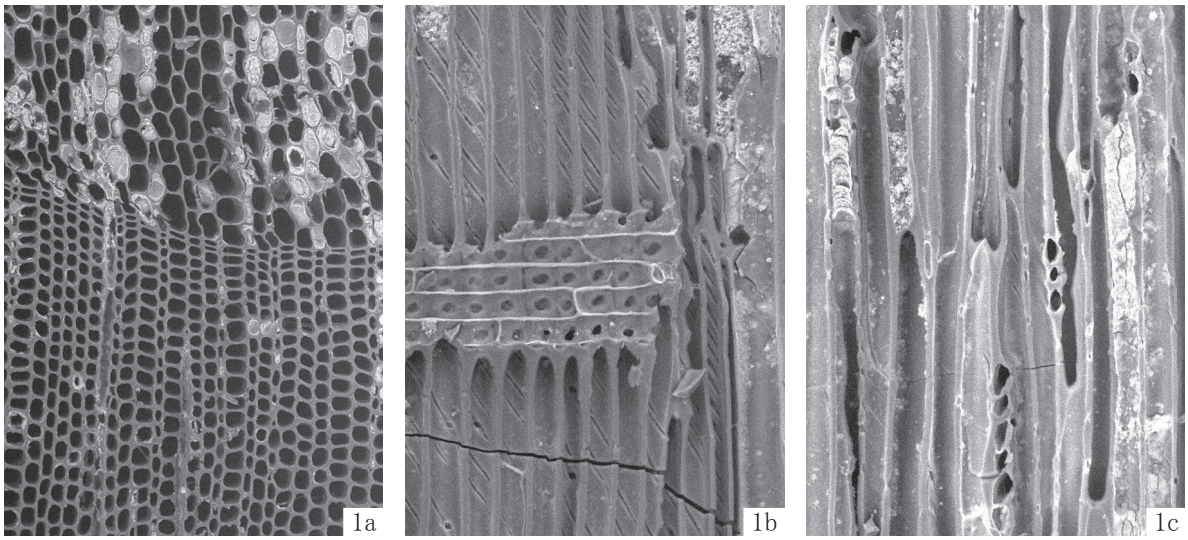
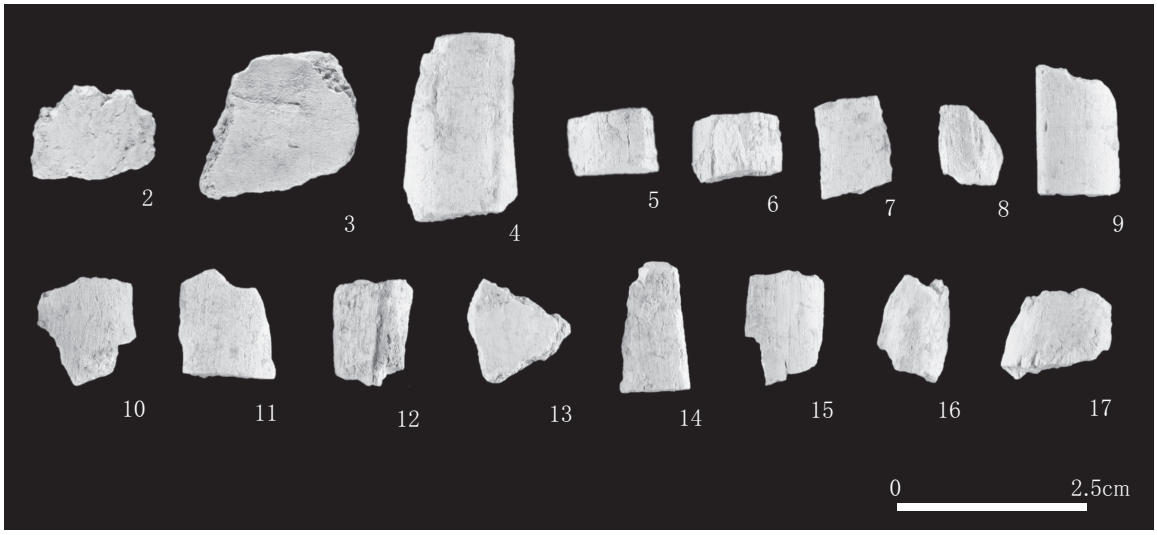


図34　S71－1・2　平面図（自然科学分析試料）



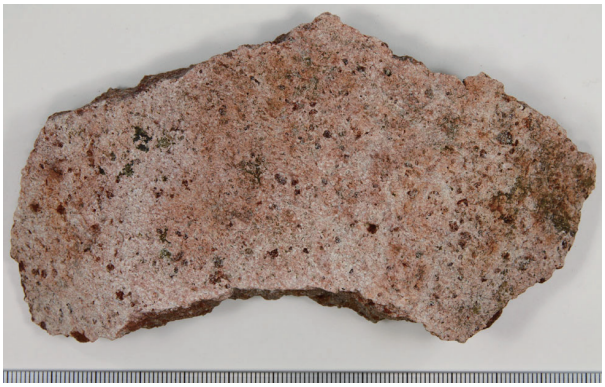
1.ヒノキ科(取上№240;試料№炭化物1)
a:木口,b:柾目,c:板目

100 μ m:a
100 μ m:b,c



2.獣類頭蓋？(骨片1;S71-2(畦b)E4 No.272)
3.獣類頭蓋？(骨片1;S71-2(畦b)E4 No.272)
4.獣類四肢骨(骨片1;S71-2(畦b)E4 No.272)
5.獣類四肢骨(骨片1;S71-2(畦b)E4 No.272)
6.獣類四肢骨(骨片1;S71-2(畦b)E4 No.272)
7.獣類四肢骨(骨片1;S71-2(畦b)E4 No.272)
8.獣類四肢骨(骨片1;S71-2(畦b)E4 No.272)
9.獣類四肢骨(骨片1;S71-2(畦b)E4 No.272)
10.獣類四肢骨(骨片1;S71-2(畦b)E4 No.272)
11.獣類四肢骨(骨片1;S71-2(畦b)E4 No.272)
12.獣類四肢骨(骨片1;S71-2(畦b)E4 No.272)
13.獣類頭蓋？(骨片3;S71-2(畦b) No.274)
14.獣類四肢骨(骨片3;S71-2(畦b) No.274)
15.獣類四肢骨(骨片3;S71-2(畦b) No.274)
16.獣類四肢骨(骨片3;S71-2(畦b) No.274)
17.獣類四肢骨(骨片3;S71-2(畦b) No.274)

図 35　炭化材・出土骨分析写真

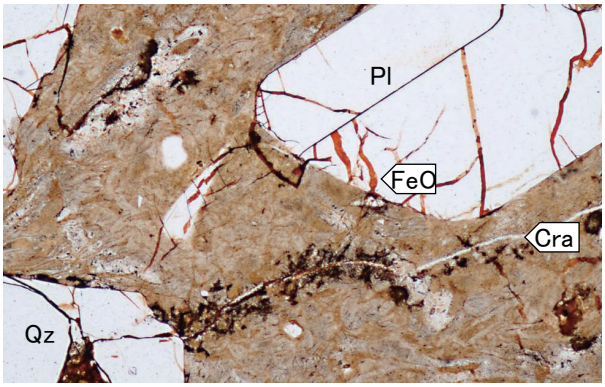


1. 石材1

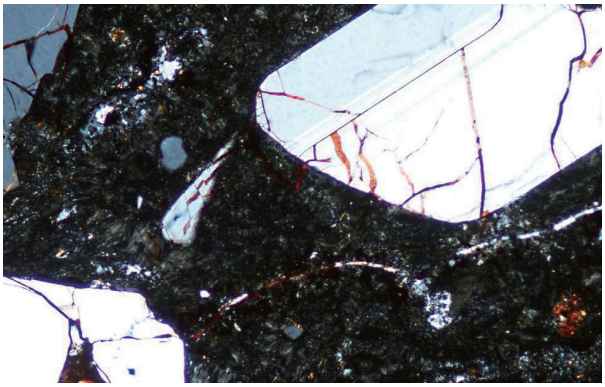
2. 石材1　側面

3. 石材2

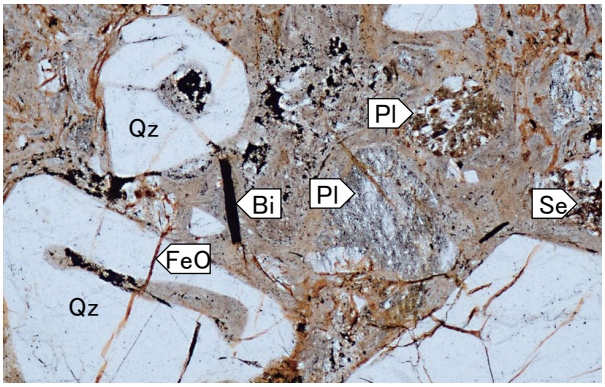
4. 石材2　側面



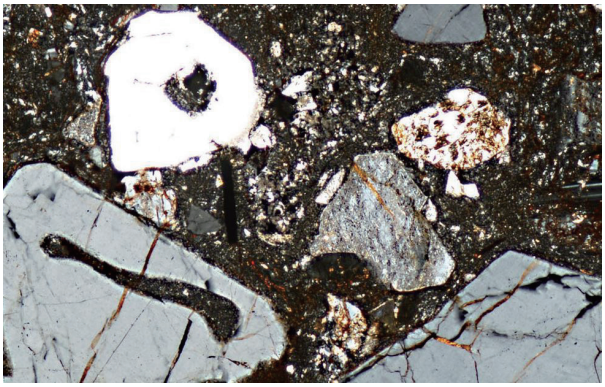
5. 石材1　下方ポーラー



6. 石材1　直交ポーラー



7. 石材2　下方ポーラー



8. 石材2　直交ポーラー

Qz:石英. Pl:斜長石. Bi:黒雲母. Se:セリサイト. FeO:水酸化鉄.Cra:クラック.

0.5mm

図 36　石材分析写真

5-8

第５節　まとめ

調査の結果、主に①７世紀前半の焼土関連遺構（Ｓ71－１～４）、②12 世紀の集落と遺物包含層（Ｓ73）、③12 世紀後半以降の耕地化の３段階に遺跡の特徴を見出すことができることが明らかとなった。

①については、流紋岩質凝灰岩を土台とし、ヒノキを被熱材として利用し、骨が粉々になるほどの高温で動物を焼いた遺構と判断できる。須恵器甕・壺・高坏・坏・坏蓋・瑳などが出土し、器種構成の多様性を指摘しうるが、その目的や遺構の性格については、今回の調査では明らかにできなかった。

②については、主に北側は柱穴群が展開する 12 世紀の集落、南西側は 12 世紀後半頃に形成された遺物包含層からなる。柱穴群については、掘立柱建物として並ぶものはみられなかったが、これについては、遺構面が耕土直下であったことから、削平を受けて消滅した遺構があったことを示しているといえる。遺物包含層は焼成不良の須恵器・瓦片や窯壁片が比較的多く出土していることから、灰原２次堆積層の可能性があり、低い土地のかさ上げによる可能性を指摘しておきたい。遺物包含層がどこから運び込まれたかについては、南東の宿原皿池に位置する宿原１～３号窯が候補としてあげられる。なお、当遺跡北側に接する宿原六萬窯は、古墳時代の窯とされているが、未調査のため時期については不明な点が多い。よって、これが仮に平安時代の窯であれば、こちらの灰原の可能性が高いといえよう。

③については、北側の集落が廃絶する。南西側は遺物包含層が形成された後、用水路（Ｓ75）が設けられたことから、一帯が耕地として利用されたと判断できる。南東側は用水路を隔てて一段低くなっており、用水路形成とともに耕地として利用されたといえる。用水路は、駐車場拡張のために埋め立てられる 2005 年まで存続した。

これらのことから調査地においては、12 世紀後半以降に集落が別の地域に移り、全面が耕地化したと判断できる。これは、集村化に伴う集落と耕地の二元化によるものとみられる。東側に近接する宿原寺ノ下遺跡は、11 世紀に集落が成立し、13 世紀前半までには集落が消滅していることから（兵庫県教育委員 2004）、大塚出張遺跡との類似性を見出すことができる。さらに、東に位置する吉田西向遺跡、志染川を隔てた与呂木宮ノ元遺跡、与呂木西界地遺跡もほぼ同時期の集落が展開し、13 世紀頃までには集落が消滅していることが確認されている（兵庫県教育委員 1994・2011）。すなわち、大塚周辺の広い範囲で集村化に伴う集落と耕地の二元化が行われたと判断でき、その移転先がおそらく現在の集落の可能性が高いと判断できよう。

本報告では、特に焼土関連遺構における動物を高温で焼くという行為とその事例について、筆者の力量不足により検討を深化できなかった。今後、同様の調査事例を収集し、改めて分析したうえで、その実態を明らかにしていきたい。

（引用文献）

兵庫県教育委員会　1994　『与呂木遺跡』　兵庫県文化財調査報告第 133 冊

2004　『宿原寺ノ下遺跡』　兵庫県文化財調査報告第 264 冊

2011　『吉田西向遺跡』　兵庫県文化財調査報告第 390 冊

写　真　図　版

調査前全景（南から）

Ｇ１　土層堆積状況（西から）

Ｇ１　ピット検出状況（東から）

Ｇ２　遺構検出状況（西から）

Ｇ２　Ｓ５検出状況（南から）

Ｇ３　土層堆積状況（北から）

Ｇ４　S71-1検出状況（北から）

Ｇ５　土層堆積状況（西から）

Ｇ６　土層堆積状況（西から）

Ｇ７　土層堆積状況（南から）

Ｇ８　土層堆積状況（北から）

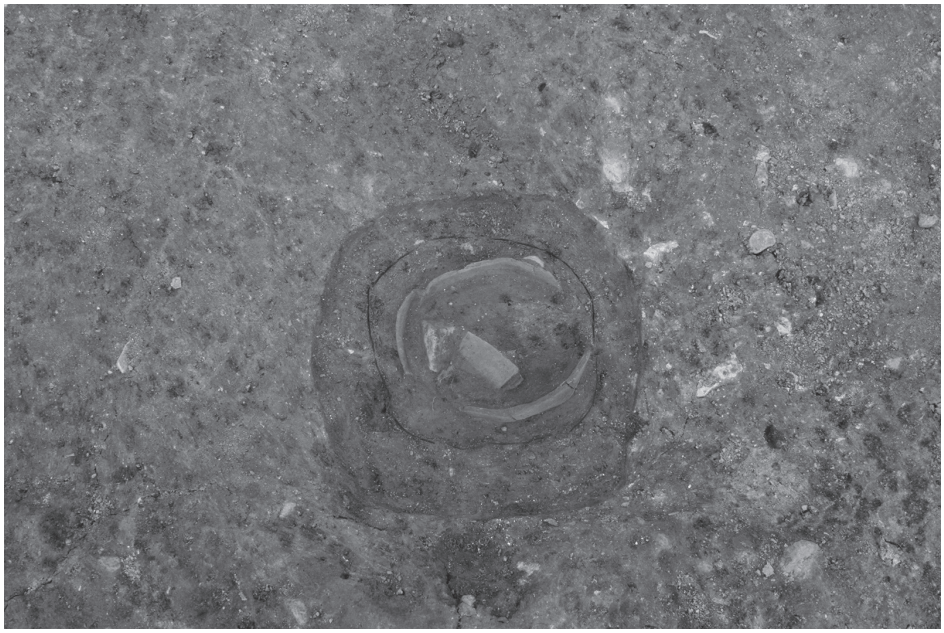
Ｇ９　土層堆積状況（東から）

Ｇ10　土層堆積状況（北から）

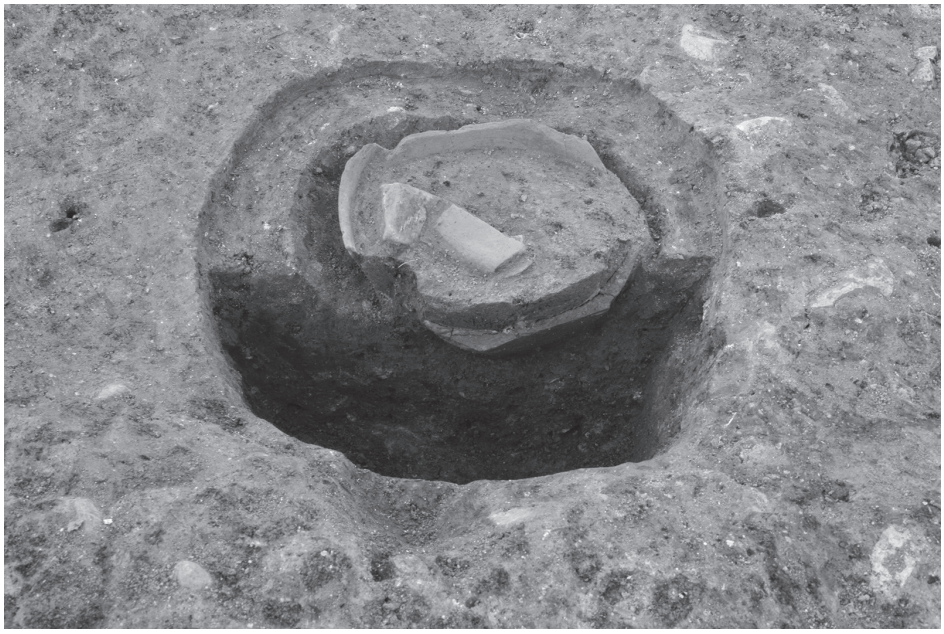
Ｇ11　土層堆積状況（北から）

重機掘削状況

埋戻し状況（南東から）



Ｓ５
検出状況（南西から）



Ｓ５
半截状況（南西から）

Ｓ28
半截状況（南から）

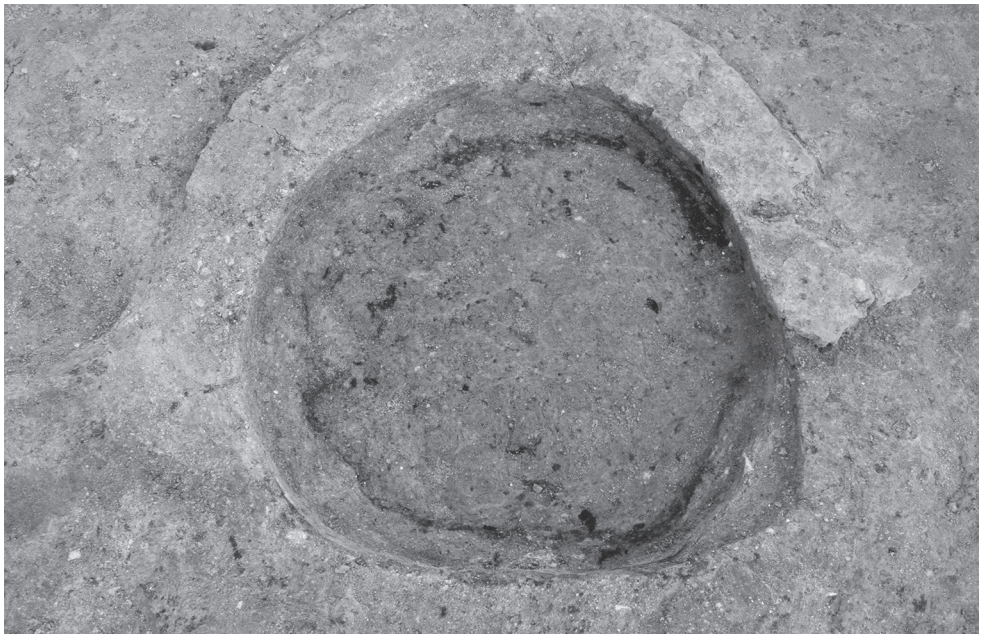
図版4

Ｓ52・109
畦a・b土層断面
（東から）

Ｓ109
畦a土層断面
（東から）

Ｓ52・109
畦b土層断面
（東から）

Ｓ55・161畦a・
Ｓ54・55畦b土層断面
（西から）

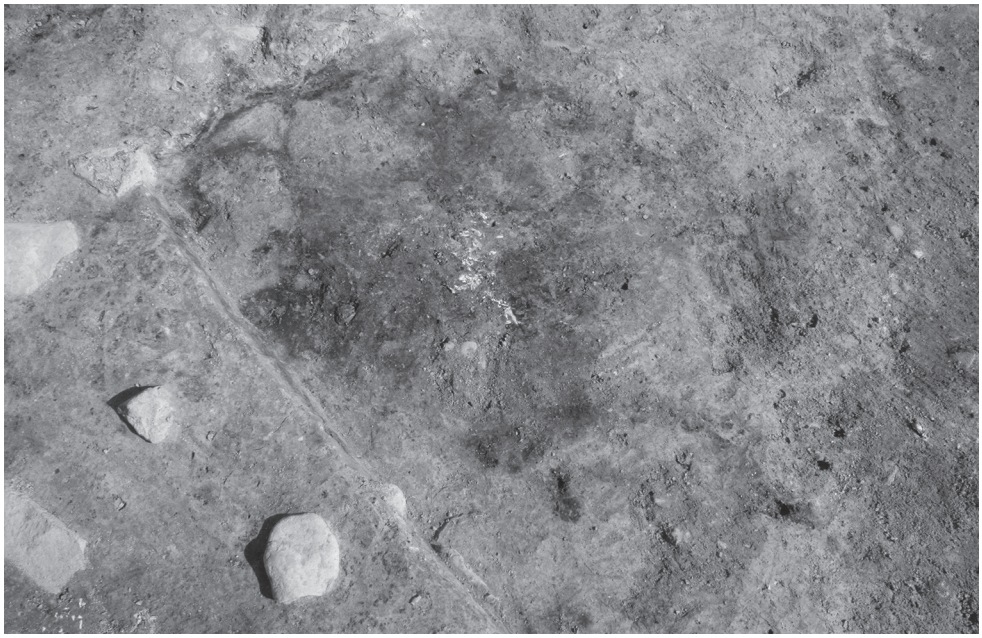


Ｓ70
検出状況（西から）

Ｓ70
半截状況（西から）

Ｓ71-1
流紋岩質凝灰岩
出土状況（北西から）

Ｓ71-1　下層
高坏脚部（29）
出土状況（北から）



Ｓ71-1
動物骨片・炭化物
検出状況（西から）

Ｓ71－１・２
全景（南から）

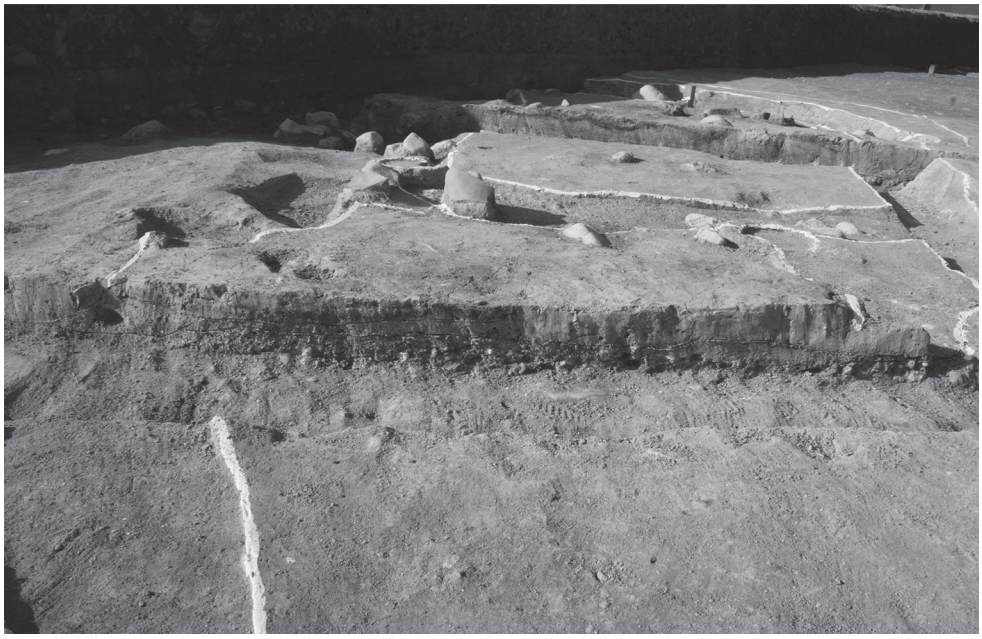
Ｓ71
畦a土層断面
（南から）

Ｓ71
畦a東端　土層断面
（南から）

S71
畦a西端　土層断面
（南から）

S71
畦b土層断面
（南から）

S71
畦b東端　土層断面
（南から）



S71
畦b中央　土層断面
（南から）

S71
畦b西端　土層断面
（南から）

S71
完掘状況全景
（北西から）

図版10

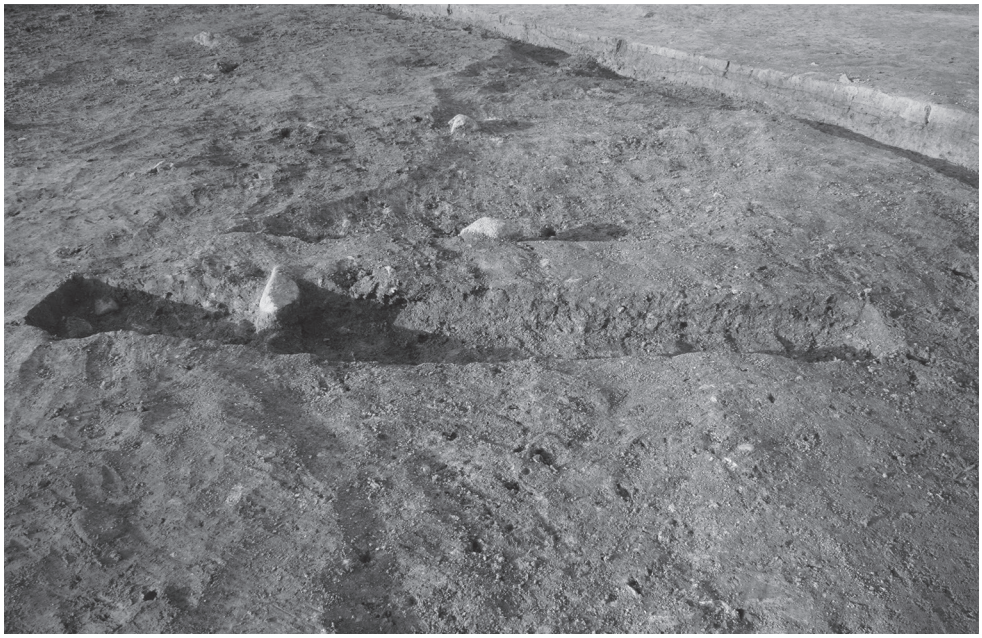
S71
完掘状況全景
（南東から）

S71-3
遺物出土状況
（北西から）

S71-3
遺物出土状況（33）
（東から）

Ｓ71-3
遺物出土状況
（30・31・32）
（東から）

Ｓ71-3
畦c　土層断面
（南から）



Ｓ71-3
畦d　土層断面
（南から）

図版12

S72・110
畦a・b土層断面
（西から）

S72・110
畦a土層断面
（南西から）

S72・110
畦b土層断面
（西から）

S73
検出状況
（北から）

S73
完掘状況
（北から）

S73
検出状況
（南東から）

図版14

S73
完掘状況
（南東から）

S73
畦a土層断面
（西から）

S73
畦b土層断面
（西から）

S75・76
全景
（北東から）

S75・76
全景
（南西から）

S75・76
全景
（北西から）

図版16

S75
南壁土層断面
（北から）

S86
検出状況
（北東から）

S86
北東端検出状況
（北東から）

S162
遺物出土状況
（北から）

北壁土層断面
（南東から）

東壁土層断面
（北西から）

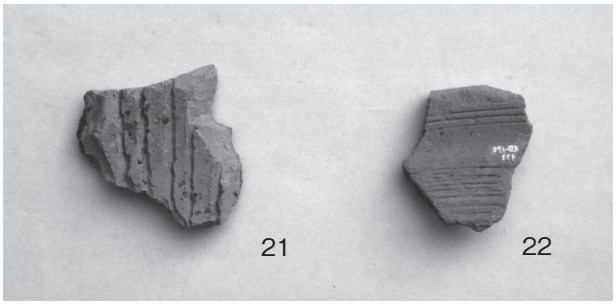
図版18

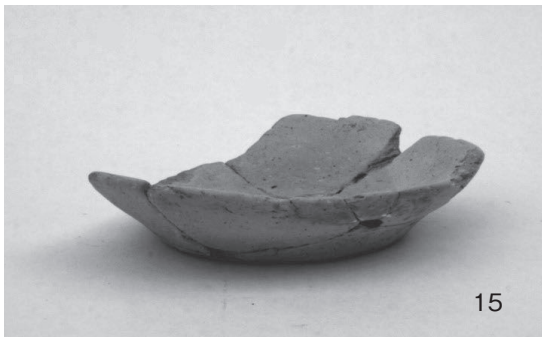
南壁土層断面
（北西から）

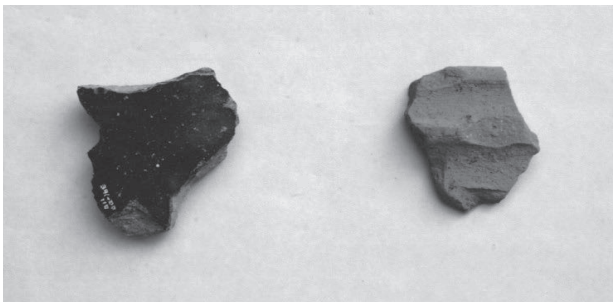
西壁南側
土層断面
（南東から）

西壁張出部
土層断面
（南東から）

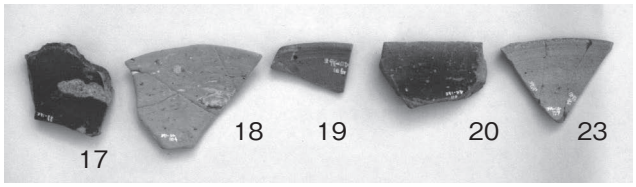
14

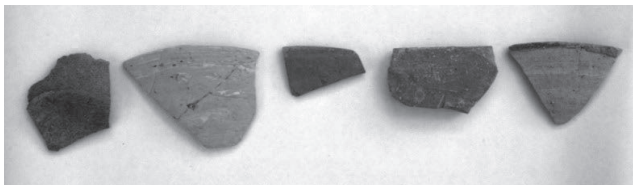

21
22


15

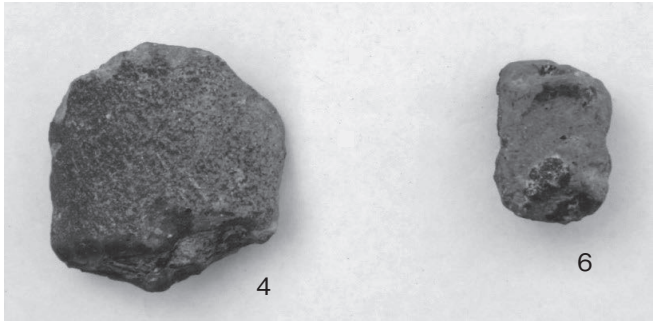


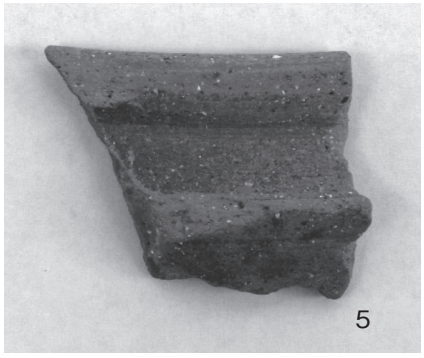
16

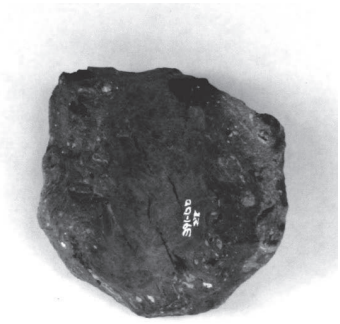

17
18
19
20
23



60

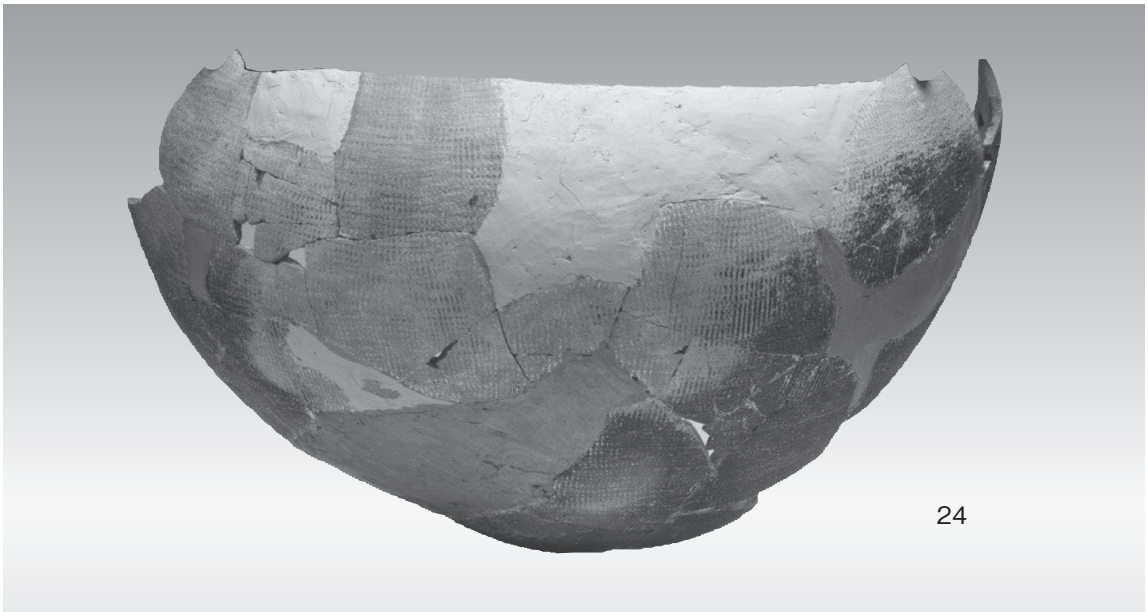

4
6


5

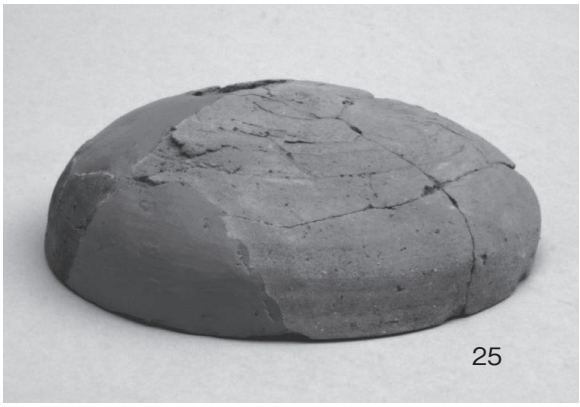


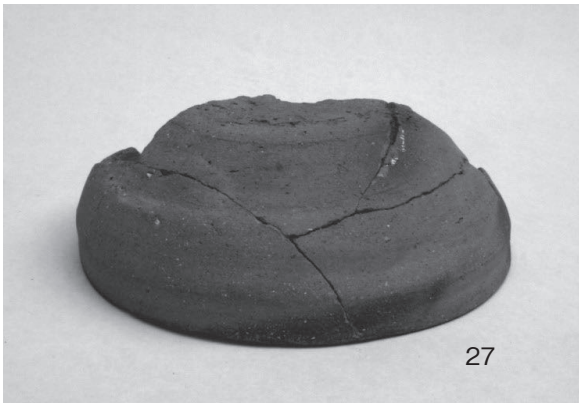
7

31


24

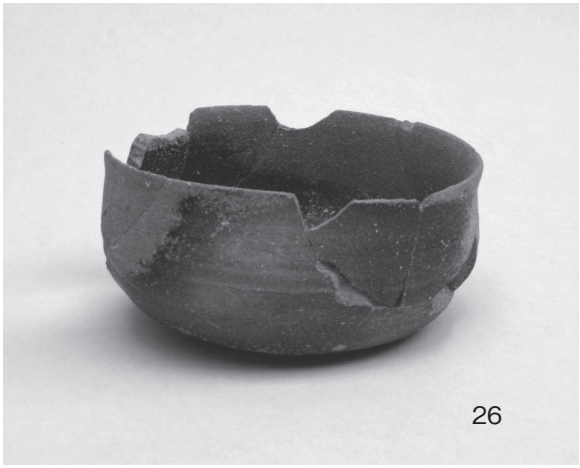
30


25

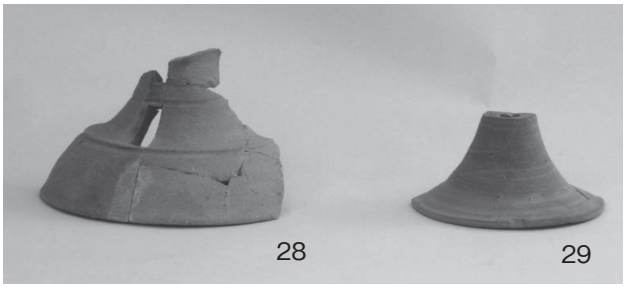

27

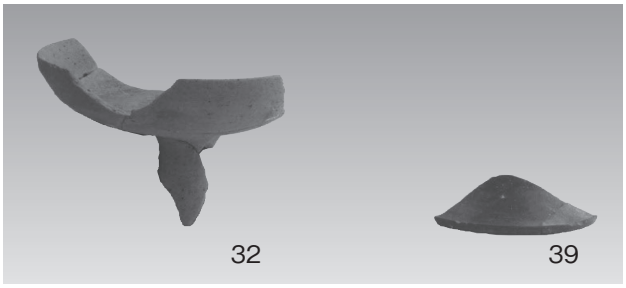
33

34

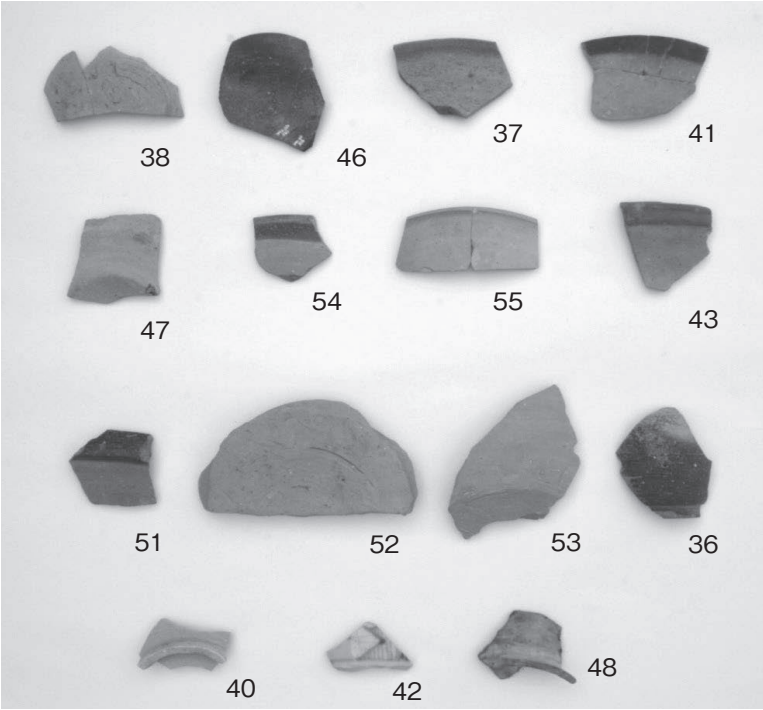

26

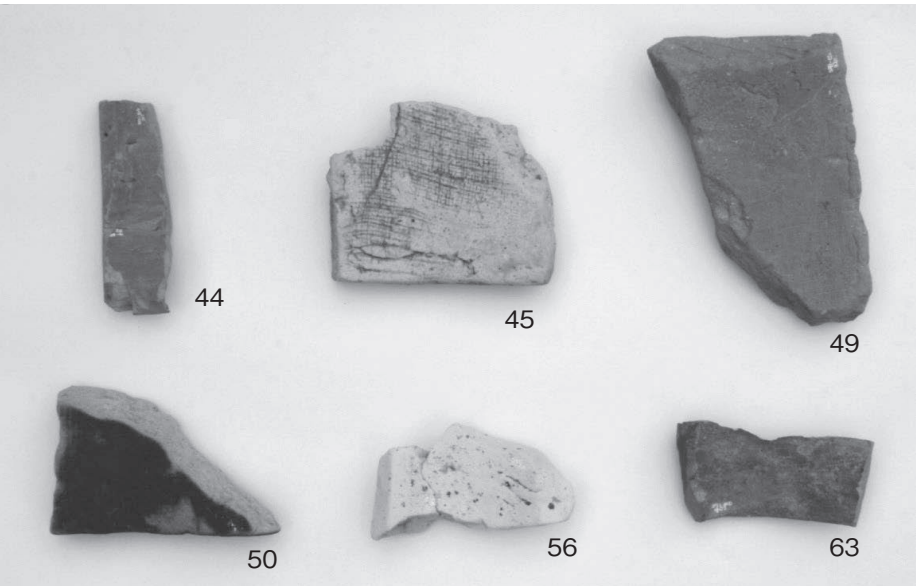
12

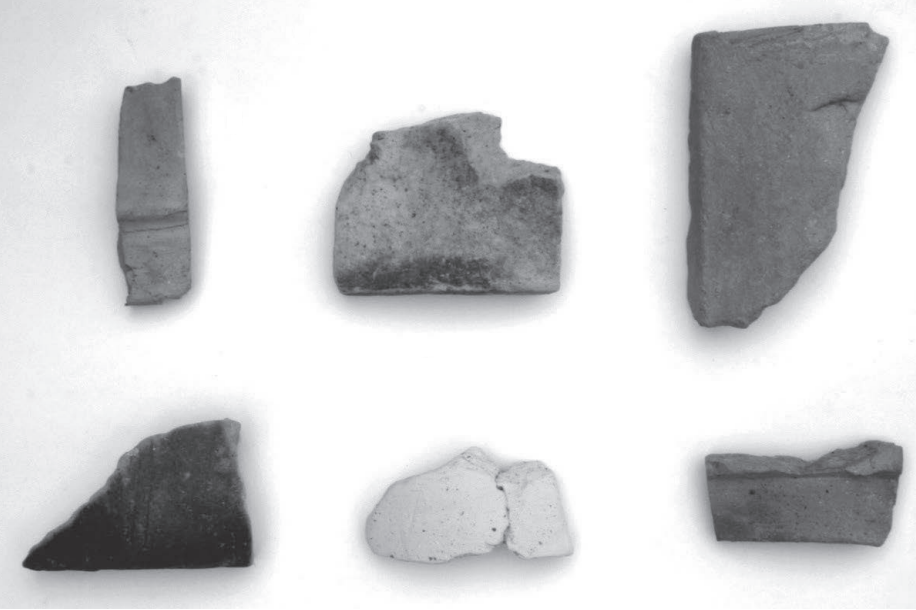

28 29


32 39

図版22　出土遺物④



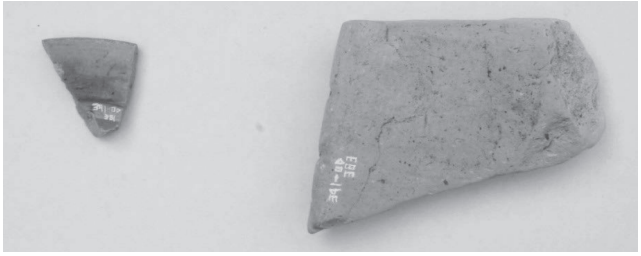


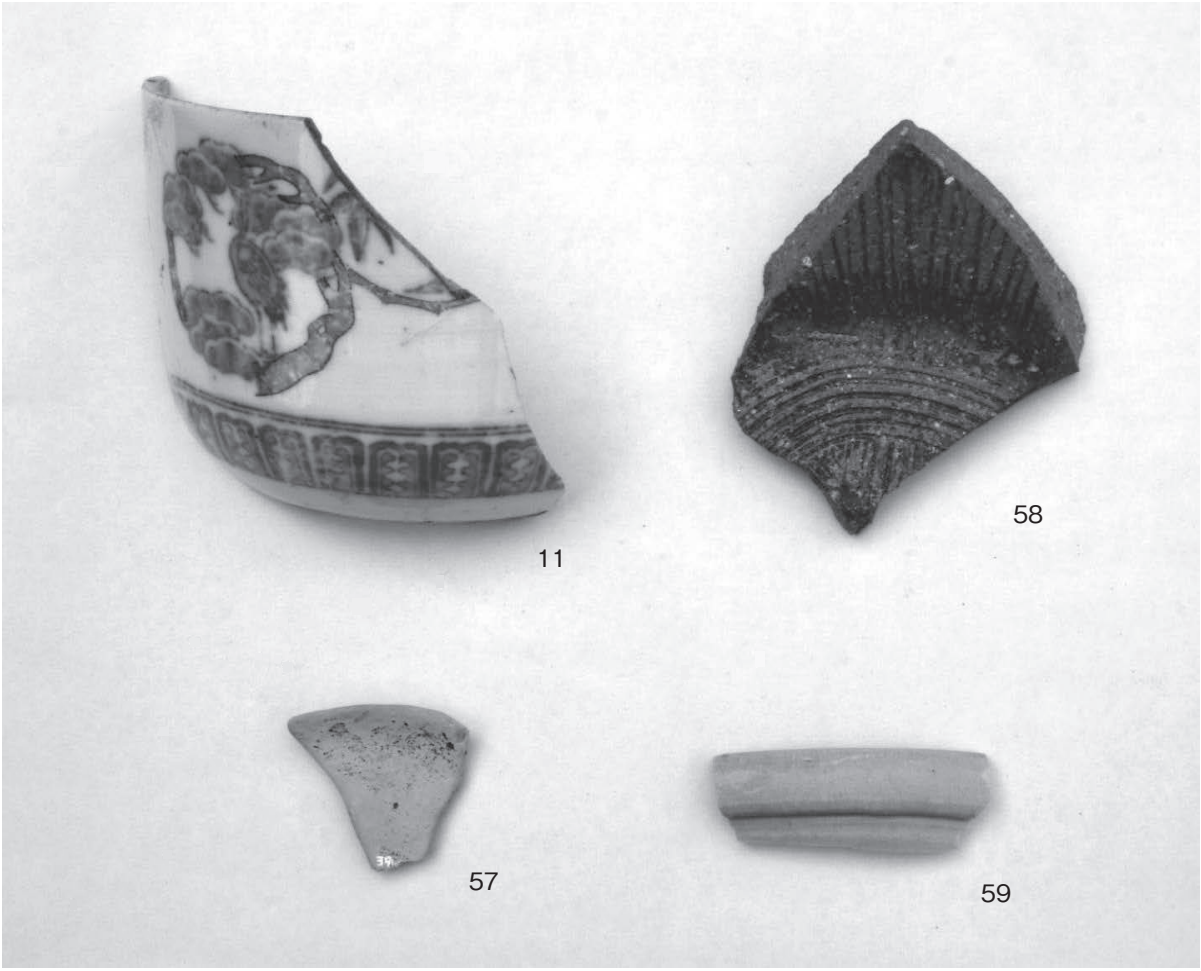


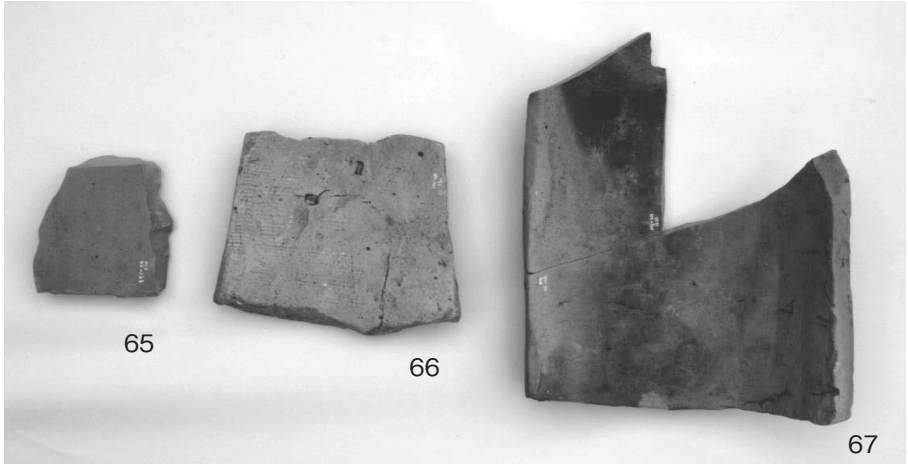
1
35

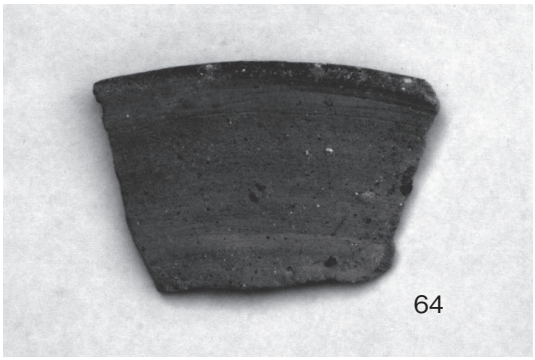
61
62

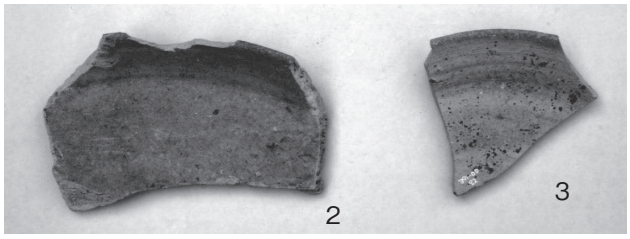
10

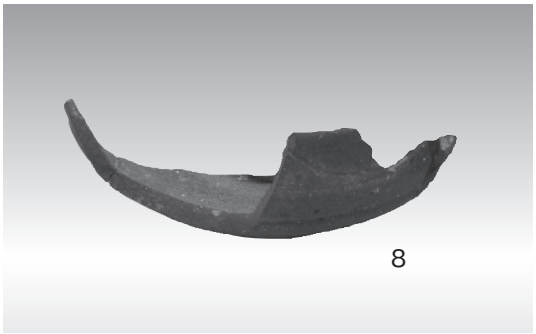


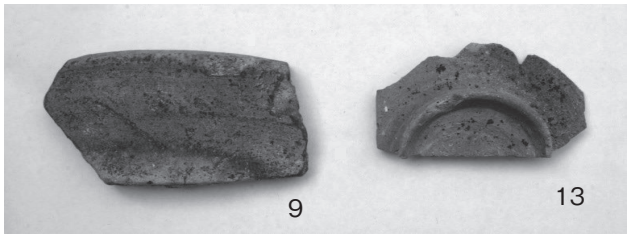

11
58
57
59


65
66
67


64


2
3


8


9
13

報　告　書　抄　録

ふりがな	おおつかではりいせき
書名	大塚出張遺跡
副書名	特別養護老人ホームえびすの郷建設に伴う発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	三木市文化研究資料
シリーズ番号	第27集
編著者名	金松　誠
編集機関	三木市教育委員会
所在地	〒673-0492　三木市上の丸町10番30号　℡0794-82-2000
発行年月日	平成26年（西暦2014）3月31日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
おおつかではりいせき 大塚出張遺跡	三木市大塚字出張206番6、201番11	28215	160391	34°47′59″	134°59′59″	確認調査 2010.10.21 本発掘調査 2011.1.11～2011.2.26	確認調査 44㎡ 本発掘調査　931㎡	特別養護老人ホーム建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
大塚出張遺跡	集落	飛鳥時代、平安時代	柱穴、溝、土坑、焼土遺構	須恵器、土師器、瓦	

三木市文化研究資料　第 27 集

大　塚　出　張　遺　跡

－特別養護老人ホームえびすの郷建設に伴う発掘調査報告書－

平成２６年３月３１日発行

編集・発行　三 木 市 教 育 委 員 会
〒673-0492　兵庫県三木市上の丸町１０番３０号
協　力　　社会福祉法人一陽会
〒673-0413　兵庫県三木市大塚２０６番地の６
印　刷　　小野高速印刷株式会社